福島県文化財調査報告書第453集

常磐自動車道遺跡調査報告54

後田A遺跡

２００９年３月

福島県教育委員会
㈶福島県文化振興事業団
東日本高速道路株式会社

常磐自動車道遺跡調査報告54

後田（うしろた）A 遺跡

序　　文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は，昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間，平成11年にいわき中央～いわき四倉間，平成14年にはいわき四倉～広野間，平成16年には広野～常磐富岡間が開通し，現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には，先人が残した貴重な文化遺産が所在しており，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は，それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に，我が国の歴史・文化等の正しい理解と，将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では，常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について，開発関係機関と協議を重ね，平成５年度以降，埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い，その結果をもとに，平成６年度から現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし，発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成18・20年度に行った浪江町の後田Ａ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が，文化財に対する御理解を深め，地域の歴史を解明するための基礎資料となり，さらには生涯学習等の基礎資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査から報告書の作成にあたり，御協力いただいた東日本高速道路株式会社，浪江町教育委員会，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成21年３月

福島県教育委員会
教育長　野　地　陽　一

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託を受けて，県内の大規模な開発に先立ち，開発対象地域内にある埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

常磐自動車道建設にかかる発掘調査は，平成６年度から開始し，いわき四倉ＩＣから常磐富岡ＩＣ間については楢葉パーキングエリアの一部を除き，平成13年度までに終了しております。

また，平成14年度からは常磐富岡ＩＣから相馬ＩＣ予定地間にかかる埋蔵文化財の発掘調査を本格的に開始し，平成20年度には楢葉町・浪江町・南相馬市・相馬市に所在する遺跡について調査を実施いたしました。

本報告書は，平成18・20年度に実施した浪江町に所在する後田Ａ遺跡の調査成果をまとめたものです。

後田Ａ遺跡は，江戸時代に相馬中村藩の保護政策のもと操業されていた大堀相馬焼の窯跡の一つです。部分的な窯跡の調査となりましたが，操業三百年を超える大堀相馬焼の歴史を解明する上で，貴重な資料を得ることができました。

本報告書の調査成果を郷土の歴史研究の基礎資料として，さらに地域社会を理解することや生涯学習の場で幅広く活用していただければ幸いです。

最後になりましたが，この調査に御協力いただきました浪江町並びに地域住民の皆様に，深く感謝申し上げますとともに，当事業団の事業の推進につきまして，今後とも一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年３月

財団法人　福島県文化振興事業団
理事長　富　田　孝　志

緒　　言

1　本書は，平成18・20年度に実施した常磐自動車道（いわき工区）遺跡調査の発掘調査報告である。

2　本書には平成18・20年度に実施した後田Ａ遺跡（第１・２次調査）の調査成果を収録した。
　後田Ａ遺跡　福島県双葉郡浪江町大字田尻字後田　埋蔵文化財番号：54700131

3　本発掘調査事業は，福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し，調査・報告にかかる費用は東日本高速道路株式会社が負担した。

4　福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5　財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査グループの下記の職員を配し，調査及び報告書作成にあたった。
　平成18年度
　　文化財主査　吉野　滋夫　　嘱　　託　高林　真人（平成19年３月まで現職）
　平成20年度
　　文化財副主査　三浦　武司

6　本書の執筆にあたっては，調査を担当した調査員が分担して行い，文責は文末に示した。

7　本書に掲載した自然科学分析は，次の機関に委託した。
　・胎土分析　　パリノ・サーヴェイ株式会社
　・窯壁等の耐火度分析　　ＪＦＥテクノリサーチ株式会社

8　引用・参考文献は執筆者の敬称を省略した。

9　本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査及び報告書の作成にあたり，次の諸機関・諸氏からご指導・ご協力をいただいた。
　浪江町教育委員会　　東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所
　　山田　秀安　　陶　　俊明　　佐藤　仁司

用　　例

1　本書の遺構実測図の用例は，次の通りである。

（1）座 標 値　後田Ａ遺跡の座標値は，世界測地系で設定した。

（2）方　　位　図中の方位は座標北を示す。表記がない遺構図は，全て図の真上を座標北とした。

（3）縮 尺 率　挿図のスケール右脇のカッコ内に示した。

（4）ケ　　バ　遺構内の傾斜部は「 ||IT 」の記号で表現し，相対的に緩傾斜の部分は「 ⊤ ⊤ 」で表現した。また，後世の撹乱部や人為的な削土部は「 ⊤ ⊤ 」の記号で表現した。

（5）土　　層　基本土層はアルファベット大文字Ｌとローマ数字を組み合わせてＬⅠ・Ⅱ・・とし，遺構内堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせてℓ１・２・・とした。土色については，『新版標準土色帖　22版』（小山正忠・竹原秀雄編著1999日本色研事業株式会社発行）を基準とした。

（6）線　　種　実線は上端・下端・撹乱範囲・調査区境，破線は推定線・抉り込み線を示す。その他の用例を挿図中に示した。

（7）標　　高　海抜高度を示した。

（8）網　　点　遺構に関する網点等の用例は，挿図中に示した。

2　本書における遺物実測図等の用例は，次のとおりである。

（1）縮　　尺　各挿図中のスケール右脇に縮小率を表示した。

（2）遺物番号　遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は，例えば，図１の２番の遺物を「図１－２」とし，写真図版中では「１－２」と表示した。

（3）遺物註記　出土位置，出土層位は遺物番号の右脇に表示した。

（4）計 測 値　計測値・石質は各実測図脇に表示した。（　）内の数値は推定値，［　］内の数値は遺存値を示した。

（5）遺物断面　粘土積上痕は一点鎖線で表記した。

3　本文中で使用した略号は次の通りである。

浪江町－ＮＥ	後田Ａ遺跡－ＵＴ・Ａ	グリッド－Ｇ
遺構外堆積土－Ｌ	遺構内堆積土－ℓ	陶器窯跡－ＳＲ
土　坑－ＳＫ	掘立柱建物跡－ＳＢ	柱　列－ＳＡ
小　穴－Ｐ	溝　跡－ＳＤ	特殊遺構－ＳＸ

目　　次

序　章

第１節　調査に至る経緯 …… 1

平成19年度までの調査経過

平成20年度の調査経過

第２節　遺跡周辺の自然環境過 …… 4

第３節　歴史的環境 …… 4

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形 …… 9

第２節　調査経過 …… 10

第３節　調査方法 …… 11

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構分布と基本土層 …… 12

第２節　陶器窯跡 …… 14

１号陶器窯跡（14）

第３節　土　　坑 …… 24

１号土坑（24）　２号土坑（26）　３号土坑（26）　４号土坑（26）

５号土坑（27）　６号土坑（27）　７号土坑（29）　８号土坑（30）

９号土坑（30）　10号土坑（31）　11号土坑（31）　12号土坑（31）

13号土坑（31）　14号土坑（33）　15号土坑（35）　16号土坑（35）

17号土坑（35）　18号土坑（36）　19号土坑（37）　20号土坑（37）

21号土坑（37）　22号土坑（39）　23号土坑（39）　24号土坑（39）

25号土坑（40）　26号土坑（40）　27号土坑（40）　28号土坑（47）

29号土坑（47）

第４節　掘立柱建物跡・柱列・小穴 …… 48

１号掘立柱建物跡（48）　１号柱列（49）　小穴（50）

第５節　溝　　跡 …… 50

１・２・３・４号溝跡（50）

第６節　特殊遺構 …… 51

１号特殊遺構（51）
第７節　遺構外出土遺物 …… 51

第３章　ま　と　め
第１節　遺物について …… 70
第２節　遺構について …… 77

付　章　自然科学分析
第１節　後田Ａ遺跡出土大堀相馬焼の胎土分析 …… 79
第２節　後田Ａ遺跡出土窯壁等耐火度分析調査 …… 88

挿　図・表・写真目次

［挿　図］

図１　常磐自動車道位置図…… 1
図２　遺跡周辺の環境…… 5
図３　周辺の遺跡…… 6
図４　調査位置図…… 9
図５　遺構配置図・基本土層…… 13
図６　１号陶器窯跡（１）…… 15
図７　１号陶器窯跡（２）…… 16
図８　１号陶器窯跡（３）…… 17
図９　１号陶器窯跡出土遺物（１）…… 18
図10　１号陶器窯跡出土遺物（２）…… 19
図11　１号陶器窯跡出土遺物（３）…… 20
図12　１号陶器窯跡出土遺物（４）…… 21
図13　１号陶器窯跡出土遺物（５）…… 23
図14　１～５号土坑…… 25
図15　６～９号土坑…… 28
図16　10～14号土坑 …… 32
図17　15～18号土坑 …… 34
図18　19～24号土坑 …… 38
図19　25～29号土坑 …… 41
図20　土坑出土遺物（１）…… 42
図21　土坑出土遺物（２）…… 43
図22　土坑出土遺物（３）…… 44
図23　土坑出土遺物（４）…… 45
図24　土坑出土遺物（５）…… 46
図25　土坑出土遺物（６）…… 47
図26　１号掘立柱建物跡…… 49
図27　１号柱列，１号特殊遺構…… 50
図28　遺構外出土遺物（１）…… 53
図29　遺構外出土遺物（２）…… 54
図30　遺構外出土遺物（３）…… 56
図31　遺構外出土遺物（４）…… 57
図32　遺構外出土遺物（５）…… 58
図33　遺構外出土遺物（６）…… 59
図34　遺構外出土遺物（７）…… 60
図35　遺構外出土遺物（８）…… 61
図36　遺構外出土遺物（９）…… 62
図37　遺構外出土遺物（10）…… 64
図38　遺構外出土遺物（11）…… 65
図39　遺構外出土遺物（12）…… 66
図40　遺構外出土遺物（13）…… 67

図41　遺構外出土遺物（14）…… 68
図42　出土陶器分類図（1）…… 71
図43　出土陶器分類図（2）…… 72
図44　出土陶器組成図…… 72
図45　陶器碗出土点数・法量分布図…… 73
図46　窯道具計測図（1）…… 75
図47　窯道具計測図（2）…… 76

［表］

表1　後田A遺跡周辺の遺跡一覧…… 7

［写真］

1　調査前遠景…… 95
2　調査区全景…… 95
3　1号陶器窯跡現況…… 96
4　1号陶器窯跡周辺全景…… 96
5　1号陶器窯跡…… 97
6　1～7号土坑…… 98
7　8～14号土坑 …… 99
8　15～21・23号土坑 …… 100
9　22・24～29号土坑 …… 101
10　1号掘立柱建物跡全景…… 102
11　1号特殊遺構，1～4号溝跡…… 102
12　1号陶器窯跡・土坑・遺構外出土遺物…… 103
13　土坑・遺構外出土遺物…… 104
14　遺構外出土遺物…… 105
15　土坑・遺構外出土遺物…… 106

付章　自然科学分析

第1節　後田A遺跡出土大堀相馬焼の胎土分析

［挿図］

図1　SiO_2-Al_2O_3散布図 …… 85
図2　長石類主要元素の散布図…… 85
図3　有色鉱物主要元素の散布図…… 86
図4　中平遺跡物原出土陶器の
　　有色鉱物主要元素の散布図…… 86

［表］

表1　試料一覧…… 80
表2　蛍光X線分析結果（化学組成）…… 82
表3　粘土試料の薄片観察結果…… 84
表4　中平遺跡物原出土陶器の
　　蛍光X線分析結果…… 84

［写真］

写真1　薄片顕微鏡写真…… 87

第2節　後田A遺跡出土窯壁等耐火度分析調査

［表］

表1　浪江町後田A遺跡耐火度分析資料…… 88
表2　耐火度試験結果…… 92
表3　ゼーゲルコーン溶倒温度比較表…… 92

［写真］

写真1　外観写真1…… 90
写真2　外観写真2…… 91
写真3　外観写真3…… 91

序　　章

第１節　調査に至る経緯

１．平成19年度までの調査経過

常磐自動車道は，埼玉県三郷市を起点として，千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を北進し，宮城県仙台市に至る高速道路として計画された路線である。この内，昭和63年度には三郷インターチェンジ（以下ＩＣと略す）～福島県いわき市のいわき中央ＩＣ間の供用が開始され，さらに，平成11年にはいわき四倉ＩＣ，平成14年には広野ＩＣ，平成16年４月には常磐富岡ＩＣまでの供用を開始している。

これら供用が開始された福島県内区間のいわき四倉ＩＣまでに所在する埋蔵文化財の内，いわき市四倉町大野地区に所在する10遺跡については，福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター（現，財団法人福島県文化振興事業団）に発掘調査を委託して，平成６～８年に実施した。また，福島県教育委員会では，いわき四倉ＩＣ以北の福島県内区間に所在する埋蔵文化財に関して，平成６年度より表面調査を実施し，平成10年度までに終了した。さらに，この表面調査の成果に基づき，平成７年度よりいわき四倉ＩＣ～富岡ＩＣ間の試掘調査を実施し，平成９年度から同区間に所在する遺跡の発掘調査も開始した。

平成９年度は，いわき市内の５遺跡と広野町内の１遺跡の計６遺跡について発掘調査を実施した。平成10年度は，いわき市内の４遺跡，広野町内の３遺跡のほか，新たに楢葉町内の３遺跡，富岡町内の２遺跡の計12遺跡について発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により，路線予定地内

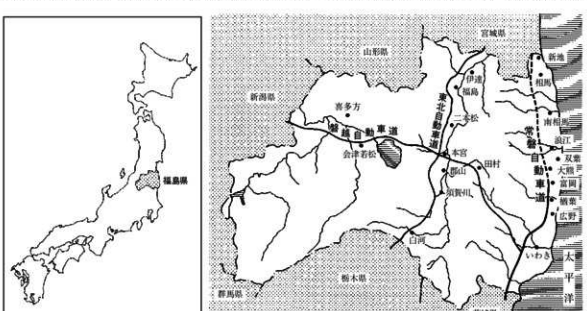


図１　常磐自動車道位置図

に所在する遺跡の内，いわき市に関る遺跡の発掘調査を全て終了した。

平成11年度は広野町内の４遺跡，楢葉町内の５遺跡の計９遺跡について，平成12年度は広野町内の１遺跡，楢葉町内の７遺跡，富岡町内の５遺跡の計13遺跡について発掘調査を実施した。平成13年度は楢葉町内の１遺跡，富岡町内の５遺跡の計６遺跡について発掘調査を実施し，楢葉パーキングエリアに関わる大谷上ノ原遺跡の一部の調査を残して，楢葉町以南の発掘調査を終了した。

平成14年度は，富岡町の１遺跡，大熊町の２遺跡の計３遺跡について発掘調査を実施した。なお，富岡ＩＣまでの区間については当初，日本道路公団東北支社（現，東日本高速道路株式会社東北支社）いわき工事事務所，富岡ＩＣ以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが，７月から富岡ＩＣ～浪江町内までの区間についても，いわき工事事務所が管轄することとなった。

平成15年度は，いわき工事事務所管轄区域（以下，いわき工区）の浪江町内で２遺跡，相馬工事事務所管轄区域（以下，相馬工区）の相馬市内で２遺跡の計４遺跡について発掘調査を実施した。平成16年度は，いわき工区で大熊町内の３遺跡，相馬工区で相馬市内の１遺跡，鹿島町内（現，南相馬市鹿島区）の２遺跡の計６遺跡について発掘調査を実施した。平成17年度は，いわき工区で大熊町内の３遺跡，双葉町内の２遺跡，浪江町内の２遺跡，相馬工区で相馬市内の１遺跡，南相馬市内の５遺跡の計13遺跡について発掘調査を実施した。

平成18年度は，いわき工区と相馬工区で計18遺跡の発掘調査を実施した。このうち，いわき工区では大熊町内に所在する上平遺跡（４次調査）と浪江町内に所在する沢東Ｂ遺跡（２次調査）・原Ｂ遺跡・朴廻Ｂ遺跡・朴廻Ｃ遺跡・後田Ａ遺跡・東畑遺跡の計７遺跡で発掘調査を実施した。

平成19年度のいわき工区に関る遺跡発掘調査は，浪江町に所在する仲禅寺遺跡・小廻遺跡・朴廻Ｄ遺跡・田子平遺跡の計４遺跡で発掘調査を実施した。このうち，小廻遺跡・朴廻Ｄ遺跡については保存範囲すべて，仲禅寺遺跡は町道・電柱部分を除き，田子平遺跡は保存範囲の南側部分について発掘調査を終了した。

２．平成20年度の調査経過

平成20年度の常磐自動車道いわき工区に関る遺跡発掘調査は，当初，楢葉町内に所在する大谷上ノ原遺跡と浪江町内に所在する仲禅寺遺跡・沢東Ｂ遺跡・田子平遺跡・古堤遺跡の５遺跡を対象に，５名の調査員を配置して開始した。その後，工事計画・設計の変更などがあり新たに浪江町内に所在する原Ｂ遺跡・後田Ａ遺跡・朴廻Ａ遺跡の３遺跡が追加され計８遺跡について調査を実施した。調査面積は総計で15,900㎡である。

発掘調査は，工事の優先度が高い仲禅寺遺跡・沢東Ｂ遺跡と保存範囲の広い大谷上ノ原遺跡の３遺跡について４月から開始した。

仲禅寺遺跡の調査は，平成19年度に引き続く２次調査で，町道・電柱等の移設部分の100㎡を対象に４月14日から開始し，１次調査と同様に近世大堀相馬焼の陶器窯跡に伴う窯道具類と縄文時代の遺物を検出した。４月22日に現地調査を終了し，引渡しを行った。

沢東Ｂ遺跡の調査は，平成15・18年度に引き続く３次調査で，道路部分の800㎡を対象とし，４

月９日から開始した。２次調査の続きとなる溝跡や掘立柱建物跡等の中・近世の遺構を確認し，５月23日に調査を終了した。その後，連絡所等の撤去を行い５月27日に現地引渡しを行った。

大谷上ノ原遺跡の調査は，平成11・12年度に引き続く３次調査で，楢葉パーキングエリアに関る7,000㎡を対象とし，４月14日から開始した。調査の進展に伴い，古代の遺構・遺物と縄文時代の遺物が検出されたが，１・２次調査で確認された旧石器時代の遺物は検出できなかった。調査は順調に進み，10月７日に現地調査を終了した。調査区の一部埋め戻し作業や連絡所等を撤去し，10月23日に現地引渡しをおこなった。

原Ｂ遺跡の調査は，平成18年度に引き続く２次調査で，200㎡を対象に５月26日から開始した。数量的には少ないものの縄文時代・弥生時代・平安時代・近世の遺構・遺物が検出され，６月６日に調査を終了し，６月24日に現地引渡しを行った。

後田Ａ遺跡の調査も平成18年度に引き続く２次調査で，400㎡を対象に６月16日から調査を開始した。後田Ａ遺跡は近世大堀相馬焼の陶器窯跡で，今回の調査区からは土坑や掘立柱建物跡が検出され，陶器生産に関る作業場の一部と考えられる。調査は６月30日に終了し，７月３日に現地引渡しを行った。

朴廻Ａ遺跡は，福島県教育委員会が７月に実施した試掘調査によって，新たに保存範囲が示された縄文時代の遺跡で，400㎡を対象に９月２日から調査を開始した。縄文時代早・中期の遺構・遺物が検出され，９月26日に調査を終了し，９月30日に現地引渡しを行った。

古堤遺跡は常磐自動車道いわき工区の中で，最北端に所在する。遺跡までの進入路の関係から調査は10月６日から開始した。縄文時代の落し穴と平安時代の簡易な木炭窯が検出され，遺跡の性格が縄文時代の狩猟場と平安時代の製鉄関連遺跡と判明した。調査は11月14日に終了し，11月21日に現地引渡しを行った。

田子平遺跡の調査は，平成19年度に引き続く２次調査で，6,000㎡を対象に５月12日から開始した。５月16日には工事用道路取付部分，８月19日には北側部分，10月７日には中央部分，10月23日には南側町道部分と工事計画上，優先部分からの調査・引渡しとなったが，新たな成果を得ることができた。

平成19年度の調査では，縄文時代後期後葉を主体とする集落跡と判明し，多数の竪穴住居跡・埋甕群や祭祀関連と考えられる稀少で多彩な遺物が出土した。今回の調査では，新たに掘立柱建物跡群や埋甕群の遺構，耳飾や土笛等の遺物が検出され，集落跡範囲の北東端を確認した。これらの成果を受け，８月23日には福島県教育委員会から委託されている「遺跡の案内人（ボランティア）」事業による現地公開が行われ，雨天にもかかわらず多数の見学者が訪れた。

また，今回の調査では，平安時代の竪穴住居跡も検出され，田子平遺跡が縄文時代・平安時代の複合遺跡と判明した。遺構の多くは重なりながら建て替えられており，順次精査を行いながら記録作業を進め12月11日にすべての現地調査を終了し，現地引渡しを行った。　（山　岸）

第２節　遺跡周辺の自然環境

位　置　福島県は東北地方南端に位置し，面積13,782㎢である。このうち，およそ８割は山地で占められ，東部には太平洋に沿って阿武隈高地，中央部には奥羽山脈，西部には越後山脈がせまっている。これらの山地はほぼ南北に走り，県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の三地域に区分される。後田Ａ遺跡は，浜通り地方中央部の双葉郡内に所在する。行政区分では，後田Ａ遺跡は浪江町田尻地区に位置する。

地　形　浪江町の地形は大別すると西半分が阿武隈高地，東半分が浜通り低地帯となっている。阿武隈高地は阿武隈高地主部と阿武隈高地東縁起伏帯に分かれ，浜通り低地帯は丘陵地・段丘・低地に分かれる。丘陵地は室原・加倉地区の一部と双葉町との境にある双葉丘陵・南相馬市との境にある耳谷丘陵などが発達し，標高は80mほどである。段丘・低地は請戸川・高瀬川に沿って発達している。段丘は高位・中位・低位段丘に分かれる。高位段丘は町内ではあまり発達しておらず，室原・田尻地区の一部でみられるだけである。標高は70mほどである。中位段丘は請戸川・高瀬川各左岸に発達し，標高40mほどである。低位段丘は高瀬川の右岸で発達し，標高20mほどである。

低地は谷底平野・自然堤防・後背湿地・旧河道・三角洲に分かれる。谷底平野は請戸川・高瀬川両岸沿いに発達する。高瀬川の左岸，樋渡地区には自然堤防と後背湿地が発達している。請戸川と高瀬川は，海岸から1.5kmほどで合流するが，この近くでは旧河道が複雑に刻まれ，頻繁な洪水の痕跡を示している。請戸川と高瀬川の合流地点から河口側では，三角洲が発達している。

地　質　後田Ａ遺跡は大堀相馬焼の窯跡が検出されている。大堀相馬焼の陶土は，浪江町井手字美森から採掘されていた。ここの表層地質は向山層もしくは石城層に相当する。層中の粘土は石英・長石及び粘土を主とした砂質粘土層で，いわゆる蛙目粘土に相当し，その間に厚さ0.5～１ｍの暗灰色の粘土（木節粘土）が挟まれている。　（吉　野）

第３節　歴史的環境

浪江町における遺跡及び周辺地域の遺跡について概観する。浪江町の歴史は，旧石器時代まで遡ることができ，遺跡の数は少ないものの散布地として北上ノ原遺跡が確認されている。さらに朴廼Ｄ遺跡からは，ナイフ型石器・楔型石器・剥片などが出土している。

縄文時代の遺跡は，丘陵地や段丘から多数確認されている。早期初頭の無文土器が出土した乱塔前遺跡，早期中葉の集落跡である原Ｂ遺跡などがある。中期後葉から後期にかけての集落跡として，順礼堂遺跡・中平遺跡・沢東Ｂ遺跡などがある。後期後葉の集落跡として田子平遺跡があり，後期から晩期にかけての集落跡である七社宮遺跡がある。

弥生時代の遺跡は町内では数少ないが，上ノ原遺跡からは朱彩された弥生土器・石庖丁・石斧・

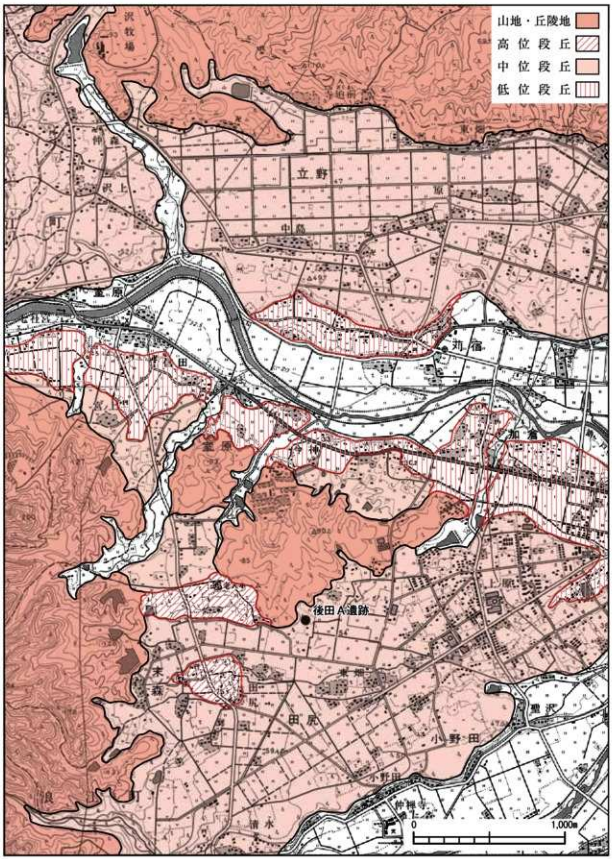


図２　遺跡周辺の環境

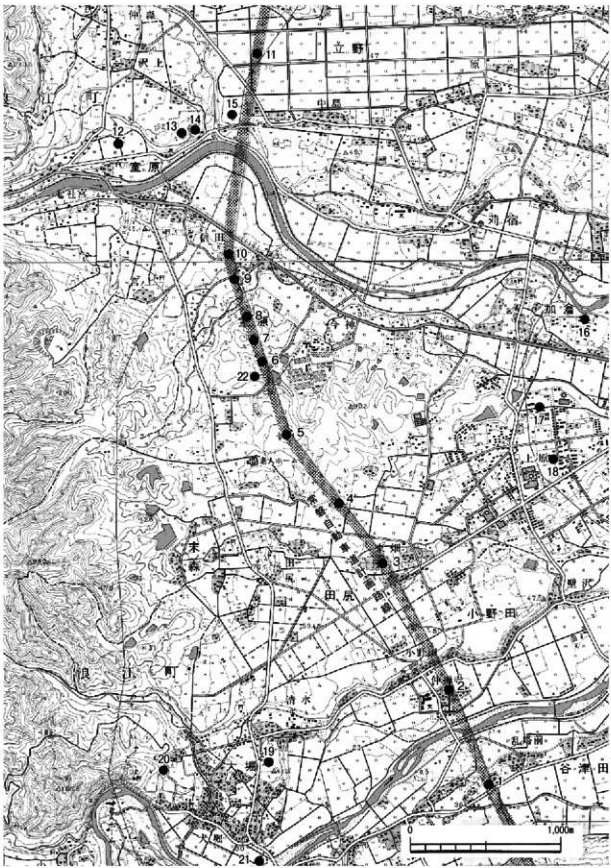


図3　周辺の遺跡

表１　後田Ａ遺跡周辺の遺跡一覧

No.	遺　跡　名	遺跡番号	所　在　地	遺　跡　の　概　要
1	乱塔前遺跡	54700135	浪江町大字谷津田字乱塔前	縄文時代の集落跡
2	仲禅寺遺跡	54700134	浪江町大字小野田字仲禅寺	縄文時代の集落跡　近世の陶器窯跡
3	東畑遺跡	54700115	浪江町大字田尻字東畑	近世の区画溝跡
4	**後田Ａ遺跡**	54700131	浪江町大字田尻字後田	近世の陶器窯跡
5	朴迫Ｃ遺跡	54700138	浪江町大字室原字朴迫	平安時代の木炭窯跡
6	朴迫Ｂ遺跡	54700126	浪江町大字室原字朴迫	縄文時代の集落跡　平安時代の木炭窯跡
7	朴迫Ｄ遺跡	54700139	浪江町大字室原字朴迫・八龍内・田ノ草	平安時代の木炭窯跡
8	小迫遺跡	54700142	浪江町大字室原字小迫	縄文時代の狩猟場　平安時代の集落跡
9	田子平遺跡	54700125	浪江町大字室原字田子平	縄文時代の集落跡
10	原Ｂ遺跡	54700123	浪江町大字室原字原	縄文時代の集落跡
11	沢東Ｂ遺跡	54700137	浪江町大字立野字沢東	縄文時代の集落跡　中世・近世屋敷跡
12	七社宮遺跡	54700010	浪江町大字室原字七社宮	縄文時代の集落跡
13	立野古墳群	54700012	浪江町大字立野字順礼堂	古墳
14	順礼堂遺跡	54700011	浪江町大字立野字順礼堂	縄文時代の集落跡
15	沢海戸遺跡	54700088	浪江町大字立野字沢海戸	縄文時代の散布地
16	加倉古墳群	54700027	浪江町大字加倉字下加倉	古墳
17	上ノ原遺跡	54700030	浪江町大字川添字北上ノ原	縄文～平安時代の散布地
18	北上ノ原遺跡	54700093	浪江町大字川添字北上ノ原	旧石器時代の散布地
19	漆畑遺跡	54700094	浪江町大字大堀字漆畑	縄文時代の散布地
20	中平遺跡	54700043	浪江町大字大堀字中平	縄文時代の集落跡
21	大堀長井屋窯跡	54700096	浪江町大字大堀字漆畑	近世の陶器窯跡
22	朴迫Ａ遺跡	54700127	浪江町大字室原字朴迫	縄文時代の散布地

紡錘車などが出土している。

古墳時代では４世紀末～５世紀初頭の前方後方墳である本屋敷１号墳が著名である。さらに，本屋敷古墳群が立地する請戸川左岸の中位段丘には，前方後円墳の堂の森古墳・狐塚古墳がある。そのなかでも堂の森古墳は全長が60mあり，相双地方最大規模の古墳である。さらに請戸川右岸の低・中位段丘には，古墳時代中期から後期にかけての加倉古墳群や上ノ原古墳群が築かれている。古墳時代の集落跡としては，前期の鹿屋敷遺跡・狐塚遺跡，後期の土師器が採集された鍛冶屋川原遺跡などがある。

奈良・平安時代の集落遺跡としては，鹿屋敷遺跡・植畑遺跡・狐塚遺跡・小迫遺跡などがある。特に，鹿屋敷遺跡からは竪穴住居跡・掘立柱建物跡が多数確認されている。平安時代の製鉄関連遺跡としては太刀洗遺跡，朴迫Ｂ・Ｃ・Ｄなどの諸遺跡がある。律令制下では浪江町は標葉郡に含まれ，双葉町郡山五番遺跡が標葉郡衙とされている。

中世では，浪江町は標葉氏の支配下におかれる。標葉氏の居城は請戸館（大平山城跡）・本城館・権現堂城と移り，明応元年（1492）には相馬氏により滅ぼされ，以後相馬氏の領地となる。

近世では相馬藩の領地となり，浜街道の高野宿として栄えた。高野宿は火災が多かったため，火伏せとして寛政10年（1798）には「浪江」と改名された。近世の代表的な遺跡としては，出口一里塚や北原御殿跡などがある。出口一里塚は慶長９年（1604）に相馬藩が構築したもので，東塚と西塚の対で遺存している。北原御殿跡は５代藩主相馬昌胤の隠居所で，現在は大聖寺が位置している。

大堀相馬焼は，『奥相志』によると元禄３年（1690）に相馬領大堀村で陶器窯業が始まるとされている。18世紀以降相馬藩の保護と規制のもとで発展し，三春城跡・仙台城跡や江戸の屋敷跡などからも出土していることから，広域な供給圏を確保していたことが窺われる。しかし，明治の廃藩置県や大正年間の不況により，廃業者が相次ぎ，現在，大堀相馬焼の窯元は20数戸となっている。

発掘調査された大堀相馬焼の窯跡としては，長井屋窯跡・後田Ａ遺跡・大熊町山神窯跡，灰原が調査された中平遺跡・仲禅寺遺跡などがある。長井屋窯跡は19世紀前葉から大正12年にかけて，山神窯跡は18世紀末葉の操業とされている。浪江町教育委員会発行の『大堀・長井屋窯跡』所収の大堀相馬焼窯跡分布図によると浪江町内で59基の旧窯跡が記されているが，そのなかで『福島県遺跡地図』に遺跡として登録されているのは陶吉郎窯跡・岳堂窯跡・大堀Ａ・Ｂ諸遺跡など僅かである。さらに竹島國基氏の調査によると，浪江町以外にも相馬市・双葉町・大熊町などでも大堀相馬焼の窯跡が確認されている。（吉　野）

参　考　文　献

相馬市史編纂会　1969『相馬市史４　資料編１（奥相志）』
竹島國基　1974「相馬の民窯」『行方文化』第２集
浪江町史編集委員会　1979『浪江町史』
福島県教育委員会　1985『「歴史の道」調査報告書』「浜街道　勿来―新地」
石川隆司　1987「福島県浪江町の土師器」『法政考古学』第12集　法政考古学会
大堀相馬焼共同組合　1988『大堀相馬焼創業三百年記念誌』
浪江町教育委員会　1989『大堀・長井屋窯跡』
久保和也ほか　1990『原町及び大悪地域の地質』地域地質研究報告　地質調査所　通商産業省工業技術院
福島県　1990『原町・大悪』土地分類基本調査
福島県　1991『浪江・磐城富岡』土地分類基本調査
久保和也ほか　1994『浪江及び磐城富岡地域の地質』地域地質研究報告　地質調査所　通商産業省工業技術院
西　徹雄　監修　2000『図説　相馬・双葉の歴史』郷土出版社

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置と地形

後田Ａ遺跡は，双葉郡浪江町大字田尻字後田に所在する。本遺跡はＪＲ常磐線浪江駅から西南西約1.8kmの地点に位置し，本遺跡の約400m西には阿武隈高地の東縁を南北に走る県道いわき・浪江線，約600m北には一般国道114号が東西に走っている。

田尻行政区は浪江町の中央やや東寄りに位置する。地形的には高瀬川左岸の標高50m程の中位段丘が大半を占め，一部に標高70～80m程度の高位段丘や東西にのびる独立丘陵がみられる。

後田地区は田尻行政区の北部に位置する。本遺跡は後田地区の北東部に所在し，中位段丘の末端に位置する。

調査区は南向き緩斜面に立地し，地形は北西から南東の方向に緩やかに傾斜している。調査区の

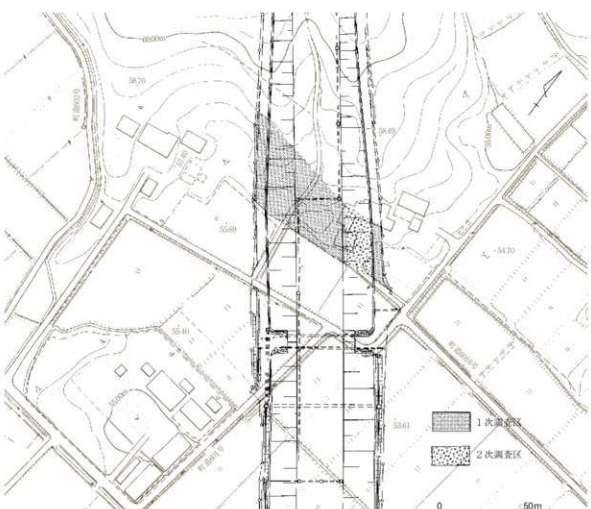


図４　調査位置図

標高は54.7～57.4mで，調査区内の比高差は2.7mである。現況は宅地及び山林であった。

本遺跡の南南東約900mの所には，現在も23軒の国指定伝統工芸品大堀相馬焼の窯元が操業している大堀・小野田・井手地区がある。大堀相馬焼の陶土が採掘された美森山は，大堀地区一円から南へ約３km，後田Ａ遺跡からは南へ約3.9kmの双葉町との境界付近にある。

本遺跡から南へ50mにある民家にもかつて陶器窯跡があったと言われている。（吉　野）

第２節　調査経過

後田Ａ遺跡は，平成８年度実施した分布調査で発見された遺跡である。陶器・窯道具が採集されたことから，近世の窯業遺跡として24,700㎡が登録された。平成15年度には，後田Ａ遺跡に隣接するＮ－Ｂ５の試掘調査で陶器窯跡が発見された。このことから，Ｎ－Ｂ５の保存面積を後田Ａ遺跡に含めて2,300㎡を保存面積とした。

平成18年度の調査経過

平成18年度は1,900㎡を対象にして，発掘調査を調査員２名で実施した。４月下旬から調査を開始した。調査区内に繁茂している篠竹・熊笹・アカザなどを刈り払い陶器窯跡を再確認した。５月上旬にはバックホーで駐車場・プレハブ用地の造成を行った。その後，バックホー，クローラーダンプを使用し，伐採木の移動を開始した。調査事務所・作業員休憩所・トイレを設置後，発掘器材を搬入した。５月中旬には伐採木の移動が終了し，表土剥ぎを開始した。併行して工事区にかかる陶器窯跡の精査と遺構検出を調査区の西側から開始した。５月下旬には表土剥ぎが終了した。

６月上旬には測量杭を設置した。遺構検出の結果，調査区の南側にある塚状の高まりが盛土であることが判明したため，除去を開始した。併せて，検出した土坑の精査に着手した。６月中旬には盛土中から多量の陶器が出土した。６月下旬には遺構精査と遺物洗浄を併行して実施した。

７月に入ると連日の雨で作業日の確保が困難になった。７月22日には遺跡の案内人による現地公開が開催され，県内外から多数の見学者が訪れた。７月下旬にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。陶器窯跡の精査を再開し，８月上旬には陶器窯跡の精査が終了した。８月下旬には土坑の精査と地形測量を調査員１名で対応し，残りの調査員１名は朴廼Ｂ遺跡の準備作業に着手した。８月31日には現地での調査を終了した。調査日数は延べ57日である。９月８日には東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所に引き渡しを行った。なお，陶器窯跡の未調査部分については，法面にシートを掛け土嚢を積み上げて養生した。（吉　野）

平成20年度の調査経過

年度当初には本遺跡の発掘調査の予定はなかったが，連絡調整会議の結果Ⅱ期線部分として未発掘であった部分の発掘調査を行うこととなった。５月15日に福島県教育委員会から指示を受け，㈶福島県文化振興事業団が実施した。発掘調査は平成20年６月16日から，調査員１人で行った。駐車場の造成及びトイレの設置と併行して，重機による表土剥ぎを開始した。翌17日から作業員の雇用

を開始して，遺構検出作業を進めた。調査１週目中ほどにはおおむね遺構検出が終了し，土坑を７基とピットを確認した。土坑の精査から開始した。調査２週目からはピット群の調査を開始した。１棟の掘立柱建物跡と１列の柱列を確認した。調査区全景写真，記録作成を行い，６月30日には調査を終了した。７月３日に東日本高速道路株式会社へ遺跡を引き渡した。（三　浦）

第３節　調 査 方 法

本遺跡の調査においては，遺構の位置や遺物出土地点を明確にするため，一辺10mの方眼を調査区全域に設定し，グリッドと呼称した。グリッド番号は，北から南へはアラビア数字で１・２・３…，西から東へはアルファベットを用いてＡ・Ｂ・Ｃ…とし，組み合わせてグリッドを表示した。

発掘調査にあたっては，バックホーで表土除去を行った。遺構の精査に当たっては，遺構の特性や遺構の遺存状態にあわせて，土層観察用の畦を設け，堆積土の状態や遺物の出土状況に留意しながら精査・記録に努めた。

図化にあたっては，世界測地系による国土座標を基準とし，Ｘ・Ｙ軸の値を図中に示した。縮尺は，遺構の特性を考慮しながら平面図・断面図を１/10・１/20縮尺で記録した。遺跡の全体図は１/300縮尺で作図した。

記録写真は35㎜判カメラを使用した。モノクロ・カラーリバーサルフィルムを用いて撮影し，両者同一被写体で撮影した。併せて，デジタルカメラも使用した。また，無線操縦のヘリコプターによる空中写真撮影も実施した。

遺物は大量の陶器・窯道具の出土があったため，現地においても洗浄を実施した。窯道具については形態分類・計測を現地で行い，形態ごとに選別して持ち帰った。窯体材については，平成16年に福島県教育委員会によって出された『出土品の取り扱い基準の運用指針』に従いサンプルのみを持ち帰った。

調査時の記録・資料は財団法人福島県文化振興事業団で整理を行い，各種台帳を作成して閲覧可能な状態にした後，福島県文化財センター白河館で収蔵・管理の予定である。（吉　野）

第２章　遺構と遺物

後田Ａ遺跡から検出された遺構には，陶器窯跡以外に土坑29基，掘立柱建物跡１棟，柱列１列，溝跡４条，特殊遺構１基，小穴29基を検出した。出土遺物は縄文土器，陶磁器，窯道具，銭貨等が認められた。縄文時代，近世，近代に含まれる。

第１節　遺構分布と基本土層

遺構分布（図５）

後田Ａ遺跡は南向き緩斜面に立地する。陶器窯跡は調査区西端に位置し，路線外に跨っている。今回の調査では陶器窯跡の東端部のみを調査した。土坑は調査区西側のＤ・Ｅ１～３グリッドと調査区東半に集中して造られている。陶土を保管していたと想定される（ＳＫ６・16，ＳＸ１）や水溜や井戸の可能性が想定される（ＳＫ１・２・７・15・17・21・24・25）が認められた。ピットは主に調査区東南端に位置している。掘立柱建物跡や柱列も位置することから，陶器製作工房がこの区域に存在し，さらに南や東側に続いていたと考えている。　（高　林　　三　浦）

基本土層（図５）

本調査区の基本土層は，色調・土色などの特徴からＬⅠ～ＬⅢまで３区分し，ＬⅡはさらにⅡａ～Ⅱｃに細分した。調査区の堆積状況は，調査区中央部で南北方向に，調査区西部で東西方向に観察したものである。図２の基本土層図は表土を除去した後に記録したものである。

ＬⅠは現表土及び盛土である。調査区の中央に盛土が厚く堆積していた。後田Ａ遺跡の現況は宅地跡であったため，宅地造成の際に整地されたと考えられる。盛土中に多量の陶器が混入していた。層厚は20～60㎝である。

ＬⅡａは黒褐色土である。調査区の北側に堆積している。層厚は10～30㎝である。

ＬⅡｂは灰黄褐色砂である。調査区の南側に堆積している。層厚は５～10㎝の薄層である。

ＬⅡｃは暗褐色土である。調査区の南側で確認された。層厚は５㎝弱と非常に薄い層である。

ＬⅢは基盤層で，明褐色粘質土である。部分的にＬⅡａとの間にＬⅢ塊を含むにぶい黄褐色土が堆積している。この土は漸移層で，ＬⅢ´とした。　（高　林）

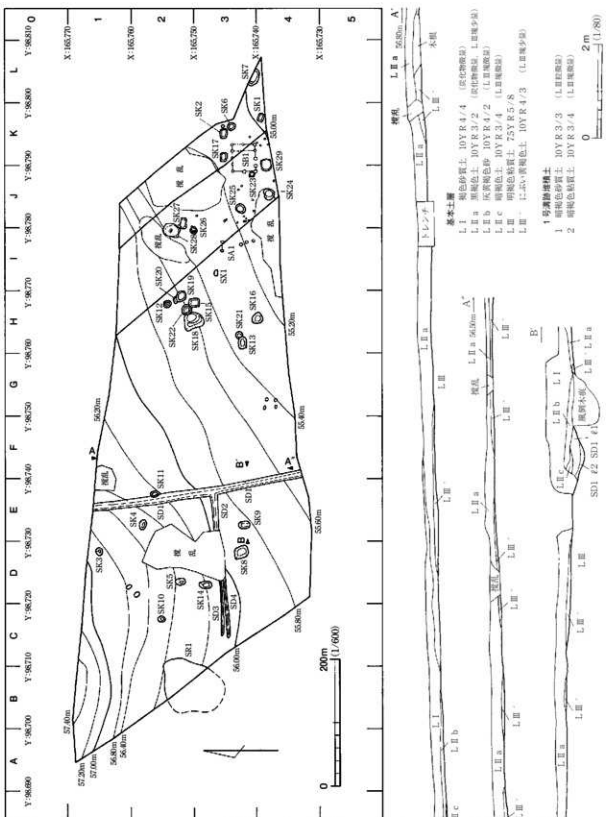


図5　遺構配置図・基本土層

第２節　陶器窯跡

陶器窯跡を１基検出した。調査区の西端に位置し，窯跡は調査区外に延びている。一部のみの調査となった。窯跡は２回の造り替えが認められた。

１号陶器窯跡　ＳＲ１

遺　　構（図６～８，写真３～５）

１号窯跡はＩ区西端中央のＢ２グリッド周辺に位置する。調査は窯跡の一部に止まり，その大半は調査区外にある。窯跡は２回造り替えされている。新しい操業面をＡ面とし，古い操業面をＢ面とした。

Ａ面　窯尻の一部を検出した。底面は焼土塊に白色砂粒が混じっていた。底面には長方形のレンガと不整長方形の粘土塊が配置されていた。長軸を南北方向に向け，３個４列が配置されている状況であった。列の間隔は16cmである。南端の一列は長軸方向を東西に向けて配置されている。確認した施設は，火格子と呼ばれる炎の通り口に相当する。窯跡の最も高い場所にあるので，捨間と想定できる。Ａ面の推定規模は，長軸がほぼ南北方向で全長が6.7m，焼成室幅が2.6mである。

Ｂ面　連房式登窯で，窯跡の約半分と捨場の一部を検出した。床面は焼土塊に白色砂粒が混じっていた。床面の傾斜度は17°である。長軸は真北に対して西側に傾いている。全長5.8m，幅は2.8mと考えられる。焼成室には仕切りのような施設はなく，窯を廃棄する際に取り去ったものと考えている。

堆積土は，ℓ１がＡ面を築くための整地層である。ℓ２が窯体片を主体として陶器・窯道具を廃棄した層で，窯跡の北側と南側の２箇所に形成されていた。ℓ３～７がＢ面操業時の窯を構築した時の整地層である。

遺　　物（図９～13，写真12）

本窯跡からは，5,274点の遺物が出土した。遺物は陶器・窯道具・窯体などである。陶器の器種は碗・皿・火入・片口・鉢・すり鉢などである。図化した陶器・窯道具を図９～13に示した。これらの遺物は，Ａ面の調査箇所がごく僅かなことから，基本的にはＢ面に伴うものと考えている。

碗　碗は破片数にして4,352点出土している。最も数多く出土しているもので，その大半は施釉されていない。図９と図10－１～11には施釉されていないものを示した。これらは個体数にして105点ある。窯尻から下った傾斜変換点から多く出土したが，図９－11・19は窯跡の側面下から出土した。図９－１～３は腰折碗，図９－４～28・図10－１～10は丸碗である。このなかでは丸碗の出土が最も多い。丸碗は口径10～12cmで器高６～７cmの大きさが多い。図９－４～８のように口径９cm以下で器高５cmの小型の碗，図９－26・図10－２・３のように口径13cm以上で器高８cm以上の大型の碗がある。図10－５～10は体部外面下端に沈線を巡らすものである。

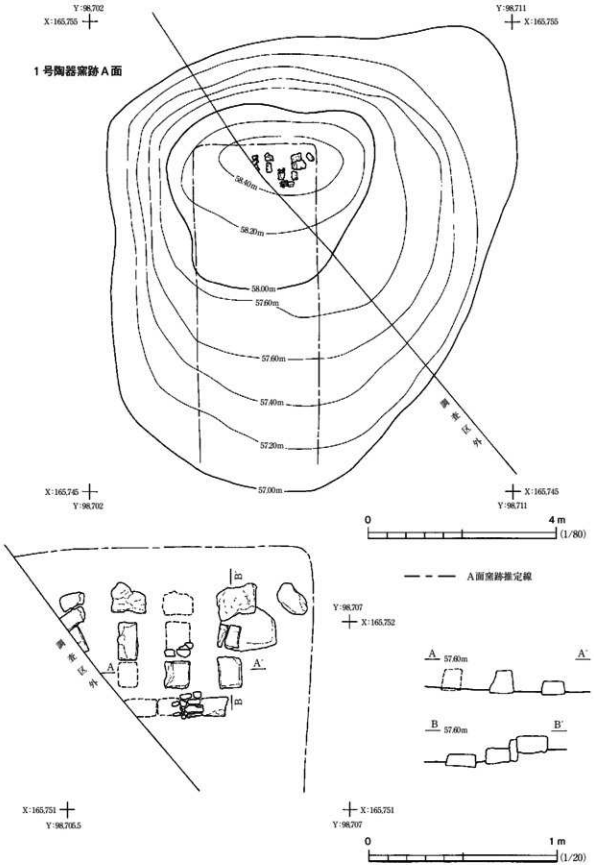

1号陶器窯跡A面
Y:98,702
X:165,755
Y:98,711
X:165,755
58.40m
58.20m
58.00m
57.60m
57.60m
57.40m
57.20m
57.00m
調査区外
X:165,745
Y:98,702
X:165,745
Y:98,711
0
4m
(1/80)
A面窯跡推定線
Y:98,707
X:165,752
A
A'
B
B'
A
57.60m
A'
B
57.60m
B'
X:165,751
Y:98,705.5
X:165,751
Y:98,707
0
1m
(1/20)

図6　1号陶器窯跡（1）

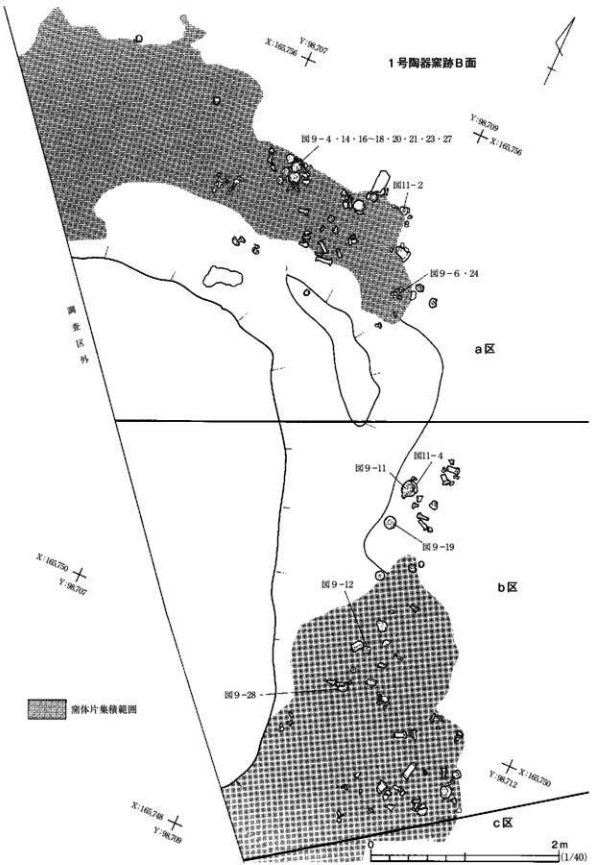

1号陶器窯跡B面
X:165,707
Y:96,707
X:165,756
Y:96,709
X:165,756
Y:96,712
X:165,750
Y:96,707
X:165,748
Y:96,709
X:165,750
Y:96,712
図9－4・14・16～18・20・21・23・27
図11－2
図9－6・24
図9－11
図11－4
図9－19
図9－12
図9－28
調査区外
a区
b区
c区
窯体片集積範囲
0
2m
(1/40)

図７　１号陶器窯跡（２）

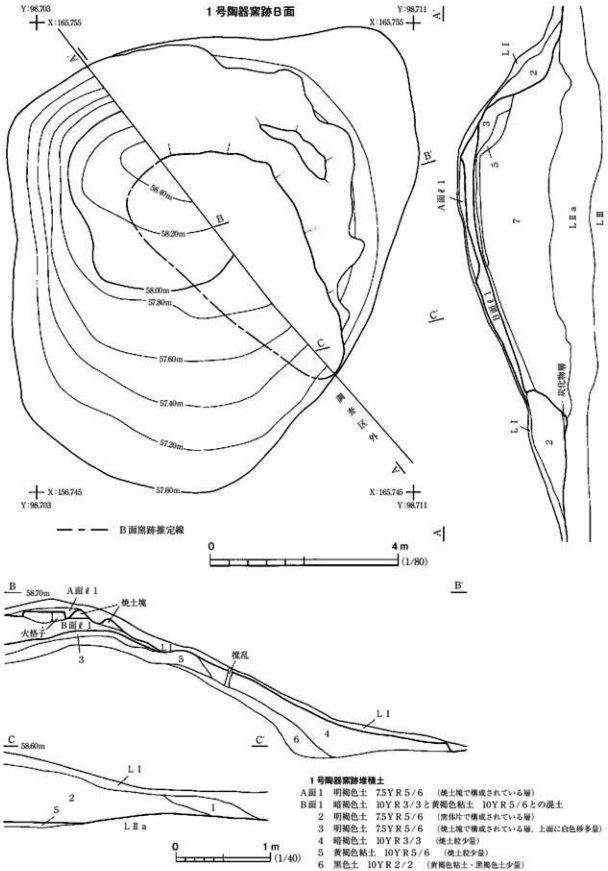

1号陶器窯跡B面
Y:98,703
X:165,755
Y:98,711
X:165,755
A'
A
B'
B
C
C'
58.40m
58.20m
58.00m
57.80m
57.60m
57.40m
57.20m
57.60m
調査区外
X:156,745
Y:98,703
X:165,745
Y:98,711
B面窯跡推定線
0
4m
(1/80)
L I
2
3
5
7
A面ℓ1
B面ℓ1
L II a
L III
炭化物層
B
58.70m
A面ℓ1
焼土塊
B面ℓ1
火格子
3
L I
5
撹乱
L I
4
6
C
58.60m
L I
2
5
1
L II a
0
1m
(1/40)
1号陶器窯跡堆積土
A面1　明褐色土　7.5YR5/6　（焼土塊で構成されている層）
B面1　暗褐色土　10YR3/3と黄褐色粘土　10YR5/6との混土
2　明褐色土　7.5YR5/6　（窯体片で構成されている層）
3　明褐色土　7.5YR5/6　（焼土塊で構成されている層，上面に白色砂多量）
4　暗褐色土　10YR3/3　（焼土粒少量）
5　黄褐色粘土　10YR5/6　（焼土粒少量）
6　黒色土　10YR2/2　（黄褐色粘土・黒褐色土少量）
7　暗褐色土　10YR3/3　（暗褐色土少量）

図８　１号陶器窯跡（３）

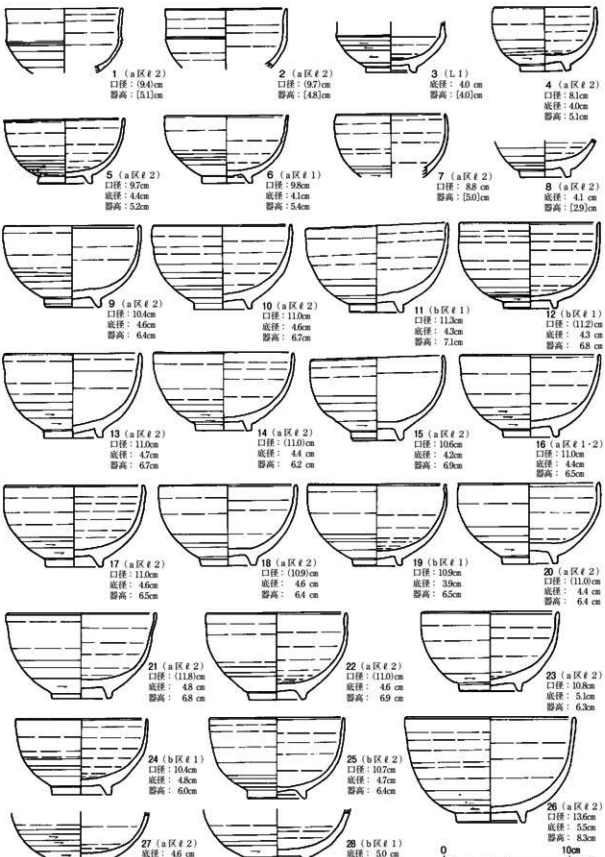


図９　１号陶器窯跡出土遺物（１）

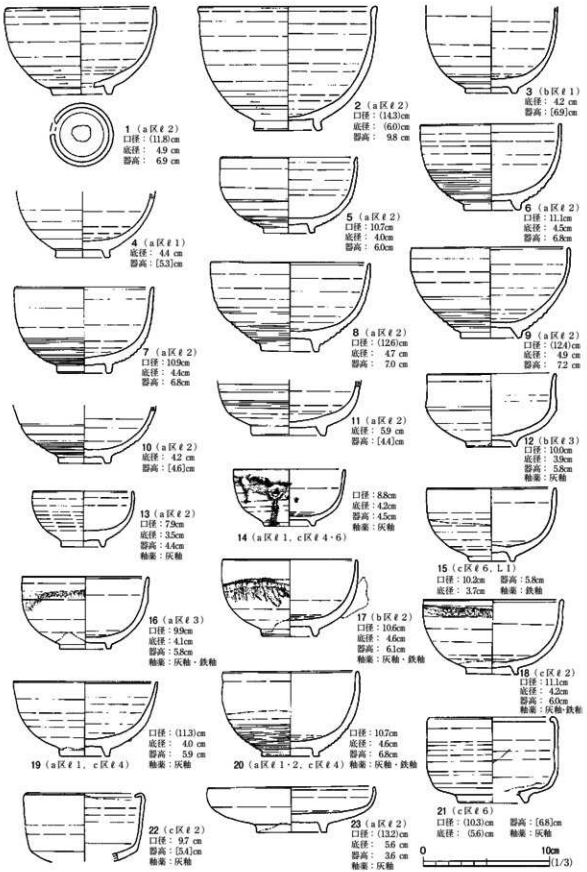


図10　1号陶器窯跡出土遺物（2）

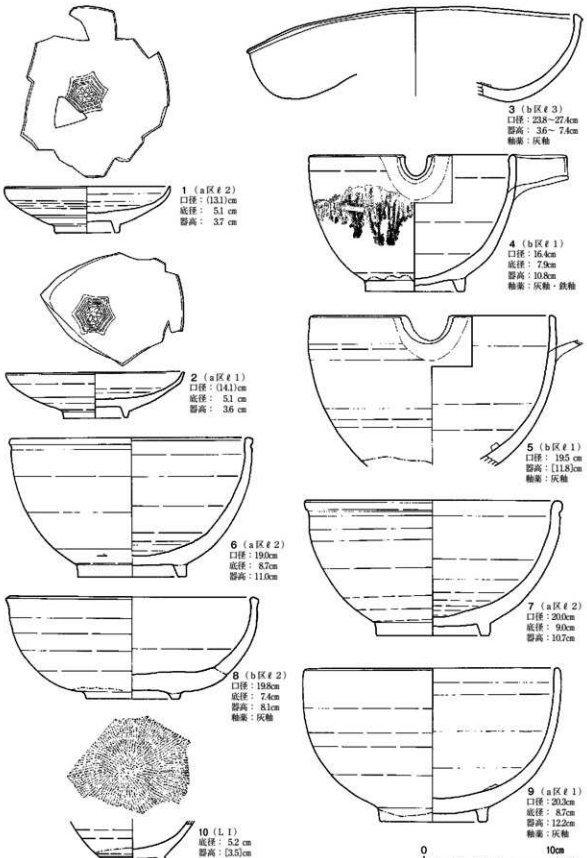


図11　１号陶器窯跡出土遺物（３）

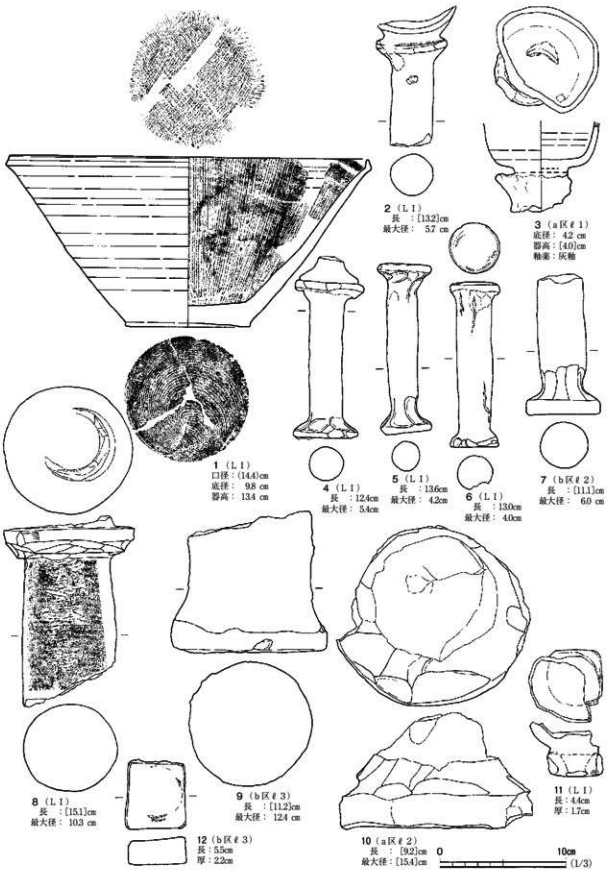


図12　1号陶器窯跡出土遺物（4）

図９・図10－１～４の高台は削り出しによるもので，削りが施された体部下半には，コテのような工具を押し当てて器面を調えている。図９－５では工具を押し当てた痕跡が認められた。色調は基本的には灰白色であるが，黒色（図９－８・図10－４），黄褐色（図10－12）などがある。胎土には微砂粒が極少量もしくは少量含まれる。器厚は最も薄いところが２㎜と，かなり薄手である。図10－１の底部には焼成後による穿孔がなされている。図10－11は体部下半に稜があるもので，他のものと比べて器厚が厚い。

図10－12～20は釉が施されているものである。12は腰折碗，13～20は丸碗である。14は発色の異なる灰釉を掛け流している。15・20は体部上半に灰釉，体部下半に鉄釉の掛け分けがなされている。さらに，高台内にも施釉がなされている。16～18は鉄釉の掛け流しがなされている。17・19の付着物は床面に敷かれた砂の塊である。

その他の器種　図10－21・22は火入である。口縁は内面に向かって屈曲している。内面には基本的には施釉されていない。

図10－23・図11－１～３は皿である。図11－１・２は無施釉である。この皿は印刻文折洲輪花皿で，見込の二重六角内に七曜が印刻されている。図11－３は焼成失敗で器形が変形している。

図11－４・５は片口である。破片にして44点出土している。４は窯跡の側面下から出土した。鉄釉の掛け流しがなされている。底部には亀裂が入り，器面に数箇所の膨張がみられた。５は底部が欠損しているもので，内面に６箇所の目跡がある。

図11－６～９は鉢で，深手なものである。破片にして69点出土している。６・７は施釉がなされていない。口縁部が肥厚し，胎土には微砂粒が少量含まれている。８・９ともに見込みに見跡があり８は６箇所，９は４箇所である。８の灰釉はハケ塗りの痕跡が明瞭である。胎土には砂粒が多く含まれ，器面には気泡がはじけた痕跡が多数みられた。

図11－10・図12－１はすり鉢である。破片にして75点出土している。10は小型のもので，条線は密である。１は施釉されていない大型のもので，７本単位の条線をまばらに引いている。

窯道具　図12－２～12，図13－１～６に図示した。窯道具は635点出土した。種類はトチン，方形ハマ・円形ハマ・脚付ハマ・ダンゴ・ツメなどである。数量が多いのがトチンで388点出土した。

図12－２～10はトチンで，形状は棒状の両端が扁平な円盤となっている。最大径によって大・中・小に分けた。トチン大が10cm以上，トチン中が４～9.9cm，トチン小が２～3.9cmを基準とした。５・６はトチン小，２～４・７はトチン中である。２に碗，３に火入，４に仏飯器もしくはひょうそくが溶着している。３・４には表面に白色粘土が塗られている。トチン小の成形は，手により棒状に仕上げ，両端は指で広げられている。８～10はトチン大である。８はロクロにより整形され，側面にスサ状の圧痕がみられる。表面には白色粘土が塗られている。９・10は端部の破片であるが，かなり重量がある。

図12－11・12，図13－１は方形ハマで，65点出土している。表面は丁寧に整えられている。11には碗が溶着し，１には白色粘土が塗られている。図13－２は円形ハマで，11点出土している。図13

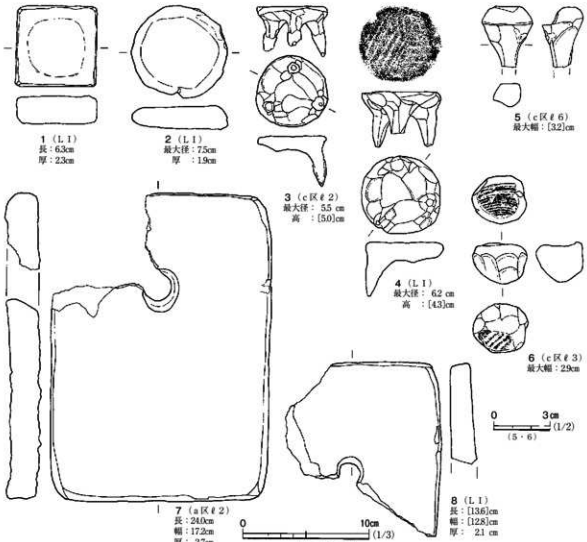


図13　1号陶器窯跡出土遺物（5）

－3・4は足付ハマである。円形ハマ・足付ハマともに手捏ねによって成形されている。3は他のものと異なり白色粘土を用いて作られている。その脚部の先端部には粘土が塗られている。4の上面には板状の圧痕がみられる。

図13－5はツメで，151点出土した。鉢や皿などを重ねて焼く際に用いたものである。手捏ねによって成形されている。図13－6はダンゴですり鉢を重ねて焼く際に用いられたものである。底面に条線，上面に底部外面の圧痕が認められる。

図13－7・8は焚口を塞ぐ蓋である。紐を通して吊り下げて使用されていた。7には窯体の内面と同じ粘土が表面に塗られていた。8は窯体の内面と同じ粘土で作られている。

ま　と　め

A面については一部の調査にとどまったため，詳細については不明である。しかし，遺構外の盛土から出土した多量の陶器には，窯道具が混入していることから，A面の灰原の一部と考えている。盛土出土陶器の年代観から，A面の操業は19世紀から明治・大正までと考えている。

Ｂ面は連房式登窯で，素焼きの碗が多量に出土した。その他に皿・火入・ひょうそく・仏飯器・鉢などがあり，小物の日常雑器を焼成していたことが判明した。ℓ２・３からの出土遺物の年代観より，時期は18世紀後半を考えている。（吉　野）

第３節　土　　坑

調査区からは土坑29基を検出した。調査区西側では，まばらに分布する。東側では重複したり，集中したりして分布する状況が認められる。時期は縄文時代，近世，近代に分けられる。近世・近代の土坑は１号窯跡に付随する遺構と想定でき，粘土を保管する土坑や水を溜めておく土坑などが認められた。陶器製作工房の施設の一部と推測される。

１号土坑　ＳＫ１（図14，写真６）

本遺構は調査区南西部のＫ４グリッドに位置し，標高54.9m前後の南東方向へ下る緩斜面に立地している。重複する遺構はないが，北北西約５mに２・６号土坑がある。遺構検出面はⅠⅢ上面である。平面形は四隅が突出した東西に長い長方形を呈し，長軸方位は真北に対し80°西へ傾く。規模は長軸137cm，短軸96cm，検出面からの深さが54cmである。

本遺構は，掘形に粘土を埋めて長方形の土坑としたものである。周壁は東西壁がほぼ垂直に立ち上がり，南北壁が内傾ぎみに立ち上がる。底面は南西隅部と東側中央部に浅い窪みがあり，南西隅部から人頭大の石が２点出土した。また，周囲に幅約６cm，深さ約２cmの溝が巡る。底面周溝に板を埋め込んで，周壁に木枠を巡らせていたと考えられる。

遺構内堆積土は７層に区分した。ℓ１～３は暗褐色粘質土である。ℓ２・３は掘形埋土と同じく粘土粒を多く含んでいる。ℓ４は黒褐色粘質土，ℓ５はにぶい黄褐色粘質土である。ℓ４・５にはあわせて22個の人頭大の石が含まれていた。半数近くには煤が付着し，赤く変色するなど被熱の痕跡が見られた。下層に多量の人頭大の石が含まれること，ℓ１とℓ４の境が波打って堆積していることから，使われなくなった後人為的に埋められた可能性がある。ℓ６・７は掘形埋土で，３～28cmの厚さで埋められていた。底面には不純物のない粘土を使用していた。掘形の平面形は不整長方形で，規模は長軸200cm，短軸150cm，検出面からの深さ57cmである。

本遺構の堆積土から陶器片が37点，鉄製品が４点出土しているが，図示し得るものはなかった。大半が碗の破片で，大甕や蓋の破片も出土している。施釉前の素焼きの状態の破片や，被熱し表面の釉薬がただれた破片がある。このような状況から，製作途中の失敗作や，使用不能になったものが投棄されたと思われる。

本遺構は，壁面及び底面を粘土で埋めていること，周壁に木枠を巡らせていたと思われることから，水などを溜めて使用していたものと考えられる。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。（高　林）

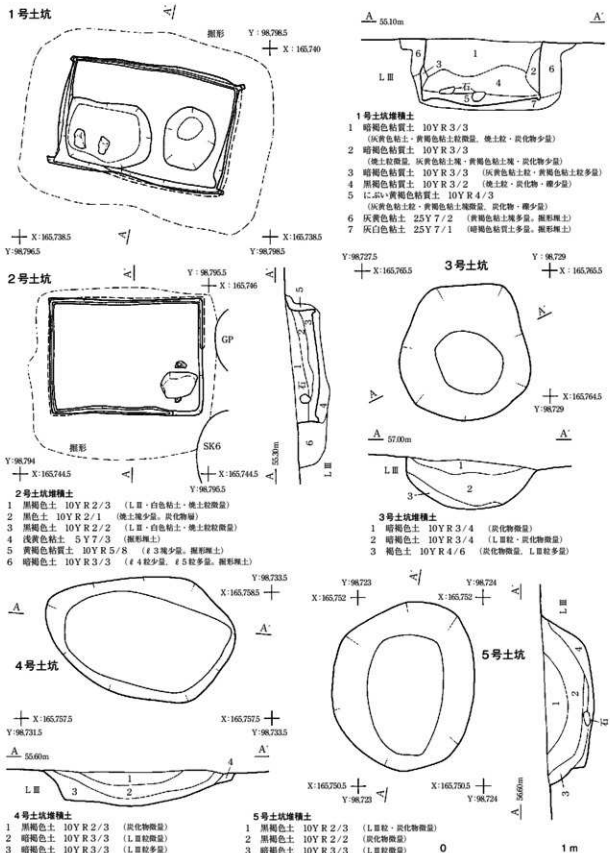

1号土坑
A'
掘形
Y：98,798.5
X：165,740
X：165,738.5
Y：98,796.5
X：165,738.5
Y：98,798.5
A
A'
55.10m
L Ⅲ
1号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3
（灰黄色粘土・黄褐色粘土粒微量、焼土粒・炭化物少量）
2　暗褐色粘質土　10YR3/3
（焼土粒微量、灰黄色粘土塊・黄褐色粘土塊・炭化物少量）
3　暗褐色粘質土　10YR3/3　（灰黄色粘土粒・黄褐色粘土粒多量）
4　黒褐色粘質土　10YR3/2　（焼土粒・炭化物・礫少量）
5　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
（灰黄色粘土粒・黄褐色粘土塊微量、炭化物・礫少量）
6　灰黄色粘土　25Y7/2　（黄褐色粘土塊多量。掘形埋土）
7　灰白色粘土　25Y7/1　（暗褐色粘質土多量。掘形埋土）
2号土坑
Y：98,795.5
X：165,746
GP
掘形
SK6
Y：98,794
X：165,744.5
X：165,744.5
Y：98,795.5
55.30m
L Ⅲ
2号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3　（L Ⅲ・白色粘土・焼土粒微量）
2　黒色土　10YR2/1　（焼土塊少量。炭化物層）
3　黒褐色土　10YR2/2　（L Ⅲ・白色粘土・焼土粒粒微量）
4　浅黄色粘土　5Y7/3　（掘形埋土）
5　黄褐色粘質土　10YR5/8　（ℓ3塊少量。掘形埋土）
6　暗褐色土　10YR3/3　（ℓ4粒少量、ℓ5粒多量。掘形埋土）
Y：98,727.5
X：165,765.5
3号土坑
Y：98,729
X：165,765.5
X：165,764.5
Y：98,729
57.00m
L Ⅲ
3号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4　（炭化物微量）
2　暗褐色土　10YR3/4　（L Ⅲ粒・炭化物微量）
3　褐色土　10YR4/6　（炭化物微量、L Ⅲ粒多量）
Y：98,733.5
X：165,758.5
4号土坑
X：165,757.5
Y：98,731.5
X：165,757.5
Y：98,733.5
55.60m
L Ⅲ
4号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3　（炭化物微量）
2　暗褐色土　10YR3/3　（L Ⅲ粒微量）
3　暗褐色土　10YR3/3　（L Ⅲ粒多量）
4　明黄褐色土　75YR5/8
Y：98,723
X：165,752
Y：98,724
X：165,752
5号土坑
X：165,750.5
Y：98,723
X：165,750.5
Y：98,724
56.60m
L Ⅲ
5号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR2/3　（L Ⅲ粒・炭化物微量）
2　黒褐色土　10YR2/2　（炭化物微量）
3　暗褐色土　10YR3/3　（L Ⅲ粒微量）
4　暗褐色土　10YR3/3　（L Ⅲ粒少量）
0
1m
(1/30)

図14　1～5号土坑

２号土坑　ＳＫ２（図14，写真６）

本遺構は調査区東側のＫ３グリッドに位置し，標高55.2ｍ前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。６号土坑と重複しており，本遺構のほうが古い。近接する遺構は，約４ｍ西に17号土坑，約５ｍ南南東に１号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は東西に長い長方形を呈し，長軸方位は真北に対し90°傾いている。規模は長軸123㎝，短軸94㎝，検出面からの深さは26㎝である。

本遺構は，掘形に粘土を埋めて長方形の土坑を形成したものである。周壁は，西北壁・東壁北部が内傾し，それ以外はほぼ垂直に立ち上がる。底面は，中央が若干低いものの，おおむね平坦である。南東隅部を除いた全域に幅４～６㎝，深さ約３㎝の溝がある。全周はしていないが周溝に板を埋め込んで，周壁に木枠を巡らせていたものと考えられる。

遺構内堆積土は６層に区分した。ℓ１・３は黒褐色土，ℓ２は焼土塊を含む炭化物層である。ℓ４～６は掘形埋土で，３～28㎝の厚さで埋められていた。底面には不純物のない粘土を使用していた。掘形の平面形は不整長方形で，規模は長軸152㎝，短軸137㎝，検出面からの深さ35㎝である。

本遺構の堆積土から陶器片が30点，磁器片が２点，鉄製品が６点出土しているが，図示し得るものはなかった。大半が碗で，大甕がわずかに出土している。窯変した陶器片があることから，焼成に失敗したものや，使用不能となったものが投棄されたと思われる。

本遺構は，壁面及び底面を粘土で埋めていること，周壁に木枠を巡らせていたと思われることから，水などを溜めて使用したものと考えられる。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。（高　林）

３号土坑　ＳＫ３（図14，写真６）

本遺構は，調査区北側中央のＤ１グリッドに位置し，標高56.8ｍ前後の南東方向へ下る緩斜面に立地している。重複する遺構はなく，近接する遺構もない。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は不整円形を呈し，長軸方位は真北に対し38°東へ傾く。規模は長軸118㎝，短軸109㎝，検出面からの深さが41㎝である。周壁は緩やかに立ち上がり，西北壁は上部がほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦である。遺構内堆積土は３層に区分した。ℓ１・２は暗褐色土，ℓ３は褐色土が堆積している。

本遺構は，不整円形の土坑であることが確認されただけで，その機能を特定することは難しい。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが，周囲からわずかに縄文土器片が出土していることから縄文時代に所属する可能性がある。（高　林）

４号土坑　ＳＫ４（図14，写真６）

本遺構は，調査区北西部のＥ２グリッドに位置し，標高56.5ｍ前後の南東方向へ下る緩斜面に立

地している。重複する遺構はなく，近接する遺構もない。遺構検出面はⅬⅢ上面である。平面形は東西に長い不整楕円形を呈し，長軸方位は真北に対し70°西へ傾く。規模は長軸153cm，短軸104cm，検出面からの深さは27cmである。周壁はいずれも急角度で立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺構内堆積土は４層に区分した。ℓ１は黒褐色土，ℓ２は暗褐色土，ℓ３は明黄褐色土が堆積している。

本遺構は，不整楕円形の土坑であることが確認されただけで，その機能を特定することは難しい。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが，周囲からわずかに縄文土器片が出土していることから縄文時代に所属する可能性がある。（高　林）

５号土坑　ＳＫ５（図14，写真６）

本遺構は，調査区北西部のＤ２グリッドに位置し，標高56.4m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。重複する遺構はないが，約４ｍ南に14号土坑がある。遺構検出面はⅬⅢ上面である。平面形は南北に長い楕円形を呈し，長軸方位はほぼ真北である。規模は長軸136cm，短軸113cm，検出面からの深さが42cmである。周壁は，東西北壁が急角度で立ち上がる。南壁は下部がほぼ垂直に立ち上がり，上部が急角度で立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺構内堆積土は４層に区分した。ℓ１・２は黒褐色土，ℓ３・４は暗褐色土が堆積している。

本遺構は，楕円形の土坑であることが確認されただけで，その機能を特定することは難しい。所属時期は遺物が出土していないため不明であるが，周囲からわずかに縄文土器片が出土していることから縄文時代に所属する可能性がある。（高　林）

６号土坑　ＳＫ６（図15，写真６）

本遺構は，調査区東側のＫ３グリッドに位置し，標高55.1m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。２号土坑と重複し，本遺構のほうが新しい。本遺構の約５ｍ西に17号土坑がある。遺構検出面はⅬⅢ上面である。平面形は南北に長い楕円形を呈し，長軸方位は真北に対し21°西へ傾く。

規模は長軸132cm，短軸108cm，検出面からの深さが13cmである。周壁は，東西北壁はほぼ垂直に立ち上がり，南壁は急角度で立ち上がる。底面はおおむね平坦であるが，北東部に直径81cm，深さ３cmの窪みがある。

遺構内堆積土は２層に区分した。ℓ１は暗褐色土，ℓ２は北東部の窪みに浅黄色粘土が堆積している。この粘土については，胎土分析（付章１）と耐火度分析（付章２）を実施した。胎土分析では，試料としたすり鉢と近い値を示していた。耐火度分析では1,490℃を示し，耐火度が相当高い粘土との評価であった。

堆積土からは，陶器の大甕片１点が出土したが，図示しなかった。本遺構は，底面に分析結果からも陶土として使用可能な粘土が堆積していたことから，陶土置場であったと考えられる。時期は，陶土置場という性格から１号陶器窯跡と同時期の江戸時代に所属すると考えられる。（高　林）

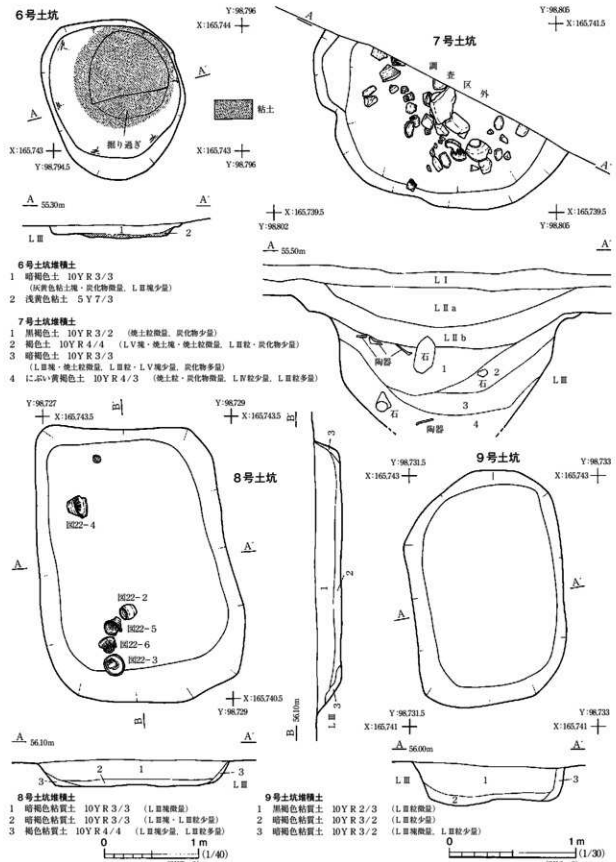

6号土坑
Y:98,796
X:165,744
A
A'
粘土
掘り過ぎ
X:165,743
Y:98,794.5
X:165,743
Y:98,796
A 55.30m
A'
L Ⅲ
2
7号土坑
Y:98,805
X:165,741.5
調査区外
A
A'
X:165,739.5
Y:98,802
X:165,739.5
Y:98,805
A 55.50m
A'
L Ⅰ
L Ⅱa
L Ⅱb
陶器
石
1
2
石
L Ⅲ
3
石
陶器
4
6号土坑堆積土
1 暗褐色土 10YR3/3
(灰黄色粘土塊・炭化物微量、L Ⅲ塊少量)
2 浅黄色粘土 5Y7/3
7号土坑堆積土
1 黒褐色土 10YR3/2 (焼土粒微量、炭化物少量)
2 褐色土 10YR4/4 (L Ⅴ塊・焼土塊・焼土粒微量、L Ⅲ粒・炭化物少量)
3 暗褐色土 10YR3/3
(L Ⅲ塊・焼土粒微量、L Ⅲ粒・L Ⅴ塊少量、炭化物多量)
4 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (焼土粒・炭化物微量、L Ⅳ粒少量、L Ⅲ粒多量)
Y:98,727
X:165,743.5
8号土坑
B22-4
B22-2
B22-5
B22-6
B22-3
X:165,740.5
Y:98,729
A
A'
B
B'
Y:98,729
X:165,743.5
3
1
2
3
L Ⅲ
56.10m
A 56.10m
A'
2
1
3
3
L Ⅲ
Y:98,731.5
X:165,743
9号土坑
Y:98,733
X:165,743
A
A'
Y:98,731.5
X:165,741
Y:98,733
X:165,741
A 56.00m
A'
L Ⅲ
1
3
2
8号土坑堆積土
1 暗褐色粘質土 10YR3/3 (L Ⅲ塊微量)
2 暗褐色粘質土 10YR3/3 (L Ⅲ塊・L Ⅲ粒少量)
3 褐色粘質土 10YR4/4 (L Ⅲ塊少量、L Ⅲ粒多量)
9号土坑堆積土
1 黒褐色粘質土 10YR2/3 (L Ⅲ粒微量)
2 暗褐色粘質土 10YR3/2 (L Ⅲ粒少量)
3 暗褐色粘質土 10YR3/2 (L Ⅲ塊微量、L Ⅲ粒少量)
0
1m
(1/40)
(SK7・8)
0
1m
(1/30)
(SK6・9)

図15　６～９号土坑

7号土坑　ＳＫ７（図15・20～22，写真６・13・15）

本遺構は，調査区東端部のＬ３・４グリッドに位置し，標高54.8m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。遺構検出面はＬⅢ上面である。本遺構は調査区南東隅部の北東壁際にあるため，南西側半分のみの調査となった。本遺構は非常に深く，調査区外の現地表面からの深さが170cmを超えても底面が確認できなかった。また，水が絶え間なく湧き出てくる状況であったため，これ以上の掘り下げは調査区際の壁が崩落する危険があると判断し，底面までの掘り下げを断念した。

平面形は不整円形を呈すると思われ，西壁には幅20～30cmの平坦部がある。規模は幅が289cmである。検出面からの深さは140cmまで確認した。周壁は下部がすり鉢状に急角度で立ち上がり，中部でほぼ垂直に変化し，上部が緩やかに立ち上がる。

遺構内堆積土は４層に区分した。本遺構の東側は盛土で整地されており，ＬⅢ上部に非常に締りのある土が堆積していた。本遺構が完全に埋まりきる前に盛土整地されたようで，本遺構内の上部に盛土の堆積が確認された。堆積状況は，ℓ１が西から，ℓ２・３が東から，ℓ４が西からと交互に流入する様相を示している。いずれの層からも多量の陶器片・人頭大の石が出土している。

本土坑の堆積土からは最も多くの遺物が出土した。陶器片が731点，磁器片が６点，石製品が１点，鉄製品が２点出土している。様々な種類の陶器片が出土している状況から，使用不能となったものを投棄したと思われる。そのうち図化した陶器・窯道具・石製品を図20～22に示した。

図20－１は小型碗で器面に他製品との溶着痕がみられる。同図２～９は碗である。２・５・６は丸碗で，５は灰釉と銅緑釉との掛け分け，６は灰釉と鉄釉との掛け分けが確認できる。６は高台内にも施釉がされている。３・４は腰折碗，７は切立碗，８は端反碗，９は胴締碗である。同図10は壽麦猪口で，鉄釉により駒絵が描かれている。同図11は盃，同図12は小型壺形容器で内面にも施釉がされている。屈曲部は器厚が薄く剥離が顕著である。同図13は灯明皿で，芯立が付く。同図14・16は小鉢で，鉄釉によって山水画が描かれている。同図15は皿で，「麹屋」の文字が書かれている。同図17は銅緑釉の掛け流しがされた仏飯器である。脚部の中段に稜が形成されている。図20－18，図21－１～３は土瓶である。18には施釉がされていない。体部中程から下端にかけて回転ヘラケズリにより整形がされている。注口は２箇所の穿孔がなされ，鉄錆が付着している。図20－18，図21－１・２の耳は型抜きによるものである。１は体部外面下半から底部にかけて炭化物が付着し，施釉が変色しているので，火災に遭ったものと窺われる。施釉は体部外面の下半までである。体部下端外面には３箇所のボタン状貼付がされている。２は灰釉地に銅緑釉による掛け流しがなされている。施釉は体部外面中程までである。３は型抜きによる駒形の貼付がされている。耳は型抜きによる菊形で，耳の先端が欠損しているのでつるは陶製であったと考えている。図20－19は落とし蓋である。施釉は上面のみで，鉄釉地に一部銅緑釉が施されている。

図21－４は鉢で，口縁部がひだ状をしている。外面には灰釉と鉄釉の掛け分けがされ，内面には銅緑釉の掛け流しが施される。底部内面には目跡が５箇所ある。図21－５は窯道具のダンゴですり

鉢を重ね焼きする際に用いられたものである。同図６は小型甕で施釉は内面から外面胴部中ほどまでである。同図７・８はすり鉢で，口縁の一端が片口状となる。７の条線は細かく，８の条線はまばらに引いている。条線の単位は７本である。内外面ともに施釉がされている。同図９は砥石である。一面以外，すべて欠損している。図22－１は鉢で，形状はすり鉢と類似している。施釉は内外面で発色が異なる鉄釉を用いている。内面は黒色で，外面は暗褐色である。高台内にも施釉がされている。

本遺構は絶えず湧水が認められたので井戸の可能性も考えているが，部分的な調査にとどまったため，その判断は留保したい。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属する。　（高　林）

８号土坑　ＳＫ８（図15・22，写真７・12）

本遺構は，調査区南西部のＤ３グリッドに位置し，標高55.9m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。本遺構と重複する遺構はないが，約４m東に９号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は南北に長い不整隅丸長方形を呈し，長軸方位は真北に対し８°西へ傾く。規模は長軸313cm，短軸215cm，検出面からの深さが29cmである。周壁は，いずれも急角度で立ち上がるが，南壁はやや傾斜が緩い。底面はおおむね平坦である。遺構内堆積土は３層に区分した。ℓ１・２は暗褐色粘質土，ℓ３は褐色粘質土が堆積している。

本遺構の堆積土からは，陶器片14点が出土している。そのうち図化したものを図22に示した。割れた状態で出土していることから，使用不能のものが投棄されたと思われる。２は甕で，焼歪みがみられる。内外面に鉄釉を施釉したのち，口縁部から胴部下半の外面に灰釉が施釉されている。３は鉢で，底部内面に窯体片が付着している。４～６はすり鉢で内外面に施釉がされている。条線がまばらに引かれ，条線の単位は７本である。４・５は口縁の一端が片口状となる。５は小型すり鉢で，６は焼歪みが著しい。底部外面には重ね焼きに用いられたダンゴの痕跡が３箇所みられた。

本遺構は，不整隅丸長方形の竪穴状の土坑であることが確認されただけで，機能を特定することは難しい。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。　（高　林）

９号土坑　ＳＫ９（図15，写真７）

本遺構は，調査区南西部のＥ３グリッドに位置し，標高55.8m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。本遺構と重複する遺構はないが，約４m西に８号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は南北に長い不整隅丸長方形を呈し，長軸方位は真北に対し６°西へ傾く。規模は長軸185cm，短軸124cm，検出面からの深さは36cmである。周壁は東壁がほぼ垂直に立ち上がり，西南北壁は急角度で立ち上がる。底面はおおむね平坦であるが，西側がわずかに窪んでいる。

遺構内堆積土は３層に区分した。ℓ１は黒褐色粘質土，ℓ２・３は暗褐色粘質土が堆積している。陶器片２点が出土しているが，図示し得るものではなかった。

本遺構は，不整隅丸長方形の土坑であることが確認されただけで，機能を特定することは難しい。時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。　（高　林）

10号土坑　ＳＫ10（図16，写真７）

本遺構は，調査区北西部のＣ２グリッドに位置し，標高56.5m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は不整円形を呈する。規模は幅が120cm，検出面からの深さが25cmである。周壁は緩やかに立ち上がり，底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺構内堆積土は２層に区分した。ℓ１は黒褐色土，ℓ２はにぶい黄褐色土が堆積している。

本遺構は，不整円形の土坑であることが確認されただけで，機能を特定することは難しい。時期は遺物が出土していないため不明であるが，周囲からわずかであるが縄文土器片が出土していることから縄文時代に所属する可能性がある。　（高　林）

11号土坑　ＳＫ11（図16，写真７）

本遺構は調査区のほぼ中央Ｆ２グリッドＬⅢ上面から検出した。１号溝跡と重複するが，本土坑が古い。平面形は不整な隅丸長方形で，規模は長軸が168cm，短軸が148cm，深さが54cmである。壁面は急な角度で立ち上がり，底面は東側に向かって傾斜している。堆積土は４層に区分した。ℓ３・４はＬⅢの再堆積層で，周囲に置かれた掘り上げた土が再流入した状況を示している。

遺物は出土していないので明確な時期は不明であるが，縄文土器が出土した５号土坑と規模や形が類似しているので，縄文時代の所産と考えている。　（吉　野）

12号土坑　ＳＫ12（図16，写真７）

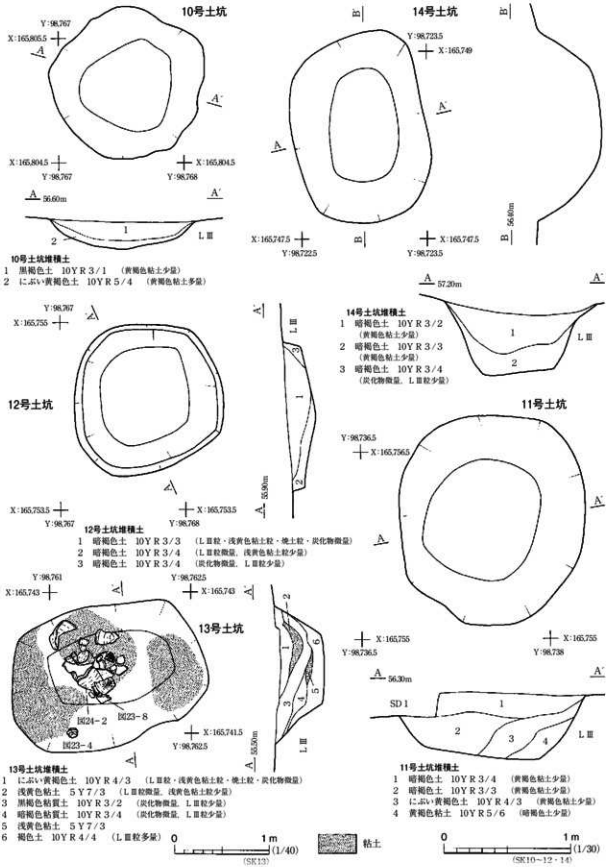
本遺構は，調査区東側のＨ２グリッドに位置し，標高55.7m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。本土坑と重複する遺構はないが，約２m南東に19・20号土坑，約４m南西に15・18・30号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は不整円形を呈する。規模は幅が120cm，検出面からの深さは23cmである。周壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。

遺構内堆積土は３層に区分した。いずれも暗褐色土が堆積しているが，下層はＬⅢ粒・粘土粒が上層よりも多く含まれている。

本遺構の堆積土からは碗の陶器片１点が出土しているが，図示し得るものではなかった。本遺構は，不整円形の土坑であることが確認されただけで，その機能を特定することは難しい。所属時期は出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。　（高　林）

13号土坑　ＳＫ13（図16・23・24，写真７・13）

本遺構は，調査区東側のＨ３グリッドに位置し，標高55.3m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。本遺構は21号土坑と重複しており，本遺構のほうが新しい。約４m南東に16号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は東西に長い不整楕円形を呈し，長軸方位は真北に対し



10号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ３/１　（黄褐色粘土少量）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ５/４　（黄褐色粘土多量）

14号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ３/２
（黄褐色粘土少量）
2　暗褐色土　10ＹＲ３/３
（黄褐色粘土少量）
3　暗褐色土　10ＹＲ３/４
（炭化物微量，ＬⅢ粒少量）

12号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ３/３　（ＬⅢ粒・浅黄色粘土粒・焼土粒・炭化物微量）
2　暗褐色土　10ＹＲ３/４　（ＬⅢ粒微量，浅黄色粘土粒少量）
3　暗褐色土　10ＹＲ３/４　（炭化物微量，ＬⅢ粒少量）

13号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ４/３　（ＬⅢ粒・浅黄色粘土粒・焼土粒・炭化物微量）
2　浅黄色粘土　５Ｙ７/３　（ＬⅢ粒微量，浅黄色粘土粒少量）
3　黒褐色粘質土　10ＹＲ３/２　（炭化物微量，ＬⅢ粒少量）
4　暗褐色粘質土　10ＹＲ３/４　（炭化物微量，ＬⅢ粒少量）
5　浅黄色粘土　５Ｙ７/３
6　褐色土　10ＹＲ４/４　（ＬⅢ粒多量）

11号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ３/４　（黄褐色粘土少量）
2　暗褐色土　10ＹＲ３/３　（黄褐色粘土少量）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ４/３　（黄褐色粘土少量）
4　黄褐色粘土　10ＹＲ５/６　（暗褐色土少量）

図16　10～14号土坑

78°東に傾く。規模は長軸212cm，短軸151cm，検出面からの深さは53cmである。周壁はいずれも急角度で立ち上がるが，西南壁はやや傾斜が緩い。底面は平坦である。

遺構内堆積土は6層に区分した。ℓ1～3からは多量の陶磁器片が出土した。ℓ2・5浅黄色粘土は，2回に分けて投棄されていた。1回目は土坑東部(ℓ5)に，二回目は土坑西部(ℓ2)である。ℓ2浅黄色粘土について耐火度分析(付章2)を実施した。その結果は1,390℃で，耐火度がやや高い粘土との評価であった。

本遺構の堆積土からは，陶器片が482点，磁器片が5点，鉄製品が6点，古銭が1点出土している。そのうち図化した陶器を図23・24に示した。それ以外にも，すり鉢や甕で完形に近い状態まで復元できるものが出土している。また，被熱して表面の釉薬がただれている陶器片も出土している。このような状況から，使用不能になったものが投棄されたと思われる。

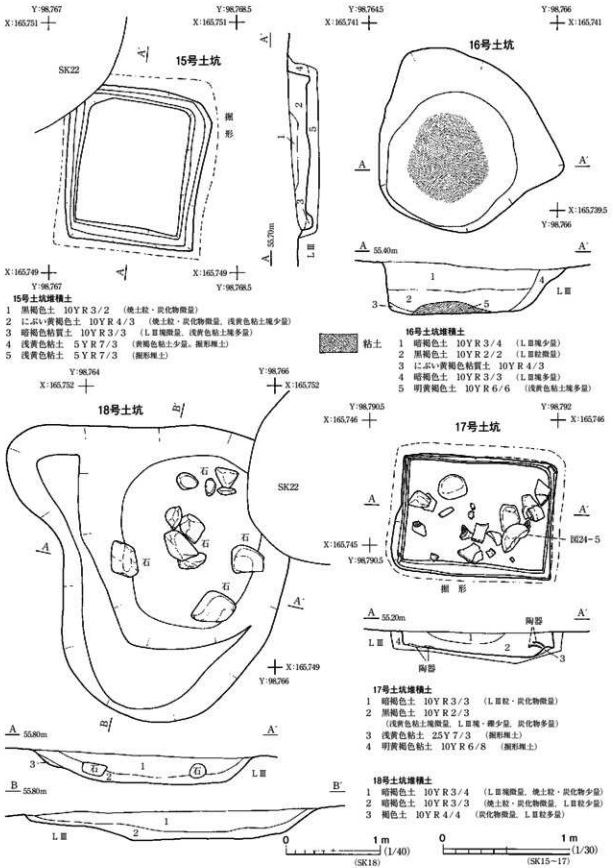
図23－1は土瓶である。鉄釉により菊花文が描かれ，ひねり耳が取り付く。施釉は体部下半までである。2は急須である。筒描きで花文を描き，施釉は体部下端までである。3は落とし蓋である。鉄絵により山水画が描かれている。蒸気抜きの孔が1箇所穿孔されている。4は火入もしくは灰落である。煙草盆に納まるもので，羽釜状をなしている。施釉は内面から外面羽の上までである。5は大皿である。鉄釉によって草花文が描かれている。外面には同一製品の一部が溶着している。内面に目跡が4箇所ある。6は徳利で，口縁部から頸部にかけて欠損する。平行沈線と「とびかんな」が施されている。器厚は薄く，最も薄い箇所で2㎜ほどである。7は片口である。口縁部が肥厚するものである。施釉は内面と外面は体部下端までである。内面に目跡が4箇所ある。8は土鍋で，釣手の耳が付く。耳は型抜きによるものである。施釉は内面と外面は体部下半までである。体部外面下端には3箇所のボタン状貼付がなされる。9は甕である。施釉は内面と外面胴部上端にかけては灰釉で，それ以外は鉄釉である。口唇部は面取りがなされ，平坦である。底部外面にはロクロ台の木目痕がみられる。図24－1・2はすり鉢である。口縁の一端を片口状に窪ませている。口縁部と体部内外面は発色の異なる施釉がなされている。条線は密に引かれている。

本遺構は，当初何の目的で造られたものかは定かではないが，最終的には不要となった粘土・陶磁器などを投棄する穴として機能していたと考えられる。所属時期は，陶土と考えられる粘土が堆積していたことから，1号陶器窯跡と同時期の江戸時代に所属するものと考えられる。　(高　林)

14号土坑　ＳＫ14（図16，写真7）

本遺構は調査区西のＤ3グリッドＬⅢで検出した。周辺には南側に1号溝跡が，北側に5号土坑がある。平面形は隅丸長方形で，長軸は南北方向にあり真北に対しやや西側に傾いている。規模は長軸が148cm，短軸が108cm，深さが54cmである。壁面は緩やかに外傾しながら立ち上がり，底面は平坦である。堆積土は2層に区分した。いずれもＬⅡｃに起因する堆積土である。

本遺構からは遺物が出土していないため，明確な時期は不明である。本土坑の形が縄文土器が出土した5号土坑と類似していることから，縄文時代の所産である可能性が高い。　(吉　野)



15号土坑堆積土
1　黒褐色土　10ＹＲ３/２　（焼土粒・炭化物微量）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ４/３　（焼土粒・炭化物微量、浅黄色粘土塊少量）
3　暗褐色粘質土　10ＹＲ３/３　（Ｌ Ⅲ塊微量、浅黄色粘土塊多量）
4　浅黄色粘土　５ＹＲ７/３　（黄褐色粘土少量。掘形埋土）
5　浅黄色粘土　５ＹＲ７/３　（掘形埋土）

16号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ３/４　（Ｌ Ⅲ塊少量）
2　黒褐色土　10ＹＲ２/２　（Ｌ Ⅲ粒微量）
3　にぶい黄褐色粘質土　10ＹＲ４/３
4　暗褐色土　10ＹＲ３/３　（Ｌ Ⅲ塊多量）
5　明黄褐色土　10ＹＲ６/６　（浅黄色粘土塊多量）

17号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ３/３　（Ｌ Ⅲ粒・炭化物微量）
2　黒褐色土　10ＹＲ２/３
（浅黄色粘土塊微量、Ｌ Ⅲ塊・礫少量、炭化物多量）
3　浅黄色粘土　25Ｙ７/３　（掘形埋土）
4　明黄褐色粘土　10ＹＲ６/８　（掘形埋土）

18号土坑堆積土
1　暗褐色土　10ＹＲ３/４　（Ｌ Ⅲ塊微量、焼土粒・炭化物少量）
2　暗褐色土　10ＹＲ３/３　（焼土粒・炭化物微量、Ｌ Ⅲ粒少量）
3　褐色土　10ＹＲ４/４　（炭化物微量、Ｌ Ⅲ粒多量）

図17　15～18号土坑

15号土坑　ＳＫ15（図17，写真８）

本遺構は，調査区東よりのＨ２・３グリッドに位置し，標高55.5m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。22号土坑と重複しており，本遺構のほうが古い。約２m西に18号土坑，約２m北に19・20号土坑，約３m北に12号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は南北に長い長方形を呈し，長軸方位は真北に対し７°東へ傾く。規模は長軸126cm，短軸112cm，検出面からの深さが18cmである。本遺構は，掘形に粘土を埋めて長方形の土坑を形成したものである。周壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦で，周囲に幅８～13cm，深さ３～５cmの溝が巡る。周溝に板を埋め込んで，周壁に木枠を巡らせていたものと考えられる。

遺構内堆積土は５層に区分した。ℓ１～３は廃棄後に堆積した層である。ℓ４・５は掘形埋土である。５～９cmの厚さで，浅黄色粘土が埋められていた。底面に貼られていたℓ５は，不純物のない粘土を使用していた。掘形の平面形は不整長方形で，規模は長軸142cm，短軸123cm，検出面からの深さ25cmである。

本遺構の堆積土からは，碗，すり鉢，甕などの陶器片16点が出土しているが，図示し得るものはなかった。本遺構は，壁面及び底面を粘土で埋めていること，周壁に木枠を巡らせていたと思われる溝が存在することから，水などを溜めて使用していたものと考えられる。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。（高　林）

16号土坑　ＳＫ16（図17，写真８）

本遺構は，調査区中央南側のＨ３・４グリッドに位置し，標高55.3m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。本遺構の約４m北西に13・21号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。平面形は不整円形を呈する。規模は幅が149cm，検出面からの深さが42cmである。周壁は西南壁がほぼ垂直に立ち上がり，東北壁が緩やかに立ち上がる。底面はおおむね平坦である。

遺構内堆積土は５層に区分した。ℓ１～４は廃棄時に堆積した層で，自然堆積である。ℓ５は底面ほぼ中央に堆積した黄褐色土である。径約70cm，最大高９cmを測り，浅黄色粘土塊を多量に含んでいる。陶土である可能性が考えられ，使用時から堆積していた層と考えられる。

本遺構の堆積土からは，碗，すり鉢，甕などの陶器片25点が出土しているが，図示し得るものはなかった。本遺構は底面中央に粘土が堆積していることから，粘土置場であった可能性が高いと考える。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。（高　林）

17号土坑　ＳＫ17（図17・24，写真８）

本遺構は，調査区東側のＫ３グリッドに位置し，標高55.2m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。本遺構の約４m東に２・６号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。遺構検出面はＬⅢ上面で，長方形の暗褐色土として認識した。

平面形は東西に長い長方形を呈し，長軸方位は真北に対し87°西へ傾く。掘形内の規模は長軸128㎝，短軸98㎝，検出面からの深さが20㎝である。周壁の東壁・北壁東部は内傾し，その他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は東に向かって緩やかに傾斜している。周囲に上端幅４～10㎝，底部幅２～７㎝，深さ２㎝の溝が巡る。掘形の平面形は長方形である。粘土の層厚は３～９㎝である。掘形規模は長軸140㎝，短軸109㎝，検出面からの深さ25㎝である。

遺構内堆積土は４層に区分した。ℓ１・２は流入土で，自然堆積と判断した。ℓ３・４は掘形埋土で，浅黄色粘土が堆積していた。

本遺構の堆積土からは，陶器片が50点，磁器片が１点，鉄製品が８点，石製品が２点出土している。底面及び・２からは陶磁器片・鉄製品・石製品が出土している。そのうち図24に陶器と石製品を示した。３は小型甕である。施釉は外面が口縁部から胴部下半までが灰釉，内面と外面胴部下半が鉄釉である。４は甕で施釉されていない。口唇部は面取りされ，平坦である。５は石臼である。下臼で，ほぼ半分が欠損している。

本遺構は，底面及び壁面を粘土で埋めていること，周壁に木枠を巡らせていたと考えられることから，水などを溜めて使用していたと考えられる。使われなくなった後は，不用品を投棄していたと思われる。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。　（高　林）

18号土坑　ＳＫ18（図17・24，写真８）

本遺構は，調査区中央のＨ２・３グリッドに位置し，標高55.6m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。22号土坑と重複しており，本遺構のほうが古い。約２m東に15号土坑，約４m北東に12・19・20号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。

平面形は北西部が張り出した不整楕円形を呈し，西・南部に幅10～68㎝の平坦部がある。長軸方位は真北に対し23°東へ傾く。規模は長軸323㎝，短軸334㎝，検出面からの深さは38㎝，底面と平坦部との比高差は15㎝である。周壁は緩やかに立ち上がる。底面はおおむね平坦である。

遺構内堆積土は３層に区分した。ℓ１・２は暗褐色土，ℓ３は褐色土である。底面から人頭大・拳大の石が11点出土し，人為堆積の可能性も考えられる。

本遺構の堆積土からは，陶器片が190点，磁器片が４点出土している。そのうち，図24－６に陶器小碗を示した。陶器片は碗のほか，すり鉢，甕，土瓶，片口鉢，灯明皿など様々な種類の陶器片が出土し，被熱して表面の釉薬がただれている陶器片もある。このような状況から，使用不能となったものが投棄されたと思われる。

本遺構は，不整楕円形の土坑であることが確認されただけで，その機能を特定することは難しい。底面上に人頭大の石が多数あること，多量の陶磁器片を含んでいることから，最終的には使用不能となった陶磁器を投棄することに使われた可能性が高い。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。　（高　林）

19号土坑　ＳＫ19（図18，写真８）

本遺構は，調査区東よりのＨ２グリッドに位置し，標高55.6m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。20号土坑と重複しており，本遺構のほうが新しい。約２m北西に12号土坑，約３m南西に15・18・22号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。

平面形は東西に長い不整長方形を呈し，長軸方位は真北に対し86°東に傾く。規模は長軸216cm，短軸195cm，検出面からの深さが37cmである。周壁はいずれも急角度で立ち上がる。底面は凹凸が見られ，中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は４層に区分した。

本遺構からは，碗，甕，土瓶などの陶器片14点が出土しているが，図示し得るものはなかった。被熱して表面の釉薬がただれている陶器片も出土している。本遺構は不整長方形の土坑であることが確認されただけで，その機能を特定することは難しい。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。（高　林）

20号土坑　ＳＫ20（図18，写真８）

本遺構は，調査区東よりのＨ２グリッドに位置し，標高55.7m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。19号土坑と重複し，本遺構のほうが古い。約２m北西に12号土坑，約３m南東に15・18・22号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。

平面形は19号土坑によって南半分が残存していないが，隅丸方形を呈すると思われる。規模は幅が126cm，検出面からの深さは19cmである。周壁は残存する東西北壁は急角度に立ち上がる。底面は平坦である。遺構内堆積土は単一層で，にぶい黄褐色土が堆積していた。

堆積土中からは，碗，甕，鉢などの陶器片15点が出土しているが，図示し得るものはなかった。本遺構は不整方形の土坑であることが確認されただけで，その機能を特定することは難しい。所属時期は，出土遺物から江戸時代に所属するものと考えられる。（高　林）

21号土坑　ＳＫ21（図18・24，写真８）

本遺構は，調査区南中央のＨ３グリッドに位置し，標高55.3m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。13号土坑と重複しており，本土坑のほうが古い。約４m南東に16号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。

平面形は北西・南東方向に長い楕円形を呈し，長軸方位は真北に対し33°西へ傾く。規模は長軸104cm，検出面から底面までの深さは25cm，掘形までの深さは32cmである。掘形に粘土を埋めて底面及び周溝を形成したものである。周壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。周囲には幅５～12cm，深さ５～７cmの溝が全周する。周溝に板を埋め込んで，周壁に木枠を巡らせていたものと考えられる。掘形の平面形は楕円形である。

遺構内堆積土は３層に区分した。ℓ１・２は自然堆積と判断した。ℓ３は掘形埋土で，不純物の

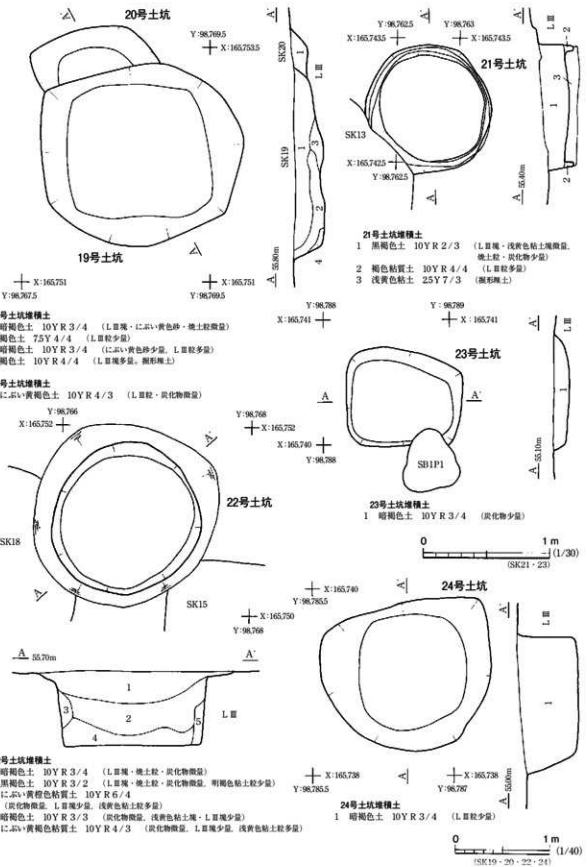

20号土坑
Y:98,769.5
X:165,753.5
SK20
SK19
L Ⅲ
55.80m
19号土坑
X:165,751
Y:98,767.5
X:165,751
Y:98,769.5
19号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R 3/4　（L Ⅲ塊・にぶい黄色砂・焼土粒微量）
2　褐色土　7.5Y 4/4　（L Ⅲ粒少量）
3　暗褐色土　10Y R 3/4　（にぶい黄色砂少量、L Ⅲ粒多量）
4　褐色土　10Y R 4/4　（L Ⅲ塊多量。掘形埋土）
20号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色土　10Y R 4/3　（L Ⅲ粒・炭化物微量）
Y:98,766
X:165,752
Y:98,768
X:165,752
Y:98,788
22号土坑
SK18
SK15
X:165,750
Y:98,768
55.70m
L Ⅲ
22号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R 3/4　（L Ⅲ塊・焼土粒・炭化物微量）
2　黒褐色土　10Y R 3/2　（L Ⅲ塊・焼土粒・炭化物微量。明褐色粘土粒少量）
3　にぶい黄橙色粘質土　10Y R 6/4
（炭化物微量。L Ⅲ塊少量。浅黄色粘土粒多量）
4　暗褐色土　10Y R 3/3　（炭化物微量。浅黄色粘土塊・L Ⅲ塊少量）
5　にぶい黄褐色粘質土　10Y R 4/3　（炭化物微量。L Ⅲ塊少量。浅黄色粘土粒多量）
Y:98,762.5
X:165,743.5
Y:98,763
X:165,743.5
21号土坑
SK13
X:165,742.5
Y:98,762.5
55.40m
L Ⅲ
21号土坑堆積土
1　黒褐色土　10Y R 2/3　（L Ⅲ塊・浅黄色粘土塊微量。
焼土粒・炭化物少量）
2　褐色粘質土　10Y R 4/4　（L Ⅲ粒多量）
3　浅黄色粘土　2.5Y 7/3　（掘形埋土）
Y:98,789
X:165,741
23号土坑
SB1P1
55.10m
L Ⅲ
23号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R 3/4　（炭化物少量）
0　1m
(1/30)
(SK21・23)
X:165,740
Y:98,785.5
24号土坑
X:165,750
Y:98,768
X:165,738
Y:98,785.5
X:165,738
Y:98,787
55.60m
L Ⅲ
24号土坑堆積土
1　暗褐色土　10Y R 3/4　（L Ⅲ粒少量）
0　1m
(1/40)
(SK19・20・22・24)

図18　19～24号土坑

ない浅黄色粘土である。6～11cmの厚さで埋められていた。

本遺構の堆積土からは，陶器片が18点，磁器片が1点出土している。陶器片は碗のほか，甕，土瓶，鉢，鍋などが出土している。図24－7は陶器碗である。施釉がなされていないもので，体部下端から底部外面にかけて回転ヘラケズリが施され，底部を窪ませている。

本土坑は底面に粘土が認められ，周壁に木枠を巡らせていたと推測できることから，水などを溜めて使用したと考えられる。1・2・15・17号土坑とは平面形と粘土の埋め方が異なることから，使用目的が異なる可能性が考えられる。時期は，遺物から江戸時代に属すると考えられる。（高　林）

22号土坑　ＳＫ22（図18，写真9）

本遺構は，調査区東よりのＨ２グリッドに位置し，標高55.6m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。15・18号土坑と重複し，本遺構のほうが両土坑よりも新しい。約２m東北東に19・20号土坑，約３m北東に12号土坑がある。遺構検出面はＬⅢ上面である。

平面形は不整円形を呈し，上部は崩落により広がっている。規模は幅161cm，検出面からの深さは82cmである。周壁はいずれもほぼ垂直に立ち上がり，上端部は崩落により傾斜が緩やかである。底面は平坦である。遺構内堆積土は５層に区分した。

堆積土からは，陶磁器片141点が出土したが，図示し得るものはなかった。陶器の大甕，土瓶，すり鉢，片口鉢などの破片のほか，火鉢，染付碗，白磁皿など使用していたと思われる器の破片が出土している。被熱を受けたと思われる，表面の釉薬のただれた破片もある。遺物はすべてℓ１・２から出土していることから，本遺構が埋まる過程で廃棄されたものと思われる。湧水が著しく，井戸跡である可能性もある。時期は，出土遺物から江戸時代と考えている。（高　林）

23号土坑　ＳＫ23（図18・25，写真8）

本土坑は調査区東のＪ５グリッドに位置する。１号掘立柱建物跡と重複し，本遺構が古い。本遺構の南２mには29号土坑が位置する。暗褐色土の隅丸の方形として認識した。検出面はＬⅢである。平面形は東西に長い隅丸方形である。規模は92cm×80cmを測る。検出面から底面まで12cmである。壁面は緩やかに立ち上がる。底面はやや丸みを帯びている。堆積土は暗褐色土の１層である。

堆積土内から遺物は８点出土した。１点のみ図示した。図25－１は口縁部から頸部にかけての徳利である。頸部には「とびかんな」が施されている。器壁は薄く，胎土は緻密で硬い。

本遺構は１号検出面からも浅く，機能は不明である。時期は１号掘立柱建物跡に壊されていることから，建物跡よりも古い遺構であることがわかる。また，出土遺物より近世と考えられる。（三　浦）

24号土坑　ＳＫ24（図18，写真9）

本土坑は調査区東のＪ４グリッドに位置している。２次調査で確認した遺構である。撹乱と重複していて，本遺構が古い。本遺構の東３mには29号土坑が位置する。ＬⅢより黄色土塊などを含ん

だ暗褐色土の円形として認識した。

平面形は若干東西に長い不整円形である。規模は直径約1.7mを測る。検出面から底面までの深さは，31cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦に造られている。堆積土は１層のみである。黄褐色土がまだらに含まれることから，人為的に埋められた土坑であると判断した。本遺構から遺物の出土はなかった。

本遺構の底面からは湧水が著しく，井戸跡や水溜めとして使用されていた可能性も考えられる。所属時期は，出土遺物から近世であると考えている。（三　浦）

25号土坑　ＳＫ25（図19，写真９）

本遺構は調査区東のＪ５グリッドに位置している。２次調査で検出した遺構である。重複関係はない。ＬⅢより黄褐色土を含んだ暗褐色土の円形として認識した。

平面形は直径約150cmを測る。検出面から底面までの深さは，75cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は凹凸が認められるが，平坦を意識して造られているようである。

堆積土は５層に分けた。ℓ１・２は暗褐色土を主体とした層で，あまり混入物等が認められないことから，自然堆積と判断した。ℓ３は黄褐色土塊を斑らに含んだ暗褐色土層で，人為堆積と判断した。ℓ４は土坑底面に認められる層で，自然堆積と考えた。ℓ５は黄褐色土を含んだ暗褐色土層で，土坑壁面に貼り付けられた層である。底面から土坑壁面に沿って，垂直に貼り付けられている。堆積土からの出土遺物は47点である。小破片のみで図示できる資料はなかった。

本遺構の底面は湧水が著しく，井戸跡や水溜めとして使用されていた可能性も考慮している。所属時期は，出土遺物から近世であると考えている。（三　浦）

26号土坑　ＳＫ26（図19，写真９）

本遺構は調査区東のＩ５・６，Ｊ５・６グリッドに位置する。２次調査において確認した。重複関係は認められない。近接して北１mには27号土坑，北２mには28号土坑が位置する。暗褐色土の不整円形として確認した。

平面形は直径約110cmの不整円形である。検出面から底面までの深さは，22cmを測る。壁面は緩やかに立ち上がるが，壁面東半は傾斜がやや緩い。底面は西半のほうが10cm程度下がり，段を有する。堆積土は暗褐色土１層である。出土遺物は認められなかった。

本土坑は底面に段をもつ土坑である。出土遺物はなかったが，堆積土の土質や土色が周囲の土坑と類似することから，近世と推測できる。機能は不明である。（三　浦）

27号土坑　ＳＫ27（図19・25，写真９）

本遺構は調査区東のＩ６グリッドに位置する。２次調査において確認した。重複関係はない。近接して北１mには28号土坑，南１mには26号土坑が位置する，褐色土をまだらに含んだ暗褐色土の

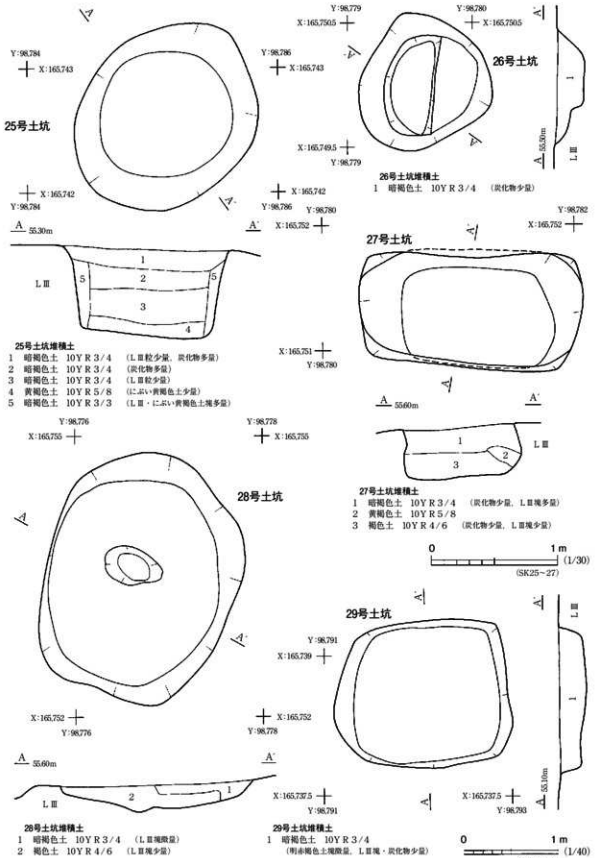

25号土坑
Y:98,784
X:165,743
X:165,742
Y:98,784
A
55.30m
A'
25号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4　（LⅢ粒少量，炭化物多量）
2　暗褐色土　10YR3/4　（炭化物多量）
3　暗褐色土　10YR3/4　（LⅢ粒少量）
4　黄褐色土　10YR5/8　（にぶい黄褐色土少量）
5　暗褐色土　10YR3/3　（LⅢ・にぶい黄褐色土塊多量）
LⅢ
Y:98,786
X:165,743
X:165,742
Y:98,786
Y:98,780
X:165,752
X:165,751
Y:98,780
Y:98,779
X:165,750.5
X:165,749.5
Y:98,779
Y:98,780
X:165,750.5
26号土坑
26号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4　（炭化物少量）
55.30m
LⅢ
Y:98,782
X:165,752
27号土坑
A
55.60m
A'
27号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4　（炭化物少量，LⅢ塊多量）
2　黄褐色土　10YR5/8
3　褐色土　10YR4/6　（炭化物少量，LⅢ塊少量）
LⅢ
0
1 m
(1/30)
(SK25～27)
Y:98,776
X:165,755
X:165,752
Y:98,776
Y:98,778
X:165,755
28号土坑
A
55.60m
A'
28号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4　（LⅢ塊微量）
2　褐色土　10YR4/6　（LⅢ塊少量）
LⅢ
Y:98,791
X:165,739
X:165,737.5
Y:98,791
X:165,737.5
Y:98,793
29号土坑
55.10m
29号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/4
（明赤褐色土塊微量，LⅢ塊・炭化物少量）
0
1 m
(1/40)
(SK28・29)

図19　25～29号土坑

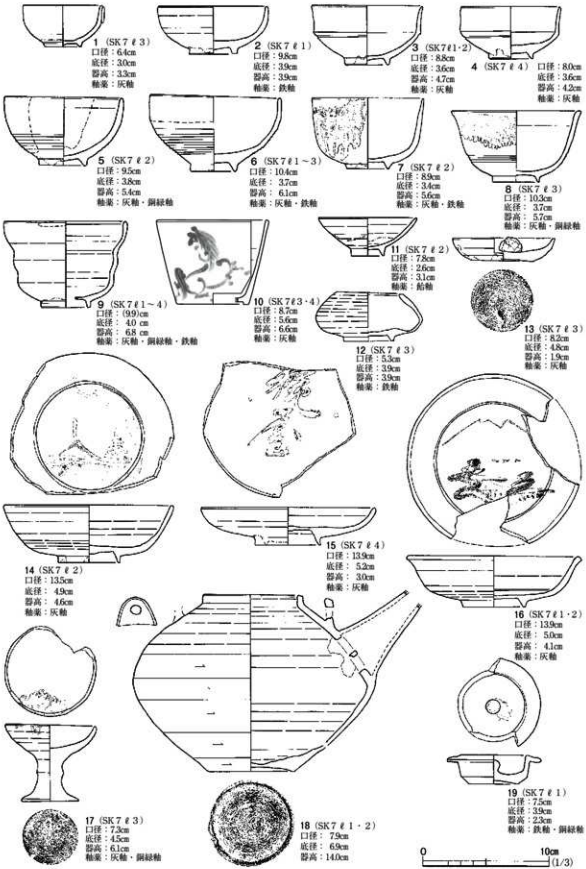

1（SK７ℓ３）
口径：6.4cm
底径：3.0cm
器高：3.3cm
釉薬：灰釉
2（SK７ℓ１）
口径：9.8cm
底径：3.9cm
器高：3.9cm
釉薬：鉄釉
3（SK７ℓ１・２）
口径：8.8cm
底径：3.6cm
器高：4.7cm
釉薬：灰釉
4（SK７ℓ４）
口径：8.0cm
底径：3.6cm
器高：4.2cm
釉薬：灰釉
5（SK７ℓ２）
口径：9.5cm
底径：3.8cm
器高：5.4cm
釉薬：灰釉・銅緑釉
6（SK７ℓ１～３）
口径：10.4cm
底径：3.7cm
器高：6.1cm
釉薬：灰釉・鉄釉
7（SK７ℓ２）
口径：8.9cm
底径：3.4cm
器高：5.6cm
釉薬：灰釉・鉄釉
8（SK７ℓ３）
口径：10.3cm
底径：3.7cm
器高：5.7cm
釉薬：灰釉・銅緑釉
9（SK７ℓ１～４）
口径：（9.9）cm
底径：4.0 cm
器高：6.8 cm
釉薬：灰釉・銅緑釉・鉄釉
10（SK７ℓ３・４）
口径：8.7cm
底径：5.6cm
器高：6.6cm
釉薬：灰釉
11（SK７ℓ２）
口径：7.8cm
底径：2.6cm
器高：3.1cm
釉薬：飴釉
12（SK７ℓ３）
口径：5.3cm
底径：3.9cm
器高：3.9cm
釉薬：鉄釉
13（SK７ℓ３）
口径：8.2cm
底径：4.8cm
器高：1.9cm
釉薬：灰釉
14（SK７ℓ２）
口径：13.5cm
底径：4.9cm
器高：4.6cm
釉薬：灰釉
15（SK７ℓ４）
口径：13.9cm
底径：5.2cm
器高：3.0cm
釉薬：灰釉
16（SK７ℓ１・２）
口径：13.9cm
底径：5.0cm
器高：4.1cm
釉薬：灰釉
17（SK７ℓ３）
口径：7.2cm
底径：4.5cm
器高：6.1cm
釉薬：灰釉、銅緑釉
18（SK７ℓ１・２）
口径：7.9cm
底径：6.9cm
器高：14.0cm
19（SK７ℓ１）
口径：7.5cm
底径：3.9cm
器高：2.2cm
釉薬：鉄釉・銅緑釉
0　10cm
(1/3)

図20　土坑出土遺物（１）

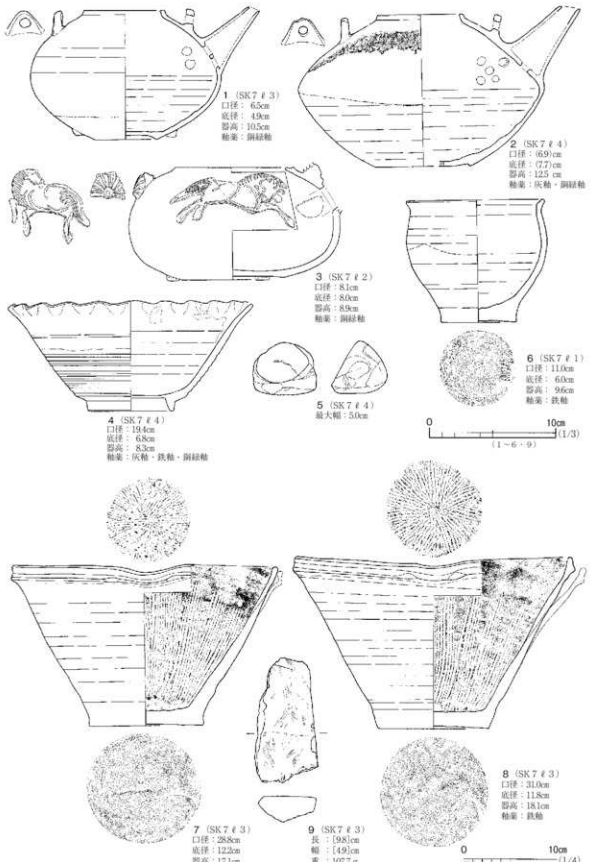

1（SK７ｆ３）
口径：6.5cm
底径：4.9cm
器高：10.5cm
釉薬：銅緑釉
2（SK７ｆ４）
口径：(6.9)cm
底径：(7.7)cm
器高：12.5 cm
釉薬：灰釉・銅緑釉
3（SK７ｆ２）
口径：8.1cm
底径：8.0cm
器高：8.9cm
釉薬：銅緑釉
4（SK７ｆ４）
口径：19.4cm
底径：6.8cm
器高：8.3cm
釉薬：灰釉・鉄釉・銅緑釉
5（SK７ｆ４）
最大幅：5.0cm
6（SK７ｆ１）
口径：11.0cm
底径：6.0cm
器高：9.6cm
釉薬：鉄釉
0　10cm　(1/3)
（1～6・9）
7（SK７ｆ３）
口径：28.8cm
底径：12.2cm
器高：17.1cm
釉薬：鉄釉
9（SK７ｆ３）
長　：(9.8)cm
幅　：(4.9)cm
重　：1077ｇ
石質：流紋岩
8（SK７ｆ３）
口径：31.0cm
底径：11.8cm
器高：18.1cm
釉薬：鉄釉
0　10cm　(1/4)
（7・8）

図21　土坑出土遺物（2）

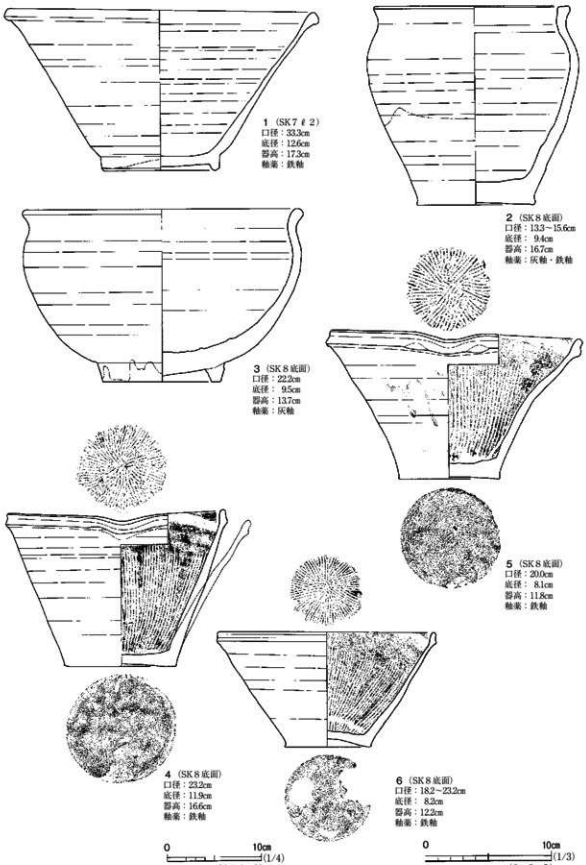

1（SK７ｆ２）
口径：33.3cm
底径：12.6cm
器高：17.3cm
釉薬：鉄釉
2（SK８底面）
口径：13.3～15.6cm
底径：9.4cm
器高：16.7cm
釉薬：灰釉・鉄釉
3（SK８底面）
口径：22.2cm
底径：9.5cm
器高：13.7cm
釉薬：灰釉
5（SK８底面）
口径：20.0cm
底径：8.1cm
器高：11.8cm
釉薬：鉄釉
4（SK８底面）
口径：23.2cm
底径：11.9cm
器高：16.6cm
釉薬：鉄釉
6（SK８底面）
口径：18.2～23.2cm
底径：8.2cm
器高：12.2cm
釉薬：鉄釉
0　10cm　(1/4)
（1・4・6）
0　10cm　(1/3)
（2・3・5）

図22　土坑出土遺物（３）

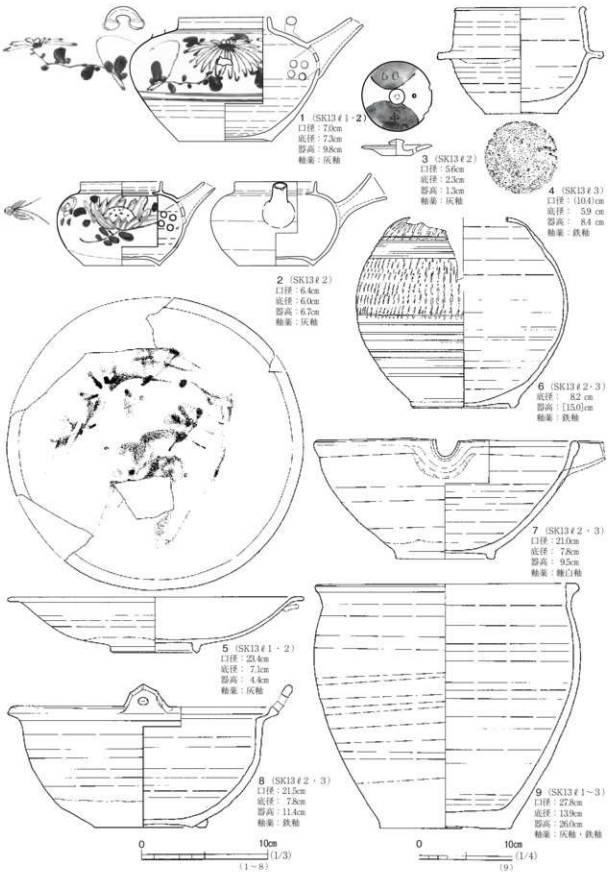

1（SK13ℓ1・2）
口径：7.0cm
底径：7.3cm
器高：9.8cm
釉薬：灰釉
2（SK13ℓ2）
口径：6.4cm
底径：6.0cm
器高：6.5cm
釉薬：灰釉
3（SK13ℓ2）
口径：5.6cm
底径：2.3cm
器高：1.3cm
釉薬：灰釉
4（SK13ℓ3）
口径：（10.4）cm
底径：　5.9 cm
器高：　8.4 cm
釉薬：鉄釉
6（SK13ℓ2・3）
底径：　8.2 cm
器高：（15.0）cm
釉薬：鉄釉
7（SK13ℓ2・3）
口径：21.0cm
底径：7.8cm
器高：9.5cm
釉薬：灰白釉
5（SK13ℓ1・2）
口径：23.4cm
底径：7.1cm
器高：4.4cm
釉薬：灰釉
8（SK13ℓ2・3）
口径：21.5cm
底径：7.8cm
器高：11.4cm
釉薬：鉄釉
9（SK13ℓ1～3）
口径：27.8cm
底径：13.9cm
器高：26.0cm
釉薬：灰釉・鉄釉
0　10cm
（1/3）
（1～8）
0　10cm
（1/4）
（9）

図23　土坑出土遺物（4）

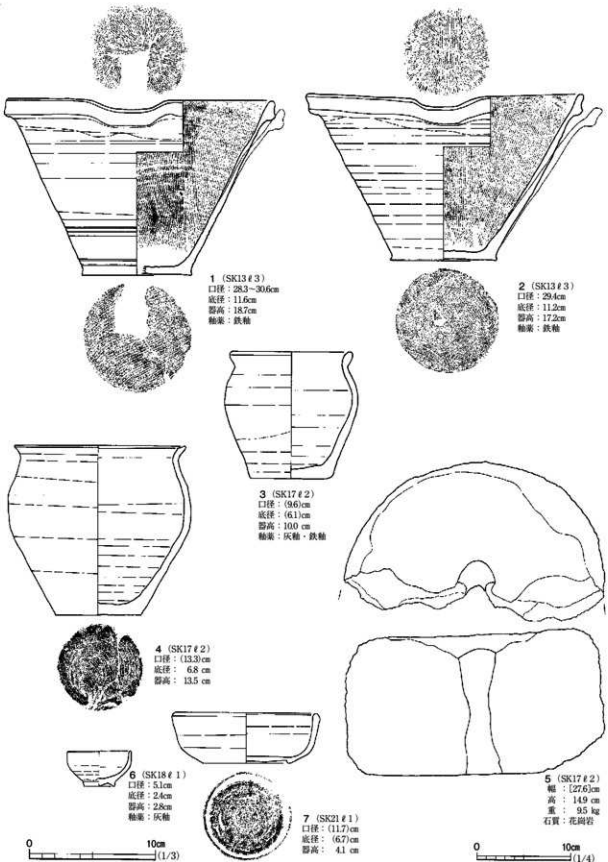

1（SK13ℓ3）
口径：28.3～30.6cm
底径：11.6cm
器高：18.7cm
釉薬：鉄釉
2（SK13ℓ3）
口径：29.4cm
底径：11.2cm
器高：17.2cm
釉薬：鉄釉
3（SK17ℓ2）
口径：(9.6)cm
底径：(6.1)cm
器高：10.0 cm
釉薬：灰釉・鉄釉
4（SK17ℓ2）
口径：(13.3)cm
底径：　6.8 cm
器高：　13.5 cm
5（SK17ℓ2）
幅：[27.6]cm
高：　14.9 cm
重：　9.5 kg
石質：花崗岩
6（SK18ℓ1）
口径：5.1cm
底径：2.4cm
器高：2.8cm
釉薬：灰釉
7（SK21ℓ1）
口径：(11.7)cm
底径：(6.7)cm
器高：　4.1 cm
0　10cm
(1/3)
(3・4・6・7)
0　10cm
(1/4)
(1・2・5)

図24　土坑出土遺物（５）

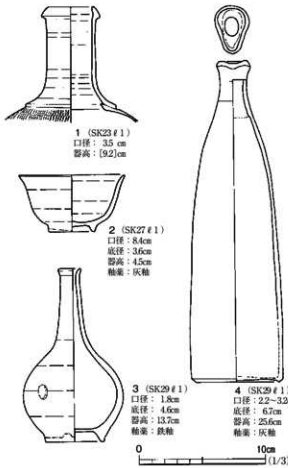


図25　土坑出土遺物（6）

長方形として認識した。

平面形は東西に長軸をもつ長方形である。規模は177cm×95cmである。検出面から底面までの深さは，45cmを測る。南北壁面は底面から丸みをもって立ち上がり，底面から15cm程度の高さで最大値を測る。さらに検出面に向かって内側に傾斜して立ち上がる。底面はわずかに凹凸が認められるが，平坦面を意識して造られている。堆積土は3層に分けた。ℓ1・3は主体となる土にまだらに混入物が認められることから，人為堆積と判断した。ℓ2は壁面崩落土であり，人為堆積である。

堆積土中から61点の遺物が出土した。器形が復元できた1点のみ図示した。図25－2は小型の端反碗である。灰釉が底部を除く，器面全体に施されている。

本土坑は東西長軸の長方形の土坑である。壁面が大きくオーバーハングする点が特徴的である。出土遺物から近世の土坑であると考えている。当初の機能は不明であるが，最終的には廃棄場として使用されたと考えている。　（三　浦）

28号土坑　ＳＫ28　（図19，写真9）

本遺構は調査区東のＩ６グリッドに位置する。重複関係はない。近接して1ｍ南に27号土坑，2ｍ南に26号土坑が位置する。暗褐色土の大きな円形として確認にした。

平面形は北東－南西に長軸をもつ楕円形である。規模は2.6m×2.2mである。検出面から底面までの深さは34cmを測る。底面から壁面にかけては緩やかに立ち上がる。底面は丸みを帯びる。底面ほぼ中央に62cm×40cmの小穴が認められた。堆積土は2層に分けた。混入土であることや堆積状況より，いずれも人為堆積と判断した。堆積土中から22点の遺物が出土した。いずれも小破片であるため，図示できなかった。

本土坑は長短軸２ｍを超える大きな土坑である。調査所見からは機能を推測することは困難である。時期は出土遺物より，近世と考えられる。　（三　浦）

29号土坑　ＳＫ29（図19・25，写真9）

本遺構は調査区南東のＪ・Ｋ４グリッドに位置する土坑である。重複関係はない。北1ｍに1号

掘立柱建物跡と23号土坑が位置する。暗褐色土の大きな方形として認識した。

平面形は西壁にやや丸みをもつ方形である。規模は1.9m×1.6mを測る。検出面から底面までの深さは29cmである。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はわずかに凹凸が見られるが，平坦を意識して造られているようである。堆積土は１層のみである。

遺構内からの出土遺物は12点である。２点図示した。図25－３は小型の油壺である。底部がわずかに割れているのみの完形品である。鉄釉が施されている。最大径を測る胴部には，窯内に隣接して置かれた他の陶器の粘土が付着している。同図４は瀬戸利である。器面全体に灰釉が施されている。図などは描かれていない。

本土坑は２m近い大きな土坑である。出土遺物から近世に使用されていたと判断できるが，機能は不明である。　（三　浦）

第４節　掘立柱建物跡・柱列・小穴

本遺跡では掘立柱建物跡１棟，柱列１列，小穴を29個確認した。小穴は建物跡や柱列などを構成していたと考えられるが，今回の調査においては２個以上の組み合わせを確認することはできなかった。主に調査区の南東において検出され，いずれも近世から近代にかけての陶器窯跡に付随する遺構と考えられる。

１号掘立柱建物跡　ＳＢ１（図26，写真10）

遺　　構

本遺構はＪ・Ｋ５グリッドに位置している。検出面はＬⅢである。周囲は土坑や小穴が集中している区域である。23号土坑と重複し，本遺構が新しい。12基の柱穴跡と柱穴間に認識できた踏み締まりの痕跡を本建物跡として認定した。建物跡を構成する柱跡は規則的に配列されている。

本建物跡は南北２間，東西４間の東西に長い建物跡である。平面形は長方形である。各柱列はそれぞれ東西・南北方向を基本軸としている。各芯々間の距離はＰ１とＰ７間は4.2m，Ｐ11とＰ13間は3.5m，Ｐ９とＰ11間は4.2m，Ｐ１とＰ９間は3.7mである。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は約15㎡である。また，踏み締まりなどによる硬化面が確認できた。

各柱穴の平面形は円形と不整楕円形がある。平面が円形の柱跡は直径27～42cmを測る。平面が楕円形の柱跡の規模は長軸41～54cm，短軸35～47cmである。検出面から底面までの深さは25～65cmを測る。全ての柱跡には柱痕が確認できた。柱痕は直径15～29cmである。遺構内堆積土は柱痕と掘形埋土の２層に分けた。ℓ２とした掘形埋土は，粘土を含んだ土を用いている。遺物はＰ２から１点，Ｐ９から２点出土しているが，小破片のため図示しなかった。

ま　と　め

本建物跡は２間×４間の平面形が長方形になる建物跡である。柱穴に囲まれた範囲からは硬化面

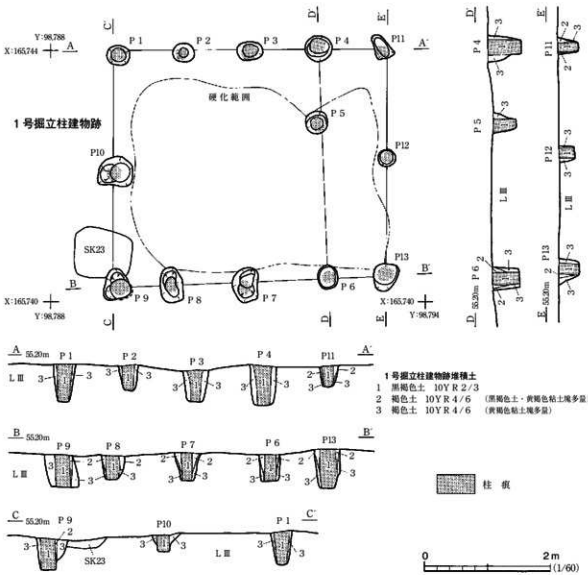


図26　１号掘立柱建物跡

を確認した。周囲からは陶器生産に関わると考えられる土坑が検出されていることから，本建物跡も陶器生産に関わる作業小屋のような機能を持っていたと想定できる。時期は出土遺物より，近世から近代にかけてと考えられる。（三　浦）

１号柱列　ＳＡ１（図27）

本遺構は調査区東より中央のＩ３グリッドに位置する。２次調査において確認した。重複関係はない。近接して３ｍ西に１号特殊遺構が位置する。２基の柱穴跡として，ＬⅢで検出した。

本柱列は２基の柱穴で構成されている。１次調査と２次調査にまたがって確認したため，建物跡であった可能性も残るが，周囲を精査したが小穴は認められなかった。Ｐ１とＰ２の芯々間の距離は1.4mである。

柱穴の平面形は楕円形で，Ｐ１の規模は長軸51cm，短軸33cmである。柱穴内には根石が認められ

た。検出面から根石までの深さは18cm，底面までの深さは34cmを測る。Ｐ２の規模は長軸47cm，短軸37cmである。検出面から根石までの深さは15cm，底面まで29cmを測る。

堆積土は３層に分けた。ℓ１は柱を抜き取り後に流入した土である。ℓ２・３は掘形埋土である。根石の周囲に堆積している。遺物は出土しなかった。

本遺構は根石持つ２基の柱穴で構成された柱列である。時期は出土遺物から近世から近代にかけてと推測できる。（三　浦）

小　穴　Ｐ　（図５）

調査区の南東から小穴を確認した。建物跡や柱列として構成できない小穴をまとめた。Ｄ１・２，Ｇ４，Ｉ２・３，Ｊ２～４・Ｋ３・４グリッドに分布している。特に調査区南東のＪ３，Ｋ３・４に集中して認められる。遺構検出面はＬⅢである。

小穴の平面形は円形または楕円形である。直径30cm前後である。検出面から底面までの深さは12～45cmを測る。堆積土は黒褐色土または暗褐色土である。柱痕は確認できなかった。

確認した小穴の多くは，近世から近代にかけてと考えられる。（三　浦）

第５節　溝　　跡

１・２・３・４号溝跡　ＳＤ１・２・３・４　（図５，写真11）

溝跡は調査の時点で１～４号溝跡と番号を付して調査を行った。１号溝跡は南北方向へ延び，２～４号溝跡は東西方向へと延びている。異なる番号を付けているが，一連のものと考えている。

検出面はＬⅢ上面である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。溝幅は最大で1.6m，最小で0.4mを測

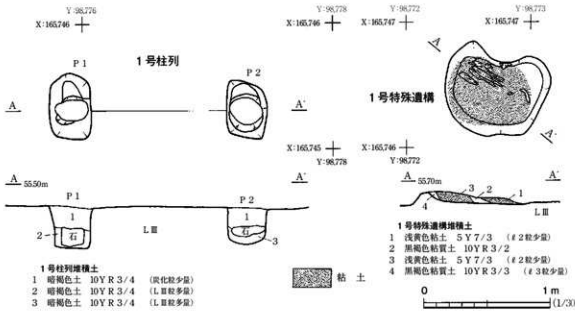


図27　１号柱列，１号特殊遺構

る。検出面からの深さは，最大で26cmである。

堆積土は２層に区分した。いずれも暗褐色土で，炭化物を微量に含んでいる。堆積土からは，陶磁器片42点，鉄製品２点が出土した。図示し得るものはなかった。大半はすり鉢・甕の破片である。

本溝跡は近年まで使用されていた小道の側溝である。南北の調査区外へのびるが，近現代の所産である遺構と判断したため，本調査区の南北部分については調査を行わないこととした。（高　林）

第６節　特殊遺構

１号特殊遺構　ＳＸ１（図27，写真11）

本遺構は，調査区東のＩ３グリッドに位置し，標高55.3m前後の南東方向に下る緩斜面に立地している。遺構検出面はＬⅡ上面である。

平面形は不整円形で，規模は幅85cm，検出面からの深さが10cmである。遺構内には粘土が確認でき，不整楕円形の範囲で認められた。粘土範囲の規模は長軸70cm，短軸59cm，厚さは５～８cmである。周壁は，西北壁が急角度で立ち上がるが，東南壁は遺存状況が悪く，ほとんど残っていない。底面は平坦である。底面から木質遺物が出土したので，板のようなものが敷かれていたものと考えている。

堆積土は３層に区分した。ℓ１の浅黄色粘土について胎土分析（付章１）を実施した。本遺構から出土した粘土は，すり鉢の原材料の粘土である可能性が高いとの分析が得られた。

本遺構は陶土として使用可能な粘土が出土したことから，陶土置場であったと考えられる。時期は遺物が出土していないが，粘土置場と考えられることから，１号陶器窯と同時代の近世に所属するものと思われる。（高　林）

第７節　遺構外出土遺物

遺構外から21,924点の遺物が出土した。その内訳は陶器が21,329点，磁器が543点，縄文土器７点，金属製品17点，銭貨13点，石器２点，石製品13点である。出土地点は調査区南側中央のＧ３，Ｈ３・４グリッドからの出土量が全体の７割弱を占めている。

陶　　器（図28～39，写真12～15）

図28－１～５は小碗である。５には筒描きで花文を描いている。図28－６～34，図29－１～５は碗である。図28－６・７は腰折碗，図28－８～16は切立碗，図28－17～21は端反碗，図28－22～27は丸碗，図28－33は広東碗である。図28－８・９・30，図29－３には鉄釉によって駒絵が描かれ，高台内は釘彫である。図28－16の体部外面中程には斜め方向の擦痕がみられる。図28－11・24～27は鉄釉と灰釉の掛け分け。図28－25～27の体部外面下端には沈線が巡る。図28－21の体部外面には泥塗加飾に飴色発色の鉄釉が施されている。図28－22の外面には鉄釉地に線刻で木葉文などを描い

たのち，灰釉を筋状に加えている。内面には灰釉が施されている。図28－23は灰釉地に鉄釉による掛け流し。図28－28～31は体部が逆「ハ」の字状に開く。31は完形品で灰釉地に銅緑釉の掛け流し。図28－32は外傾気味に体部が立ち上がる。図28－34の体部外面下半には海綿技法による加飾が施されている。体部外面下半に鉄釉が，体部外面上半と見込に灰釉が施されている。高台内には相馬の刻印がある。図28－35は猪口で，鉄釉によって駒絵が描かれている。高台内には螺旋状の沈線がみられる。図29－１・２は胎土に砂鉄を含み，型抜きによる駒形を貼り付けている。２には型抜きによる九曜が貼り付く。図29－４の高台内には判読不明の墨書が記されている。図29－５は筒描きで駒絵を描いている。

図29－11・12は小鉢である。11は蛇の目高台で，12には波間に漂う帆掛け舟を鉄釉で描いている。図29－13は鉄釉・銅緑釉で草花文が描かれている。図29－８は印刻文折洲輪花皿で，見込に二重六角が刻印されている。

図29－６・７は手塩皿で，灰釉地に鉄釉の掛け流しが施されている。図29－９・10は押型成型の小皿である。10は蜻蛉と花弁，９は花菖蒲の図柄である。図29－14・15は押型成型の角皿である。14は花文が陽刻され，一部鉄釉が施されている。高台内に「谷津田」の銘が入る。15は蝶２匹が陽刻され，羽と胴に鉄釉が施されている。図29－20はかわらけで底部の切り離しは回転糸切である。図29－16・18は皿の底部破片で，高台内に墨書が記されている。16は「市」，18は判読不明である。

図29－17・19は灯明皿で，芯立が取り付くものである。図29－21・図30－１は油壺，図30－２は小型壺形容器，図30－３・４はひょうそくである。４の底部外面は穿孔されている。図30－５は仏飯器で，灰釉地に鉄釉の掛け流しが施されている。脚部の中程には稜が形成されている。

図30－６～15は土瓶の蓋である。６・７・９は落とし蓋で，白掛山水文土瓶の蓋である。白絵土を塗り筒描きにより文様が描かれている。８・10は型抜き文様，８・12～14のつまみは型抜きの菊花文で，12～14は銅緑釉土瓶の蓋である。11は鮫肌釉土瓶の蓋である。15はつまみが付かないものである。図30－16～19，図31，図32－１・２は土瓶である。図30－16～19，図31－１・９～11の耳は型抜き，図31－２・３・６～８，図32－２～４は手びねりの耳が取り付く。土瓶の形状は扁平な隠元形，丸形，算盤玉形，ティーポット形などがある。図31－10・11の体部外面下端には，ボタン状の貼り付けが３箇所みられる。図30－16～19では欠損箇所があり，ボタン状の貼り付けは２箇所しか確認できないが，本来は３箇所あったものと考えている。図30－17・18，図31－10の体部外面下端から底部にかけて炭化物が付着しているので，火に掛けて使用していたのだろう。図31－１は熱を受け釉の大半が消えている。図31－２～５は白掛山水文土瓶で，５には型抜き文様と組み合うものである。図31－８は他の土瓶と比べて胎土に砂粒が多く含まれ，器厚が厚い。図31－７は白絵土に砂鉄を混ぜたものを塗り，筒描きにより梅を描いている。図31－９は型抜き文様で松と梅を陽刻している。図32－１は底部を穿孔している。図32－２は押型により成形されたもので，底部外に「請」の刻印が押されている。胎土には砂鉄が含まれている。

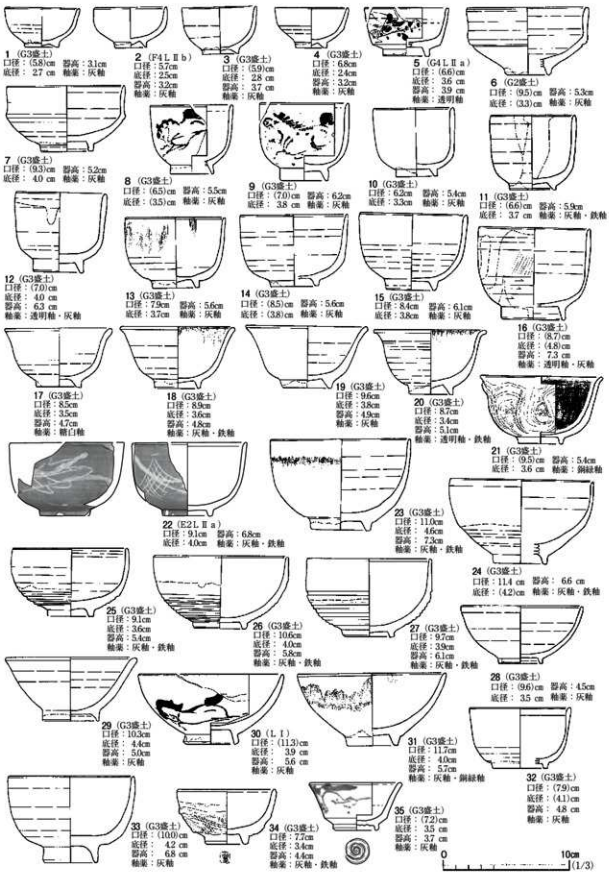


図28　道構外出土遺物（１）

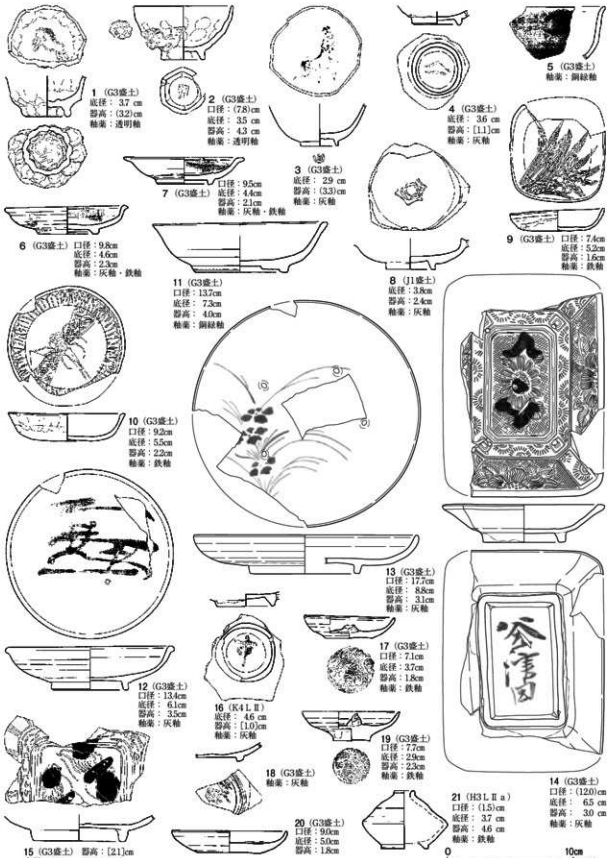


図29　遺構外出土遺物（２）

図32－３・４は大土瓶である。３は胎土に砂鉄を含んでいる。体部外面上半に指頭圧痕を加えている。底部外面下端にはボタン状の貼付が３箇所ある。駒絵は型抜きの駒形に描くものと器面に描くものがある。４は染付により蛸唐草文が描かれている。図32－５・６は急須である。５は胎土に砂鉄を含んでいる。筒描きにより駒絵が描かれている。図33－１は徳利である。鉄釉によって山水画が描かれている。

図33－２～４は徳利である。２・３は「とびかんな」と平行沈線文が組み合わさる。施釉の鉄釉は飴色の発色である。４は鉄釉により花文が描かれている。

図33－５～７は仏花器である。５の施釉は外面では糠白釉に貫入が入り，内面は鉄釉地に発色の異なる鉄釉を掛け流している。脚部中程には稜が形成されている。６・７は頸部の破片で，６には外面に灰釉が施されている。

図33－８・10は火入である。高台は蛇の目高台で，鉄釉地になまこ釉の掛け流しが施されている。10は外面に鉄釉が施され，「中田佐」の刻書がされている。

図33－９は瓶掛形火鉢である。外面には泥塗加飾と型抜きによる獅子が２箇所貼り付く。獅子には串穿孔されている。施釉は外面に口縁部から頸部にかけて銅緑釉，胴部に飴色発色の鉄釉が施されている。高台部が欠損している。図33－11は鉢の底部で，底部外面に「小全□□市三」の刻書がなされている。外面に灰釉，見込に鉄釉が施される。図33－12は有脚受皿の口縁部である。外面と見込に灰釉が施されている。

図34－１・２，図35－１～３は甕である。図34－１・２の施釉は口縁部から胴部上半にかけて灰釉，それ以外は鉄釉である。図35－１・３の施釉は，外面が口縁部から胴部上半にかけて灰釉，胴部下半と見込が鉄釉である。２は括れのない器形である。図34－３は短頸壺で，外面に鉄釉となまこ釉，見込に灰釉が施されている。

図34－４～６は植木鉢である。４は６面に型押しによる梅花文，青海波文，襷状に菊花文帯，花文帯が施されている。５は灰釉を刷毛塗りして，なまこ釉を施している。

図35－４は片口である。口縁部が肥厚するもので，施釉に貫入がみられる。図35－５・６は行平である。５は施釉がなされていないもので，把手の部分である。６は注口の部分で，外面と見込に灰釉が施されている。図35－７は行平の蓋である。つまみが欠損している。外面に「とびかんな」を施し，筒描きにより草花文を描いている。見込には透明釉が施されている。

図35－８・９，図36－１～６は鉢である。図35－８は外面に鉄釉の掛け流しが施されている。胎土に砂粒が含まれず，他の鉢と比べ丁寧なつくりである。図35－９は体部が逆「ハ」の字状に開くもので，見込に窯体片が付着している。胎土に多量の砂粒が含まれることや高台を削り出していることなど，図36－３・４と共通している。図36－１は染付によって文様が描かれている。図36－２～４・６は漆手の鉢である。２は灰釉を下地とし，さらに発色の異なる灰釉を刷毛塗りによって仕上げている。見込には僅かに窪ませた凹線で文様を描いている。図36－５は無高台で施釉されていないものである。７は土鍋で，施釉がなされていない。把手の耳は欠損している。体部外面下端に

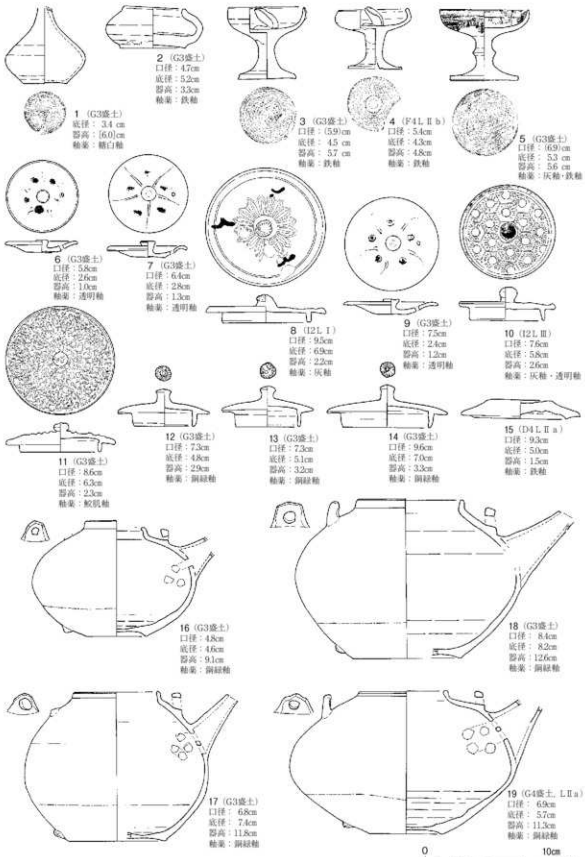


図30　遺構外出土遺物（３）

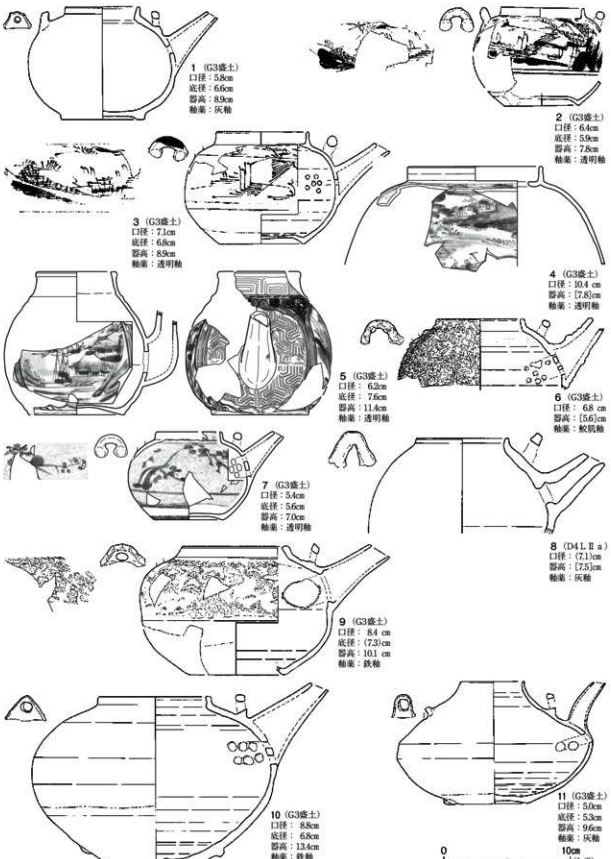


図31　遺構外出土遺物（４）

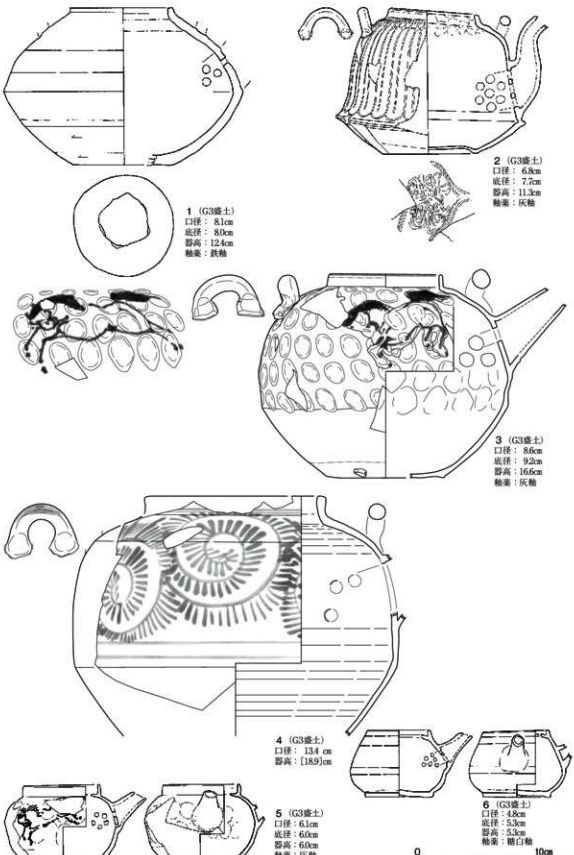


図32　遺構外出土遺物（５）

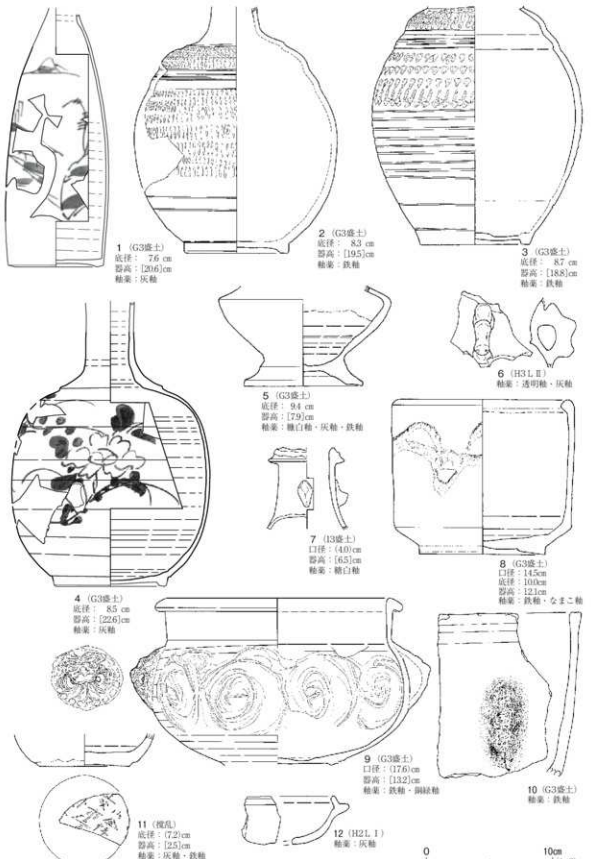


図33　道構外出土遺物（６）

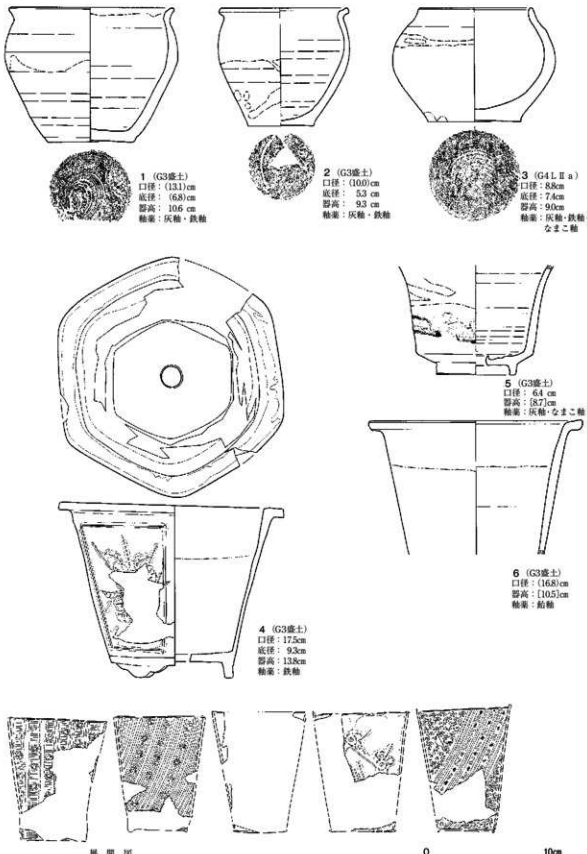


図34　道構外出土遺物（７）

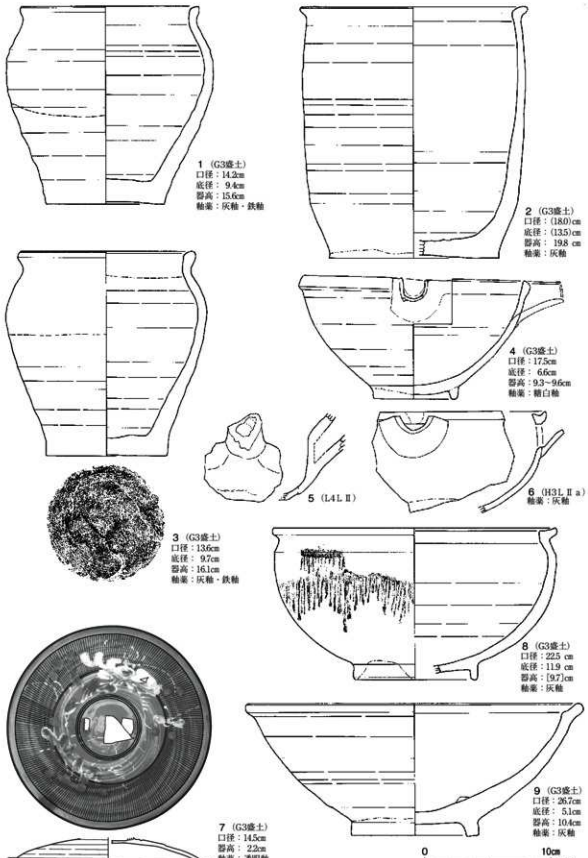


図35　道構外出土遺物（８）

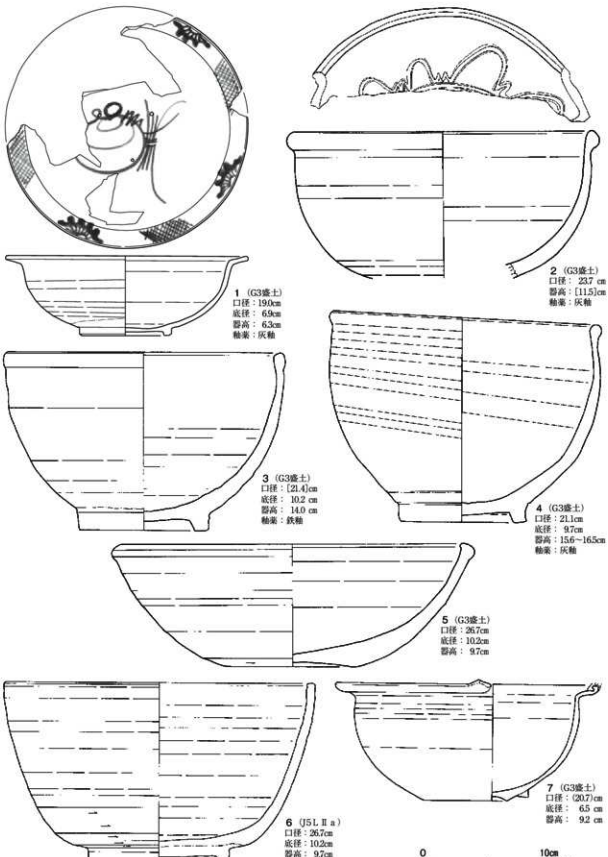


図36　道構外出土遺物（９）

はボタン状の貼付が３箇所ある。

図37はすり鉢である。６は施釉がなされていないもので，それ以外のものは外面・見込に施釉がなされている。２・３・５は口縁の一端が片口状となっているものである。条線は１・２・５・６がまばらで，３・４・７が密である。条線の単位は１・５・６が７本で，２が６本である。７には重ね焼きに用いられたダンゴが付着している。ダンゴにはもみが多量に含まれていた。

図38－１～３は大甕で，１・２は施釉されていないものである。１は丸鶴の貼付文が２箇所みられる。口唇部は面取りがなされ，胴部上半に最大径がある。見込にはロクロ目が明瞭である。２は胴部下半から底部にかけてのものである。１・２ともに底部外面はヘラケズリによって仕上げている。３は外面の鉄釉に加えて胴部上半に発色の異なる鉄釉を施し，見込には灰釉が施されている。図38－４・５は瓶掛形火鉢で，施釉されていない。台状をなす外部下端から強く括れて胴部に至る。外面下端には型押文が巡る。４には胴部にも型押文が施されている。底部外面には，台を付け足した際の指頭圧痕が巡っている。各々の底部外面には記銘がなされている。４は「□氏」の墨書，５は「小ノ口」の刻書である。

図39－１・２は火鉢で，施釉されていない。１は角火鉢で，型押しによる菊花文が縁取りされた枠内に施されている。２は短い脚が付く，現状では２箇所であるが，本来は３箇所付いていたと考えている。胴部に３箇所の穿孔，内面に刺突がなされている。

図39－３は卸陶板で外面に墨書されているが判読不明である。

磁　　器（図39・40，写真12・14・15）

磁器はいずれも染付で文様が描かれ，透明釉が施されている。図39－４は筒形碗で，網目地に菊花が描かれている。図39－５は小丸碗，図39－６・７，図40－１・２は端反碗である。図39－５～７・図40－１には笹，草花などが描かれている。図40－２は外面に鋸歯状文と垂下線文，内口縁にも鋸歯状文が描かれている。

図40－４・６は皿である。見込に４は丸文と蔦，６は蝶・唐草文が描かれている。４は高台内を蛇の目釉剥ぎしている。図40－５は段重で牡丹などが描かれ，図40－３が段重の蓋である。図40－７は朝徳利で山水画が描かれている。

図39－４は18世紀後半～19世紀代の肥前系産である。図39－５・７は19世紀代のものである。図39－６，図40－１～５・７の染付はコバルトを用いた明治期のものである。そのうち図40－４は瀬戸・美濃系産である。

窯　道　具（図40・41）

遺構外から出土した窯道具は，窯跡から出土した窯道具と比較すると異なるものが多い。図40－８～11，図41－１は輪状の焼台である。図40－８はすり鉢の底部が溶着したものである。図40－10・11は三角形に，図41－１はアーチ状に切り取れられている。図41－２は中空の臼状トチンである。内外面に白色粘土を塗っている。図41－３は窯道具としたが戸車とも考えている。図41－４は足付ハマに含まれるものと考えているが，他の窯道具と比べて胎土に砂粒がほとんど含まれていな

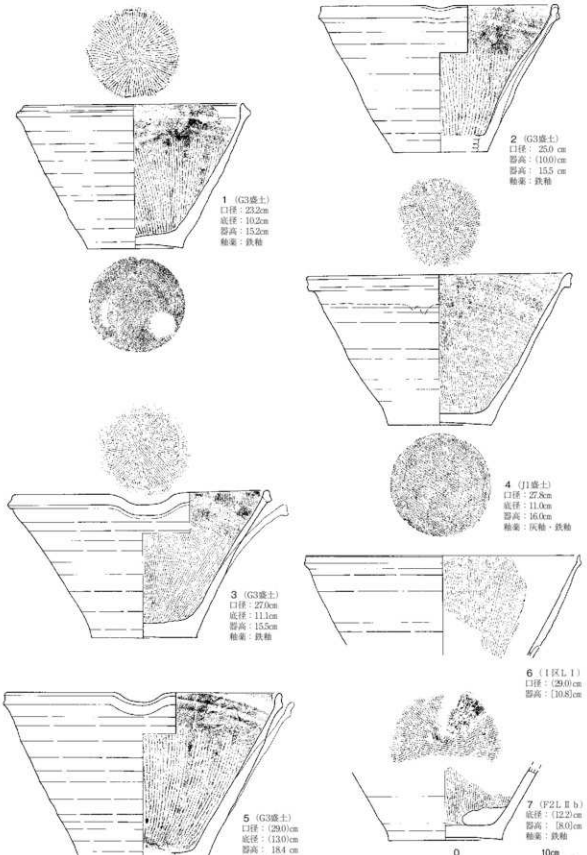


図37　遺構外出土遺物（10）

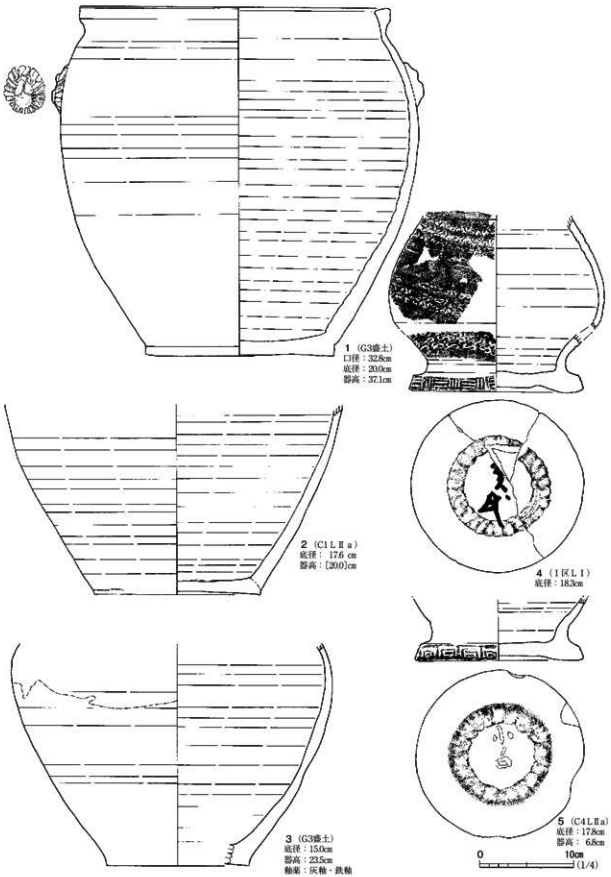


図38　遺構外出土遺物（11）

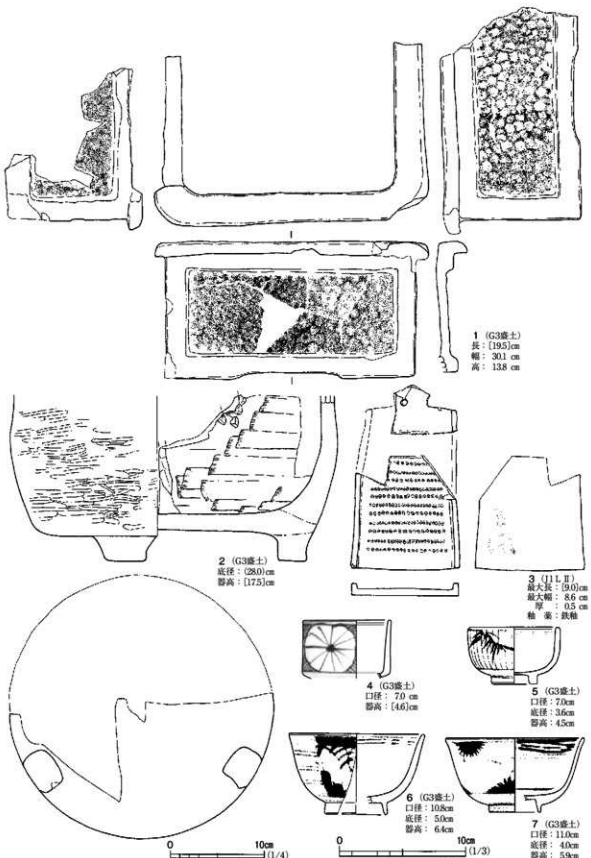


図39　遺構外出土遺物（12）

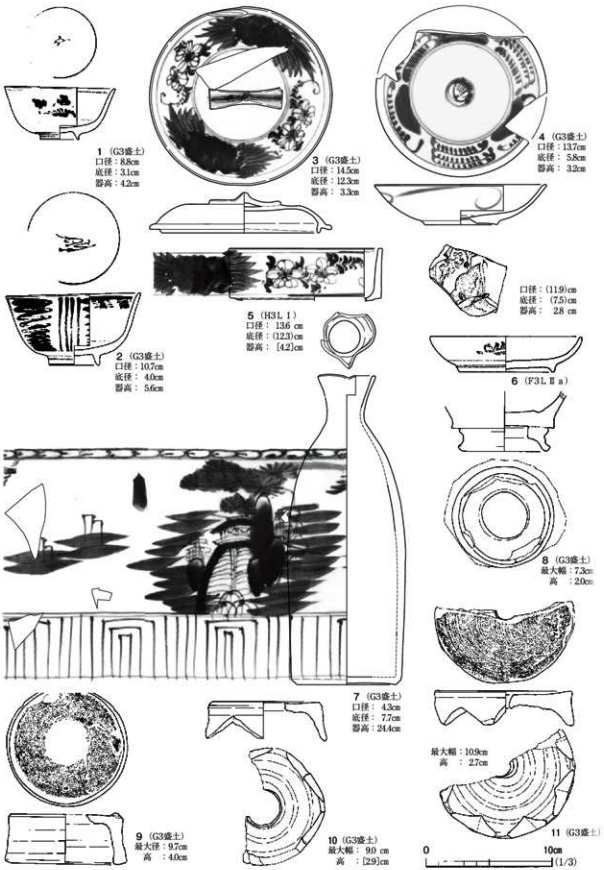


図40　道構外出土遺物（13）

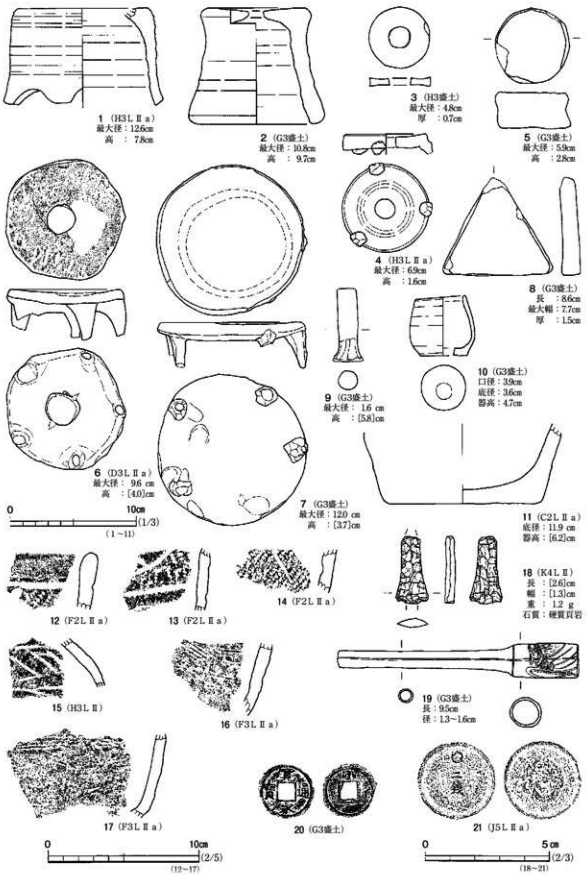


図41　遺構外出土遺物（14）

い。図41－５は円形ハマ，図41－６・７は足付ハマで５本の足が付く，図41－８は三角形ハマである。７の上面には製品の痕跡がみられる。図41－９はトチンで最も小さいものである。図41－10の用途は不明であるが，釉薬の発色を試験するための容器とも考えられる。

縄文土器・石器（図41）

図41－11～17は縄文土器で，縄文時代後・晩期に属すると考えている。図41－18は石鏃で凸基有茎鏃である。先端と茎が欠損している。

金属製品・銭貨（図41）

図41－19は煙管の吸口である。材質は銅合金とみられ，毛彫により文様が施されている。図41－20は「寛永通寶」である。背面に「小」がみられる。寛文８年（1668年）以降に鋳造された新寛永でハ寶である。図41－21は二銭銅貨である。明治から昭和にかけて流通していた。明治10年の銘が認められる。表面の一部には緑青が確認できる。（吉　野）

第3章　ま　と　め

第1節　遺物について

遺物の出土傾向　調査区からは29,442点の遺物が出土した。その内訳は，陶器が28,098点，磁器が575点，窯道具が662点，縄文土器22点，石器２点，石製品15点，金属製品55点，銭貨13点である。主な遺構からの出土点数は，窯跡で5,274点，土坑で2,043点，遺構外で21,923点である。陶器が出土点数の95％で，遺構外からの出土が75％である。

陶器の器種ごとの傾向は図44に示した。窯跡では碗が大半を占め，土坑では碗の割合が多いものの，その他の器形においては大差のない割合で出土している。遺構外では甕・壺などが約半数を占め，その次に土瓶・鉢・すり鉢などが多い。

器種分類（図42・43）　器種分類については，大堀相馬焼の灰原を調査した浪江町中平遺跡の報告書で示された分類と比較検討するため，上記報告書の器形特徴に準じた。

小碗A　最も小型のもの
　B　体部上半が直立する
　C　体部外面下半で屈曲して体部上半が直立する
碗A　腰折碗　　**B**　筒形の切立碗
　C　切立碗　　**D**　端反碗
　E　丸碗　　**F**　体部外面下半に沈線が巡る丸碗
　G　体部が開く碗　　**H**　胴締めの碗
　I　手びねりの碗
小鉢A　体部が丸く立ち上がり，素口縁の小鉢
小鉢B　腰部が強く湾曲し，肥厚する口縁の小鉢
灯明皿　底部が回転糸切り離しのもの
皿A　手塩皿　　**B**　大型の皿

片口
鉢　深手の丸鉢
土鍋　底部に高台がなく，把手がある
小型壺形容器
徳利A　すず徳利　　**B**　燗徳利
仏飯器　脚部中段に穀があり，口縁が開く
ひょうそく
火入　口唇部が見込側に屈曲し，体部は直立する
土瓶A　扁平な隠元形　　**B**　丸型の土瓶
すり鉢A　口縁部が片口状にならないもの
　B　口縁部が片口状になるもの
甕　口縁部が外反し，最大径が胴部上半にある

この他にも型押し成型の皿・行平・仏花器・瓶掛・油壺・急須などがある。施釉との関係でみてみると，碗・皿・鉢・片口・ひょうそく・仏飯器は灰釉，土瓶は銅緑釉，灯明皿・土鍋・甕・すり鉢は鉄釉である。

図44は分類した碗の出土傾向を窯跡，土坑，遺構外で示したものである。窯跡では碗Ｅ・Ｆが大半を占め，土坑では碗Ｃ・Ｄが多く，遺構外では碗Ｄがその大半を占めている。碗の大半を占めている碗Ｅ・Ｆの法量分布を図45でみてみる。碗Ｆは各個体の法量が散在し，まとまりがみられない。一方，碗Ｅは口径が９～12㎝，器高が５～７㎝，高台径が４～５㎝の範囲で数値のまとまりがみられた。

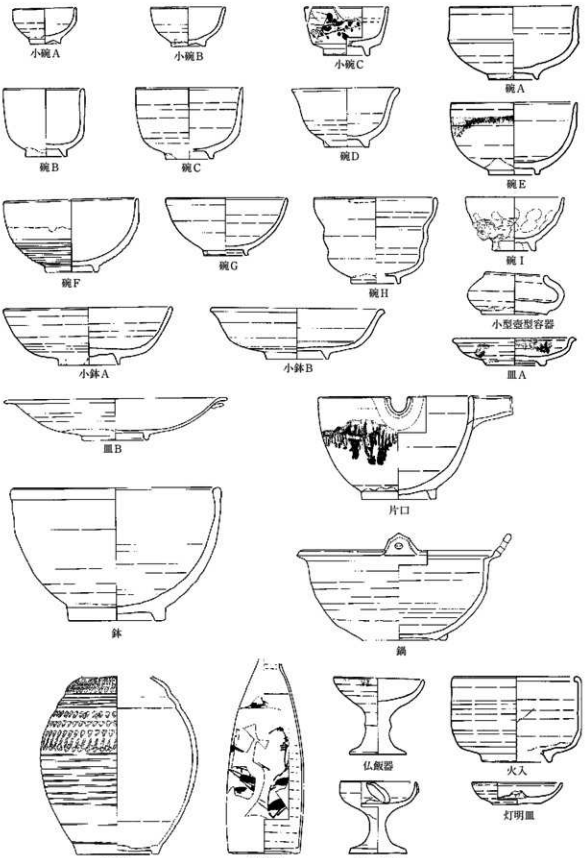


図42　出土陶器分類図（1）

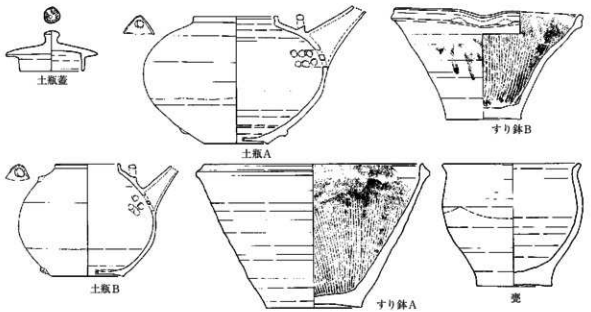


図43　出土陶器分類図（2）

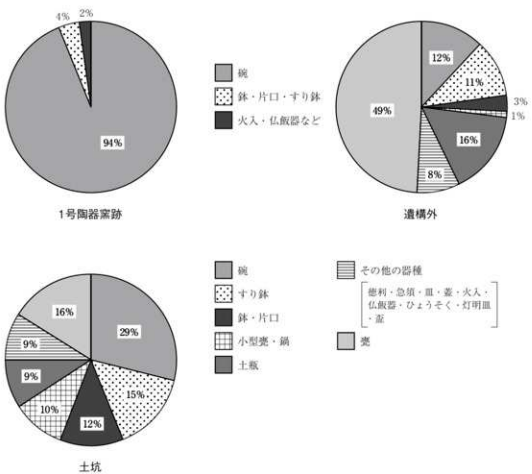


図44　出土陶器組成図

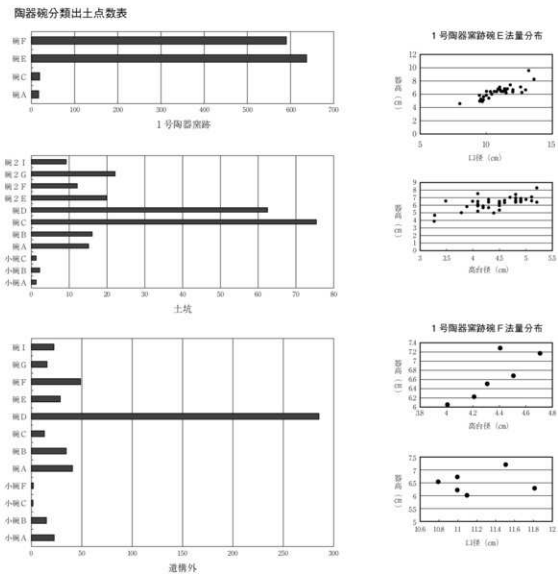


図45　陶器碗出土点数・法量分布図

中平遺跡との比較　中平遺跡と本遺跡で共通する器種は，小碗Ａ～Ｃ，碗Ａ～Ｉ，小鉢Ａ・Ｂ，皿Ａ・Ｂ，鉢，鍋，徳利，仏飯器，ひょうそく，灯明皿，土瓶Ａ・Ｂ，すり鉢Ａなど日常雑器の主なものが共通している。しかし，ともに器種の欠落が若干みられる。本遺跡では小碗・碗の器形の多様化はないが，土瓶の器形の多様化があり，中平遺跡にはない片口，火入，すり鉢Ｂなどがある。一方，中平遺跡では小碗・碗，徳利の器形の多様化があり，本遺跡にはほとんどみられない有脚受皿などがある。なお，中平遺跡で碗２Ｈとした小杉碗は，図示はしていないが本遺跡においても７号土坑から出土している。

年代の検討　まず，Ｂ面窯跡出土遺物について検討する。福島県内では碗Ｅが中平遺跡の５号近世墓から出土し18世紀代とされている。次に碗Ｅ・Ｆがいわき市泉城跡５号土坑から出土し18世紀前葉から中葉とされている。このことから，碗Ｅ・Ｆは18世紀代の範疇に入る。

以下，関根達人氏による大堀相馬焼の編年に従い本遺跡出土陶器の年代を検討していく。碗Ｅは

図45法量分布図に示すように口径に対して器高が低く，口縁部直下の括れがない。さらに，大振りなものが含まれている。碗Fは口径に対して器高が低く，碗Aは稜線の上下に沈線が伴う。以上の特徴から碗A・E・Fは18世紀後葉とすることができる。さらに見込に印花文のある折縁輪花皿についても18世紀後葉に位置付けられている。よって，B面窯跡出土遺物は18世紀後葉とする。

遺構外出土遺物は後世の土地改変により当初の堆積層は失われてしまっているが，多量の陶器と窯道具が出土しているので窯跡A面の灰原を主体とするものと考えている。以下，遺構外出土遺物についてみてゆく。関根氏の編年によると碗C・碗D・土瓶・鉄絵皿類は18世紀末～19世紀初頭に現れる。特に土瓶の変遷について初期の土瓶は，撫で肩で口頸部が短く，全体につぶれ気味である。耳は型作りである。19世紀中葉には，次第に肩が張るようになり，耳は粘土紐によるリング状のものが主流となる。さらに，山水土瓶が作られるようになり，土瓶の蓋に落し蓋が登場する。このことから，土瓶は土瓶Aから土瓶Bへと変遷し，白掛山水画土瓶に至るようである。銅緑釉土瓶と蓋は東京都千駄ヶ谷五丁目遺跡の19世紀前葉～後葉にかけての遺構から出土している。徳利・鍋・行平は19世紀前葉以降，植木鉢は19世紀中葉とされている。図34－4に類似する植木鉢は三春城下近世追手門前通遺跡群E地点から出土し，19世紀前半とされている。

碗Ⅰは明治元年に陶工小野田兼重が「手びねり雅物」を創始して以来で，鮫肌釉は明治前半期となる。泥漆加飾された瓶掛形火鉢（図33－9）は，瀬戸・美濃産の瓶掛を模倣し，独自の加飾を加えたものと考えている。山田秀安氏によると海綿技法で加飾した碗（図28－34）は大正期のものとされている。以上のことから，遺構外出土遺物の主な時期は19世紀代から大正期までを考えている。

図44に示した遺構外出土遺物の器種構成では甕が大半を占めていた。このことはB面窯跡の主体が碗であることから，小型品から大型品へと変化したようである。その判断はA面の調査をする機会を待つしかない。

窯道具　図46の窯道具出土点数で示すように，窯道具は窯跡から出土したものが大半を占めている。ここでは窯跡出土の窯道具について述べておく。窯道具の種類はトチン・方形ハマ・円形ハマ・足付ハマ・ツメ・ダンゴなどがある。トチンは棒状の両端に円盤が接着されているもので，最大径により大中小に分けた。その基準はトチン大が10cm以上，トチン中4～9.9cm，トチン小2～3.9cmである。図46の窯道具出土点数でみると，窯跡からの出土が大半を占めている。そのなかでもトチン中が最も多く，ツメ・トチン小・方形ハマがそれに次いでいる。図47は窯跡から出土したトチン最大径の傾向を円グラフで割合を棒グラフで点数を示した。トチン大では12cm，トチン中では4・5cm，トチン小では3cmのものが多く占めている。図12－2～4はトチンに溶着した碗・火入・仏飯器もしくはひょうそくなどがある。これらはトチンに直接製品を置いて焼成したことが分かる資料である。図9－3は施釉されていない見込に，高台の溶着がみられることから，器種によっては重ね焼きが行われていた。さらに，図12－11の方形ハマに溶着した碗や図13－2の円形ハマに製品を置いた痕跡などから，方形・円形・足付ハマについても直接製品を置いて焼成していたようである。現状ではトチンとハマの使い分けについて所見を示すような根拠はないが，トチン中では多く

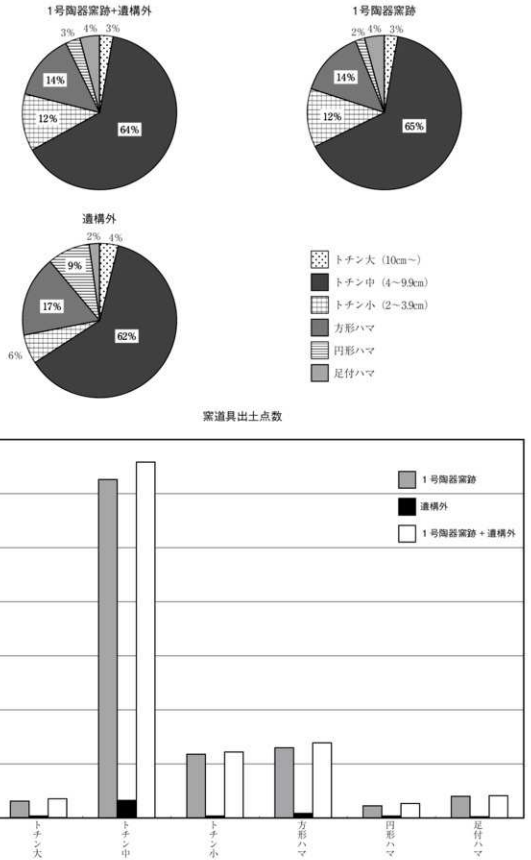
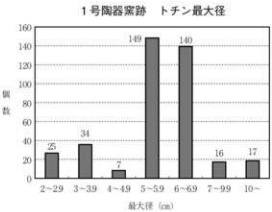
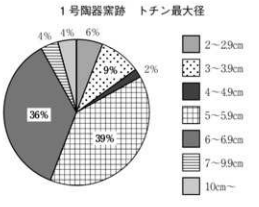
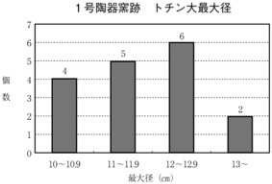
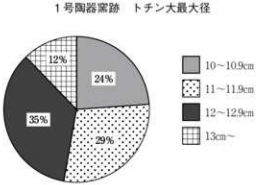

1号陶器窯跡+遺構外
3%
4%
3%
14%
12%
64%
1号陶器窯跡
2%
4%
3%
14%
12%
65%
遺構外
2%
4%
9%
17%
6%
62%
トチン大（10cm～）
トチン中（4～9.9cm）
トチン小（2～3.9cm）
方形ハマ
円形ハマ
足付ハマ
窯道具出土点数
個数
350
300
250
200
150
100
50
0
1号陶器窯跡
遺構外
1号陶器窯跡＋遺構外
トチン大
トチン中
トチン小
方形ハマ
円形ハマ
足付ハマ

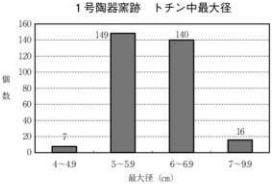
図46　窯道具計測図（1）

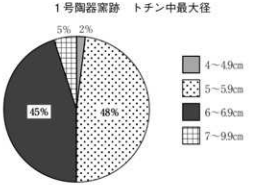

1号陶器窯跡　トチン最大径
個数
最大径（cm）
2～2.9
3～3.9
4～4.9
5～5.9
6～6.9
7～9.9
10～
25
34
7
149
140
16
17

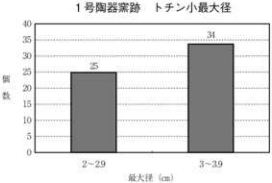

1号陶器窯跡　トチン最大径
2～2.9cm
3～3.9cm
4～4.9cm
5～5.9cm
6～6.9cm
7～9.9cm
10cm～
4%
4%
6%
9%
2%
36%
39%


1号陶器窯跡　トチン大最大径
個数
最大径（cm）
10～10.9
11～11.9
12～12.9
13～
4
5
6
2


1号陶器窯跡　トチン大最大径
10～10.9cm
11～11.9cm
12～12.9cm
13cm～
12%
24%
35%
29%


1号陶器窯跡　トチン中最大径
個数
最大径（cm）
4～4.9
5～5.9
6～6.9
7～9.9
7
149
140
16


1号陶器窯跡　トチン中最大径
4～4.9cm
5～5.9cm
6～6.9cm
7～9.9cm
5%
2%
45%
48%


1号陶器窯跡　トチン小最大径
個数
最大径（cm）
2～2.9
3～3.9
25
34

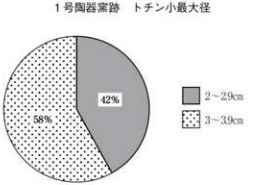

1号陶器窯跡　トチン小最大径
2～2.9cm
3～3.9cm
42%
58%

図47　窯道具計測図（2）

の製品を重ね焼きするには安定性に欠けるため単品用として，ハマは重ね焼き用と考えている。さらに，足付ハマについても重ね焼きに向かないため，小型単品用と考えている。トチン大は図12－８の製品の痕跡から皿に用いられ，さらに大型の図12－10は鉢・片口・すり鉢に用いられていたのであろう。ツメ・ダンゴは重ね焼きの際，製品との間に使用したものである。ツメは見込目跡から皿・鉢・片口に用いられ，ダンゴは図37－７を参考にするとすり鉢に用いられていたようである。一方，遺構外出土の窯道具は輪状の焼台・臼状トチンなど，窯跡出土のものと形態が異なっている。これらの窯道具をＡ面に伴うものとすると，Ｂ面と異なる構造・製品の変化に対応したものだろうか。

第２節　遺構について

調査区からは陶器窯跡１基，土坑29基，掘立柱建物跡１棟，柱列１列，溝跡４条，特殊遺構１基，小穴29個を検出した。ここでは，陶器窯跡とそれに関わる土坑についてまとめておくこととする。

陶器窯跡　１号陶器窯跡は登窯で盛土によって築かれ，２回の造り替えがなされていた。新しい窯跡のＡ面は焼成室の一部を調査し，火格子の一部を検出した。火格子の間隔は16cmである。現状で推定したＡ面の規模は長軸がほぼ南北方向の全長が6.7m以上，焼成室幅が2.6mである。

古い窯跡のＢ面は焼成室の約半分を調査した。床面の傾斜度が17°，全長が5.8m，焼成室の幅は推定で2.8mである。これは大堀相馬焼の窯跡である長井屋窯跡の全長が18m，焼成室の幅が2.5～3.1mで，大熊町山神窯跡の全長が８m，焼成室の幅が2.05mと比較すると小振りな窯である。

本窯跡ではＡ面で火格子を検出したので，焼成室に横狭間の仕切りが設けられたものと考えている。焼成室の数は推定した全長からすると２室程度のものであったのだろう。Ｂ面の焼成室には間仕切がない。床面には間仕切の痕跡もみられなかった。これは，Ａ面の構築に際して横狭間の仕切りを撤去し，整地がなされたと考えている。

土　坑　陶器窯跡に関連する土坑の特徴をまとめると以下のとおりである。

Ⅰ類　平面形は長方形，壁面と底面に粘土が貼られ，底面壁際に溝が巡るもの（１・２・15・17号土坑）。

Ⅱ類　平面形は円形，底面にのみ粘土が貼られ，底面壁際に溝が巡るもの（21号土坑）。

Ⅲ類　平面形は楕円形を基調とするもので，底面に粘土を置いたもの（６・16号土坑，１号特殊遺構）。

その他に陶器と粘土が廃棄されていたもの（13号土坑），底面から５個体の完形品が出土したもの（８号土坑）などがある。

Ⅰ・Ⅱ類は平面形状が異なるが，壁際に巡る溝が共通することから同一の機能と考えている。17号土坑の溝から木質遺物が出土したことから，壁面に板を巡らせていたと考えている。さらに，６・13号土坑，１号特殊遺構の粘土について胎土分析もしくは耐火度分析を実施した。その評価は，胎

土分析では比較試料で挙げたすり鉢の原材料の可能性が高く，耐火度分析では耐火度の優れた粘土であるとの評価であること。調査所見においても，粘土は人為的に置かれたものであるから，Ⅲ類は陶土置場と考えている。

以上のことから，調査区の東にかけて粘土の保管・水簸などに関わる施設があったことが判明した。さらに製作・乾燥などを行った場所は言明できないが，掘立柱建物跡や，Ⅰ区の中央部には溝以外遺構がないことから，この空間が陶器の乾燥場とも考えることができる。

最後に「瀬戸系譜」『半谷文書』によると，田尻村では半谷仁右衛門―同五郎右衛門―同五右衛門―同仁右衛門―同巳三郎らの名が記されている。この文書は製陶技術の伝授を一子相伝とした誓紙で，古書年号が宝暦２（1753）年のものを寛政５（1794）年に書写したものである。大堀相馬焼の創業を知る最も古いものである。窯跡Ｂ面の時期である18世紀後葉からすると，窯元は半谷巳三郎と推察している。　（吉　野）

引用・参考文献

大熊町史編纂委員会編　1977　『近世・山神窯跡の研究』大熊町
高橋良一郎　1977　「相馬のやきもの」『ふくしま文庫40』福島中央テレビ
飯村　均　1987　「福島県新地町十二所Ａ遺跡の近世陶磁器」『福島考古　第28号』福島県考古学会
東北陶磁文化館　1987　『東北の近世陶磁』
大橋　康二　1989　『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社
福島県文化センター編　1989　『国営請戸川農業水利事業遺跡調査報告　中平遺跡』福島県教育委員会
浪江町教育委員会　1989　『大堀・長井屋窯跡』
福島県立博物館　1990　『企画展　東北の陶磁史』
いわき市教育文化事業団編　1992　『泉城跡』いわき市・いわき市教育委員会
服部　郁　1994　「近世瀬戸窯における磁器生産の開始と展開」『研究紀要　第２輯』瀬戸市埋蔵文化財センター
東北大学埋蔵文化財調査委員会　1994　『東北大学埋蔵文化財調査年報７』
成瀬　晃司　1997　「江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷」『東京大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』東京大学埋蔵文化財調査室
千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会　1997　『千駄ヶ谷五丁目遺跡―新宿新南口ＲＣビル（タイムズスクエアほか）の建設に伴う緊急発掘調査報告書―』
堀内　秀樹　1998　「消費遺跡出土陶磁器類の編年について」『東北大地方の在地土器・陶磁器Ⅱ』東北中世考古学会
関根　達人　1998　「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』東北大学埋蔵文化財調査研究センター
山田　秀安　2001　『大堀相馬焼の歴史　上巻』蒼海社
三春町教育委員会　2003　『三春城下近世追手門前通遺跡群Ｅ地点　町民センター関連遺跡発掘調査報告書』
山田　秀安　2003　『大堀相馬焼の歴史　下巻』蒼海社
関根　達人　2006　「北海道・東北」『江戸時代のやきもの―生産と流通―』瀬戸市文化振興事業団文化財センター

付章　自然科学分析

第１節　後田Ａ遺跡出土大堀相馬焼の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

浪江町に所在する後田Ａ遺跡は，阿武隈山地から太平洋に注ぐ高瀬川および請戸川水系の形成した段丘～丘陵斜面に位置する。丘陵は，新第三紀鮮新世に形成された海成の砂岩～泥岩層からなる大年寺層により構成されており，段丘は後期更新世に形成された中位Ⅱ段丘に対比されている（久保ほか1994）。

平成18年度に行われた発掘調査では，江戸時代の大堀相馬焼の陶器窯跡および土坑等の遺構が検出され，陶器窯跡からは多数の陶器片および窯道具が出土している。また，土坑の覆土からは粘土が出土しており，陶器原材料との関係が課題とされている。

本報告では，陶器窯跡から出土した陶器片の胎土について，その化学組成を明らかにすることにより，器種と胎土との関連性を探るとともに，土坑より出土した粘土についても同様の分析を行い，陶器原材料としての可能性を検討する。また，粘土については，その地質学的な特性を把握するため，薄片を作製し，偏光顕微鏡による観察も行う。さらに，過去に行われた，大堀相馬焼の窯跡出土陶器の分析例との比較も加え，江戸時代における大堀相馬焼の製作に関する資料を作成するものである。

１．試料

試料は，後田Ａ遺跡の窯跡より出土した陶器片８点と土坑および特殊遺構の覆土を構成していた粘土層より採取された粘土２点である。陶器片試料にはＦＢ2006001～ＦＢ2006008，粘土試料にはＦＢ2006009，ＦＢ2006010という資料番号がそれぞれ付されている。陶器片試料のうち，ＦＢ2006001は皿，ＦＢ2006002～ＦＢ2006004は碗，ＦＢ2006005，ＦＢ2006006は土瓶，ＦＢ2006007，ＦＢ2006008はすり鉢である。陶器片各試料の胎土外観は，ＦＢ2006001～ＦＢ2006006まではほぼ同様であり，色調は淡褐灰色，肉眼では砂粒の認められないきめの細かな状態が看取された。ＦＢ2006008のすり鉢も上記６点とほぼ同様のきめの細かな胎土であるが，色調は灰褐色を呈し，若干暗い。ＦＢ2006007のすり鉢については，色調はさらに暗く，暗灰褐色を呈し，中粒砂～粗粒砂程度の砂粒も少量認められた。

一方，粘土試料は，いずれも灰緑色を呈する砂混じりの粘土であり，極粗粒砂～細礫径の岩石片と思われる粒子も散在して含まれる。

各試料の出土遺構および出土層位については，一覧にして表１に示す。

2．分析方法

近世の陶器の胎土は，一般的に含有される砂粒の量も種類も少なく，かつ1000℃を超える高温焼成であることから，胎土中に含まれる砂粒の組成を指標とした胎土分析からはあまり有効なデータ

表1　試料一覧

資料番号	出土遺構	出土層位	遺物名	時　期	色　調	薄　片	蛍光X線
FB2006001	1号陶器窯跡	a区1層	皿	18世紀後半	淡褐灰色		●
FB2006002	1号陶器窯跡	1層	碗	18世紀後半	淡褐灰色		●
FB2006003	1号陶器窯跡	b区3層	碗	18世紀後半	淡褐灰色		●
FB2006004	1号陶器窯跡	b区4層	碗	18世紀後半	淡褐灰色		●
FB2006005	遺構外	Ⅱ層	土瓶	幕末～大正	淡褐灰色		●
FB2006006	遺構外	盛土	土瓶	幕末～大正	淡褐灰色		●
FB2006007	1号陶器窯跡	1層	すり鉢	－	暗灰褐色		●
FB2006008	遺構外	盛土	すり鉢	－	灰褐色		●
FB2006009	6号土坑	2層	粘土	－	灰緑色	●	●
FB2006010	1号特殊遺構	1層	粘土	－	灰緑色	●	●

は得られない。このような試料の場合は，胎土の化学組成による比較が有効となる。胎土の化学組成を求める方法としては，蛍光X線分析が用いられている例が非常に多い。前述した，過去の大堀相馬焼の分析例も蛍光X線分析であったことも考慮し，ここでは蛍光X線分析を用いる。なお，陶器片との比較を行う粘土試料も同様に蛍光X線分析を行うが，前述したように，粘土中には粗粒の岩石片なども認められることから，肉眼では認識できない細粒の砕屑物も多量に含まれていることが推定される。これらの砕屑物は，粘土試料の地質学的な特性を示すものであることから，その種類構成を把握することは重要である。したがって，ここでは，粘土試料の薄片を作製し，偏光顕微鏡による観察を行い，その特徴を把握する。以下に各分析方法の処理過程を述べる。

1）薄片作製観察

薄片は，樹脂による固化の後，ダイアモンドカッターで切断，正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製する。薄片は岩石学的な手法を用いて観察し，試料中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにする。また，酸化鉄などの鉄分の含まれる程度について定性的に記載する。

2）蛍光X線分析

波長分散型蛍光X線装置を用いたガラスビード法による定量分析を行う。

a）測定元素　測定元素はSiO_2，TiO_2，Al_2O_3，Fe_2O_3，MnO，MgO，CaO，Na_2O，K_2O，P_2O_5の10元素およびLOI（強熱減量：水分や有機物量の値に近い）である。

b）装置　理学電機工業社製ＲＩＸ1000（ＦＰ法のグループ定量プログラム）

c）試料調製　試料を振動ミル（平工製作所製ＴＩ100：10㎖容タングステンカーバイト容器）で微

粉砕し，105℃で４時間乾燥させた。この微粉砕試料についてガラスビートを以下の条件で作成した。

溶融装置：自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）

溶剤及び希釈率：融剤（ホウ酸リチウム）5.000ｇ：試料0.500ｇ

剥離剤：ＬｉＩ（溶融中１回投入）

溶融温度：1200℃　約７分

ｄ）測定条件　Ｘ線管：Ｃｒ（50Kv－50mA）

スペクトル：全元素Ｋα

分光結晶：ＬｉＦ，ＰＥＴ，ＴＡＰ，Ｇｅ

検出器：Ｆ－ＰＣ，ＳＣ

計数時間：PeaK40sec，Back20sec

３．結果

（１）薄片作製観察

観察結果を表２に示す。２点の試料は，ともに砂粒を中量程度含み，その最大径は４㎜前後で，粒径の淘汰度は不良といえる。また，いずれの試料も，砂粒のほとんどは石英の鉱物片であり，他の砕屑物としては，鉱物片では長石類，角閃石，雲母類，緑簾石などを微量含み，岩石片では安山岩類および花崗岩類を微量含む。さらに，薄手板状の形態であるバブル型の火山ガラスや植物片および，海綿骨針，放散虫，珪藻，植物珪酸体といった多種類の微化石が認められた。なお，輝石類やザクロ石，電気石などの鉱物片や泥岩，花崗斑岩などの岩石片のように，いずれか一方の試料にしか認められない鉱物片および岩石片もあり，また，ＦＢ2006010に含まれる花崗岩類は相対的に多いなど，２点間の試料の違いも若干存在する。

（２）蛍光Ｘ線分析

結果を表３に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として，以下に示す元素を選択し，それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した（図１～３）。

ａ）化学組成中で最も主要な元素（SiO_2，Al_2O_3）

ｂ）粘土の母材を考える上で長石類（主にカリ長石，斜長石）の種類構成は重要である。このことから，指標として長石類の主要元素であるCaO，Na_2O，K_2Oの３者を選択し，長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には，長石類全体におけるアルカリ長石の割合（Na_2O+K_2O）／（$CaO+Na_2O+K_2O$）を横軸とし，アルカリ長石におけるカリ長石の割合K_2O／（Na_2O+K_2O）を縦軸とする。

ｃ）輝石類や黒雲母，角閃石など有色鉱物における主要な元素　この場合，指標としてこれらの有色鉱物の主要な元素のうち，TiO_2，Fe_2O_3，MgOを選択し，Fe_2O_3を分母としたTiO_2，MgOの割合を見る。

また，これらの散布図では，器種をそれぞれ異なる記号で示した。

図１では，土瓶のＦＢ2006006が他の試料よりも若干離れた位置にあるが，グルーピングができるような散布状況ではない。これに対して，図２では，すり鉢のＦＢ2006007と粘土試料２点のグルー

表２　蛍光Ｘ線分析結果（化学組成）

資料番号	遺物名	主要元素											
		SiO_2 (%)	TiO_2 (%)	Al_2O_3 (%)	Fe_2O_3 (%)	MnO (%)	MgO (%)	CaO (%)	Na_2O (%)	K_2O (%)	P_2O_5 (%)	Ig.loss (%)	合計 (%)
FB2006001	皿	63.77	0.65	23.99	1.56	0.01	0.16	0.30	0.45	3.16	0.03	5.92	100.00
FB2006002	碗	64.81	0.80	27.34	1.27	0.04	0.18	0.34	0.21	2.51	0.02	2.48	100.00
FB2006003	碗	63.20	0.77	27.38	1.50	0.02	0.41	0.49	0.36	3.06	0.01	2.81	100.00
FB2006004	碗	61.73	1.30	27.71	1.59	0.02	0.27	0.40	0.33	1.95	0.02	4.68	100.00
FB2006005	土瓶	62.91	0.79	28.08	1.68	0.02	0.28	0.47	0.38	2.65	0.02	2.72	100.00
FB2006006	土瓶	75.61	0.35	18.85	0.84	0.01	0.17	0.24	0.28	3.54	0.01	0.10	100.00
FB2006007	すり鉢	65.68	0.70	18.81	3.23	0.03	0.33	0.97	1.49	1.14	0.09	7.53	100.00
FB2006008	すり鉢	64.91	0.70	29.11	1.34	0.02	0.23	0.38	0.36	2.86	0.02	0.08	100.00
FB2006009	粘土	61.90	0.73	21.64	4.29	0.02	0.47	0.69	0.93	1.14	0.02	8.17	100.00
FB2006010	粘土	69.09	0.62	18.24	3.30	0.02	0.38	1.18	1.38	1.49	0.01	4.29	100.00

プとＦＢ2006007以外の陶器片試料のグループとに明瞭に分離される。図３でも同様のグループの分離が認められるが，ＦＢ2006007以外の陶器片試料のグループは，図２に比べると分散傾向にある。

４．考察

（１）粘土試料の由来

薄片観察の結果記載で述べたように，２点の粘土試料間における鉱物片・岩石片の種類構成には若干の違いが認められたが，蛍光Ｘ線分析により化学組成が近似している（特に図２，３）ことや，多種の微化石が認められることなどから，その違いは本質的なものではなく，例えば，微量な鉱物片や岩石片の偏在による薄片下での検出の有無などに起因すると考えられる。すなわち，２点の粘土試料は，出土遺構は異なるが，含まれる砕屑物の由来する地質は同様であると考えられる。

粘土試料の由来する地質については，岩石片の産状から推定することができる。岩石片では，花崗岩類の岩石片が比較的多い傾向が認められたことから，後田Ａ遺跡の背後に広がる阿武隈山地を構成するいわゆる阿武隈花崗岩であると考えられる。阿武隈花崗岩の中には花崗斑岩も含まれている。また，微量混在する泥岩は阿武隈山地の東縁部に付随する丘陵を構成している新第三紀の泥岩層に由来すると考えられる。さらに，安山岩類の由来としては，丘陵や段丘の表層の土壌中に含まれる安達太良火山の噴出物（久保ほか1994）に由来する可能性がある。

なお，粘土試料に認められた微化石のうち，珪藻化石には湿地に生息する種類が認められ，植物珪酸体には栽培種であるイネ属が認められていることなどから，粘土は沖積低地で形成された堆積物である可能性がある。

（２）器種間の胎土の関係

蛍光Ｘ線分析結果から作図した図１～図３の散布状況からは，すり鉢のＦＢ2006007が他の陶器試料と組成が大きく異なることが示されたが，それ以外の陶器試料７点間における胎土の違いは，現時点では明瞭には認められない。すなわち，器種間の胎土の違いは現時点では認められない。た

だし，図２と図３の比較から，胎土中の鉄分やマグネシウムの含有量によって，器種間のわずかな胎土の違いが検出される可能性もあることが窺える。今後，各器種について多数の分析例を得ることができれば，胎土の違いの有無が明らかになることが期待される。

なお，今回の粘土試料については，すり鉢のＦＢ2006007の原材料となった可能性はあると考えられるが，他の陶器試料の原材料となった可能性は低い。ただし，原材料の一部として，あるいは水簸などにより調整した後に，今回の陶器試料の原材料となった可能性までは否定できない。その検証のためには，実験的な手法も用いた分析が必要と考えられる。

ところで，大堀相馬焼の胎土分析は，これまでに長佐古（長佐古1989）による蛍光Ｘ線分析例が報告されている。試料は，浪江町大堀に所在する中平遺跡で検出された大堀相馬焼窯跡より出土の碗３点と徳利，すり鉢，土瓶各１点の計６点である。これらの分析結果を表４に示すが，MnO，Na_2OおよびLOIが測定されていないことや合計が100％でないことなど，本分析とは直接数字の比較ができないデータとなっている。したがって，測定値をそのままデータとするSiO_2-Al_2O_3散布図およびNa_2Oのデータを必要とする長石類主要元素の散布図による，本分析結果との比較はできない。残る有色鉱物主要元素の散布図については，必要な３元素の測定値があり，散布図のデータは元素間の相対比であることから，比較は可能である。表４のデータから作成した有色鉱物主要元素の散布図を図４に示す。

図３と図４を比較すると，中平遺跡のすり鉢であるＴＭＮ0085は後田Ａ遺跡のすり鉢であるＦＢ2006007と非常に近い組成であることが，まず指摘される。また，中平遺跡の碗のＴＭＮ0081と土瓶のＴＭＮ0086は，後田Ａ遺跡の碗のＦＢ2006003や土瓶のＦＢ2006006に近い組成とみることができる。さらに，中平遺跡の碗のＴＭＮ0082と徳利のＴＭＮ0083は，後田Ａ遺跡の皿のＦＢ2006001に比較的近い位置にあるといえる。前述したように，後田Ａ遺跡の陶器試料のみからは，器種間の胎土の違いは不明瞭であったが，上記のような中平遺跡の結果を合わせると，碗やすり鉢に認められたように，器種内に複数種の胎土が存在する可能性のあることが考えられる。ただし，それは多数ではなくおそらく３～４種程度であり，その３～４種程度の土が，各器種における事情によって使い分けられているという状況も窺える。現時点では，このことはまだ仮説でしかないが，今後の大堀相馬焼の胎土分析の課題になり得ると考えられる。

引用・参考文献

久保　和也 他　　1994「浪江及び磐城富岡地域の土質」『地域地質研究報告』地質調査所

長佐古真也 他　　1989「中平遺跡物原出土陶器胎土の定量分析」『国営請戸川農業水利事業関連遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第208集

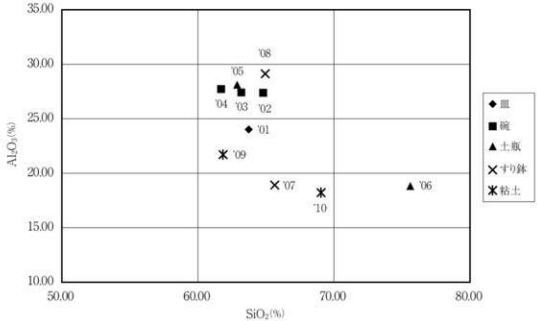
表3　粘土試料の薄片観察結果

資料番号	出土遺構	出土層位	砂粒			砂粒の種類構成																														孔隙度	方向性	粘土残存量	含鉄量	備考
			全体量	淘汰度	最大径	鉱物片																																		
						石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	パンペリー石	ザクロ石	白雲母	黒雲母	緑簾石	電気石	不透明鉱物	岩石片 泥岩	ガラス質安山岩	安山岩	花崗岩類	花崗斑岩	その他 火山ガラス	植物片	海綿骨針	放散虫	珪藻	植物珪酸体										
FB2006009	6号土坑	2層	○	×	4.5	△	+	+	+	+	+			+	+	+	+	+		+		+		+	+	+	+	+	+	△	×	○	+	火山ガラスの形態としてはバブルウォール型が認められる。植物珪酸体は数百粒含まれる。				
FB2006010	1号特殊遺構	1層	○	×	3.5	○	+	+			+	+	+	+	+	+	+		+	+		+	△	+	+	+	+	+	+	+	△	×	○	+	火山ガラスの形態としてはバブルウォール型が認められる。植物珪酸体は数百粒含まれる。花崗岩類は細礫サイズのものが多い。				

量比　◎：多量　○：中量　△：少量　+：微量　×：なし
程度　◎：強い　○：中程度　△：弱い　×：なし

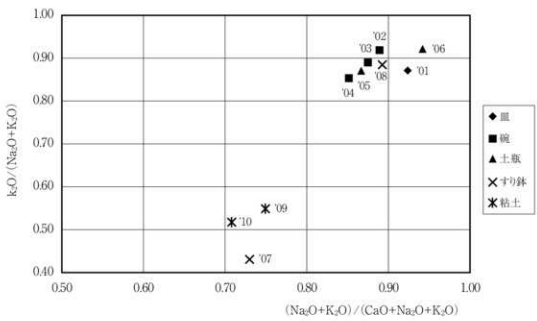
表4　中平遺跡物原出土陶器の蛍光X線分析結果（長佐古1989）

資料番号	遺物名	主要元素								
		SiO_2 (%)	TiO_2 (%)	Al_2O_3 (%)	Fe_2O_3 (%)	MgO (%)	CaO (%)	K_2O (%)	P_2O_5 (%)	合計 (%)
TMN0081	端反り碗	66.70	0.60	23.70	1.13	0.30	0.33	3.71	0.01	96.4
TMN0082	練り込み碗	66.50	0.98	22.50	3.46	0.27	0.28	3.08	0.02	97.1
TMN0083	徳利	56.20	2.65	25.70	7.47	0.40	0.31	1.64	0.03	94.4
TMN0084	駒文碗	62.10	0.91	24.80	2.56	0.77	0.57	2.83	0.01	94.5
TMN0085	すり鉢	67.90	0.78	19.90	4.06	0.42	0.73	1.13	0.01	94.9
TMN0086	土瓶	72.40	0.58	21.20	1.14	0.28	0.28	3.60	0.01	99.5



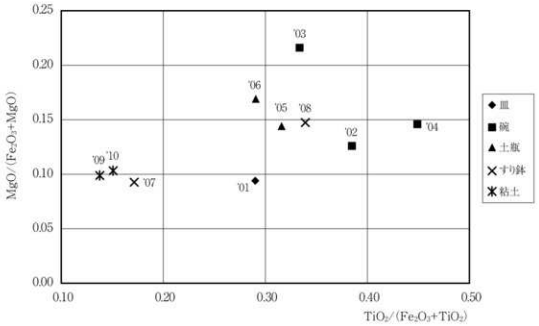
＊各図中のポイント脇の数字は資料番号（FB20060およびTMN00を省略して表記）

図1　SiO_2-Al_2O_3散布図



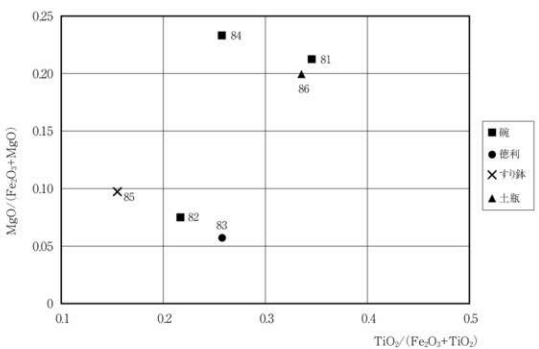
＊各図中のポイント脇の数字は資料番号（FB20060およびTMN00を省略して表記）

図2　長石類主要元素の散布図



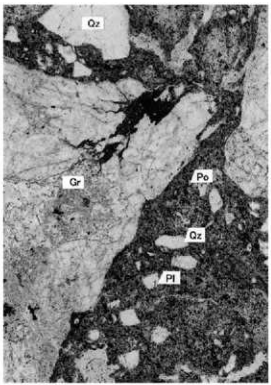
＊各図中のポイント脇の数字は資料番号（FB20060およびTMN00を省略して表記）

図3　有色鉱物主要元素の散布図

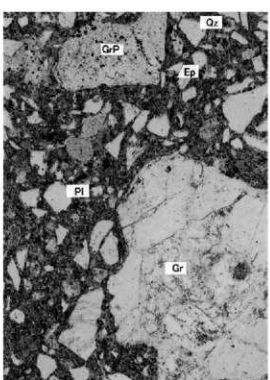


＊各図中のポイント脇の数字は資料番号（FB20060およびTMN00を省略して表記）

図4　中平遺跡物原出土陶器の有色鉱物主要元素の散布図



1．FB2006009　6号土坑　2層　粘土



2．FB2006010　1号特殊遺構　1層　粘土

Qz：石英　Pl：斜長石　Ep：緑レン石　Gr：花崗岩　Grp：花崗斑岩　Po：植物珪酸体
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラ下。

0.5㎜

写真1　薄片顕微鏡写真

第２節　後田Ａ遺跡出土窯壁等耐火度分析調査

ＪＦＥテクノリサーチ株式会社

１．はじめに

福島県双葉郡浪江町大字田尻字後田に所在する後田Ａ遺跡から出土した陶器窯の焼成温度を推定し，土坑等に残された粘土についての陶器原料としての検証を行うことを目的として，出土した窯壁と粘土の耐火度測定調査を依頼された。耐火度測定結果について報告する。

２．調査項目および試験・観察方法

（１）　調査資料

表１　浪江町後田Ａ遺跡耐火度分析資料

資料番号	出土遺構	出土層位	遺　物　名	着磁度	ＭＣ反応	外観写真	耐火度
FB2006001	１号陶器窯跡	１層	窯壁(壁土本体･茶色)	○	○	○	○
FB2006002	１号陶器窯跡	１層	窯壁（塗布層・白色）	○	○	○	○
FB2006003	13号土坑	２層	粘　　土	○	○		○
FB2006004	６号土坑	２層	粘　　土	○	○		○

調査資料ＦＢ2006001とＦＢ2006002は１個体の遺物でＦＢ2006001は窯壁の本体部分で褐色を呈する部分で，ＦＢ2006002は白色の窯壁の表層に塗布されている塗布層である。

（２）調査方法

（Ⅰ）重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量は電子天秤を使用して測定し，少数点２位以下で四捨五入した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠し，資料の外観写真はmm単位まであるスケールを同時に写しこんで撮影した。

着磁力調査については，直径30mmのリング状フェライト磁石を使用し，６mmを１単位として35cmの高さから吊した磁石が動き始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の金属の有無は金属探知機（ＭＣ：metal checker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5mmϕ×1.5mmH，2.0mmϕ×2.0mmH，５mmϕ×５mmH，10mmϕ×10mmH，16mmϕ×16mmH，20mmϕ×20mmH，30mmϕ×30mmH）を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

（Ⅱ）耐火度試験

耐火物及び耐火物原料の耐火度試験は、JIS R2204（耐火物及び耐火物原料の耐火度試験方法）

及びJIS R8101（耐火度試験用標準コーン）に準拠して測定する。

遺物資料を粉砕し，規定（量的に少量であるから寸法は第２種の小型：幅７㎜，高さ27㎜）のゼーゲルコーンを成型する。このゼーゲルコーンを傾斜80°で受台に装着し，毎分５℃で加熱する。コーンの先端が曲がり始め，受台に接触したときの温度を耐火度とする。

３．調査結果および考察

資料番号FB2006001およびFB2006002窯壁（壁土本体部分と塗布層部分），着磁度：無，メタル反応：無

外観：外観を外観写真１に示す。総重量は36.5ｇ，長さ133.1㎜，幅104.1㎜，厚さ38.9㎜。窯壁の壁土は赤褐色を呈している。１㎜前後の白色の長石類も胎土の中に観察されるがその量は少ない。赤褐色部の内面側20～25㎜位は熱影響を受けやや暗赤褐色に変色しているが，これよりも外側は赤味を帯びた褐色である。一般的な粘土類に比べ鉄分が多いと想像される。内面側には白色のモルタル状粒状層が５㎜くらいの厚さに塗られている。赤褐色の下地の亀裂などには２㎝くらいまで浸入しており，丁寧に塗り込められたように見える。両層とも比較的密度が高く，気泡などは認められない。両層を分離採取し，耐火度を測定する。

耐火度：表２に耐火度測定結果を示す。壁土本体（FB2006001）の耐火度は1400℃である。これに対して塗布層（FB2006002）の耐火度は1620℃と相当高く，耐火度の高い耐火材料が使用されている。直接的な比較耐火度はないがこれまで弊社にて調査した耐火度と比較した。製鉄炉の炉壁や粘土の平均耐火度は1308℃で，これよりも耐火性に優れた材料が使用される羽口などの平均耐火度は1376℃である。これらの耐火度と比べても窯壁の耐火度は高く，特に塗布層の耐火度は1620℃と非常に優れた耐火材料が窯壁塗布材として使用されている。

資料番号FB2006003　粘土（13号土坑），着磁度：無，メタル反応：無

外観：黒色の泥土が表面に付着した，田の土に近いやや粘着性がある灰色の粘土である。粘土中には白色半透明な珪石やキラキラ輝く雲母状の粒子も散見される。黒色の付着泥土を除去して調査資料とした。

耐火度：表２に耐火度測定結果を示す。耐火度は1390℃である。製鉄炉の炉壁胎土などに比べ80度くらい高い耐火度である。

資料番号FB2006004　粘土（６号土坑），着磁度：無，メタル反応：無

外観：湿った灰色の粘土である。FB2006003の粘土に比べ明らかに粒子は粗い。通常の粘土のように見える。FB2006003の粘土に比べ異種の粒子は少ない。

耐火度：表２に耐火度測定結果を示す。耐火度は1490℃である。製鉄炉の炉壁胎土などに比べ180℃くらい高い耐火度である。

4．まとめ

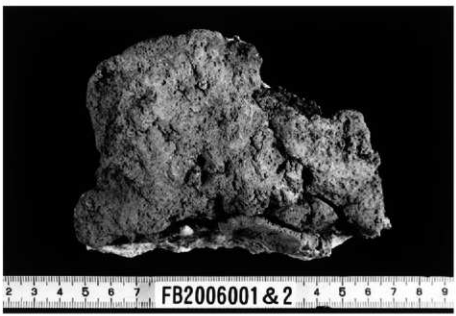
各資料の調査結果を以下にまとめる。

資料FB2006001：耐火度が1400℃の窯壁胎土である。

資料FB2006002：耐火度が1620℃の非常に高い耐火度の塗布材である

資料FB2006003：耐火度が1390℃の耐火度がやや高い粘土である。

資料FB2006004：耐火度が1490℃の耐火度が相当高い粘土である。



（資料FB2006001に対応する側）

窯壁資料の壁土本体の部分：褐色を呈する、写真下側の白色部は壁表面に塗られた塗布層で資料FB2006002に対応する部分である。

写真1　外観写真1

（資料FB2006002に対応する側）

壁表面に塗られた白色の塗布層で資料FB2006002に対応する部分である。

写真２　外観写真２

（資料FB2006001，FB2006002の1個体の側面）

写真上側の白色部がFB2006002に対応する塗布層．上側の1/5から下側の部分は褐色の壁土本体でFB2006001に対応する部分である。

写真３　外観写真３

表2　耐火度試験結果

資料番号	耐火度（SK）＊	色　調	膨張・収縮	試験錐の状況
No.1	14－　1,400℃	茶褐色	普　通	普　通
No.2	27＋　1,620℃	白　灰	普　通	普　通
No.3	13＋　1,390℃	淡　茶	膨　張	アバタ状
No.4	17＋　1,490℃	白　黄	やや膨張	普　通

［備考］　試験方法：耐火煉瓦の耐火度の試験方法（JIS R2204）に準拠
試験条件：酸素プロパン炉法
＊耐火温度：下記のゼーゲルコーン溶倒温度比較表を参照

表3　ゼーゲルコーン溶倒温度比較表

温　度（℃）	コーン番　号	温　度（℃）	コーン番　号	温　度（℃）	コーン番　号	温　度（℃）	コーン番　号
600	022	960	07a	1,280	9	1,650	29
650	021	980	06a	1,300	10	1,670	30
670	020	1,000	05a	1,320	11	1,690	31
690	019	1,020	04a	1,350	12	1,710	32
710	018	1,040	03a	1,380	13	1,730	33
730	017	1,060	02a	1,410	14	1,750	34
750	016	1,080	01a	1,435	15	1,770	35
790	015a	1,100	1a	1,460	16	1,790	36
815	014a	1,120	2a	1,480	17	1,825	37
835	013a	1,140	3a	1,500	18	1,850	38
855	012a	1,160	4a	1,520	19	1,880	39
880	011a	1,180	5a	1,530	20	1,920	40
900	010a	1,200	6a	1,580	26	1,960	41
920	09a	1,230	7	1,610	27	2,000	42
940	08a	1,250	8	1,630	28		

註：コーンは正確な温度を測定するものではない。
耐火度の数値を概略の温度で示す場合にのみ上の温度表が使われる。
この表はＪＩＳ　R0305付表による。　コーン番号＝ＳＫ番号

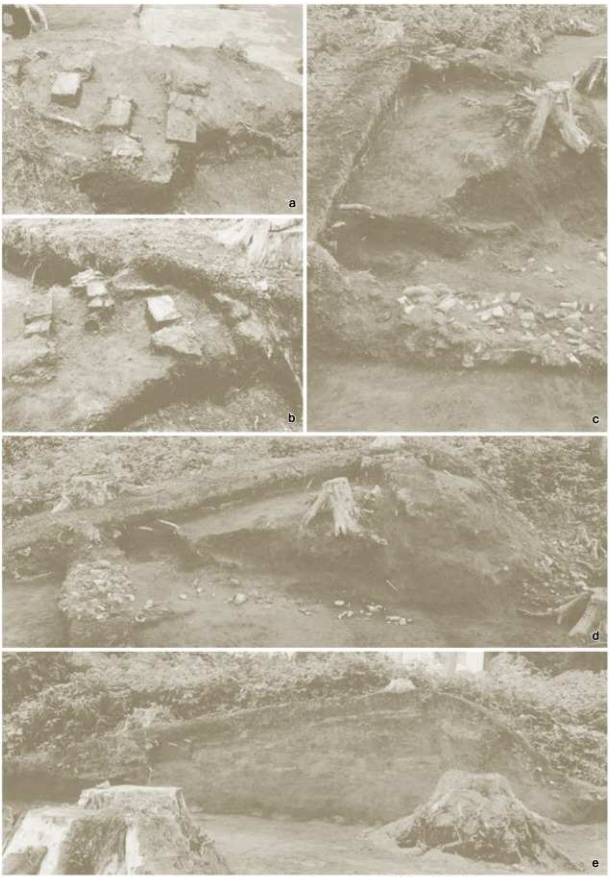
写　真　図　版

1　調査前遠景（東から）

2　調査区全景（南から）

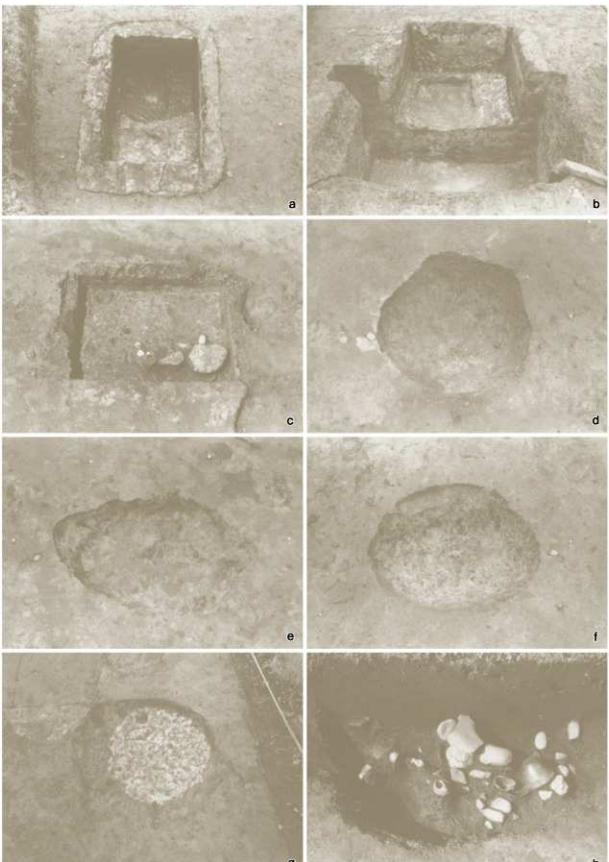
3　1号陶器窯跡現況（北から）

4　1号陶器窯跡周辺全景（南東から）



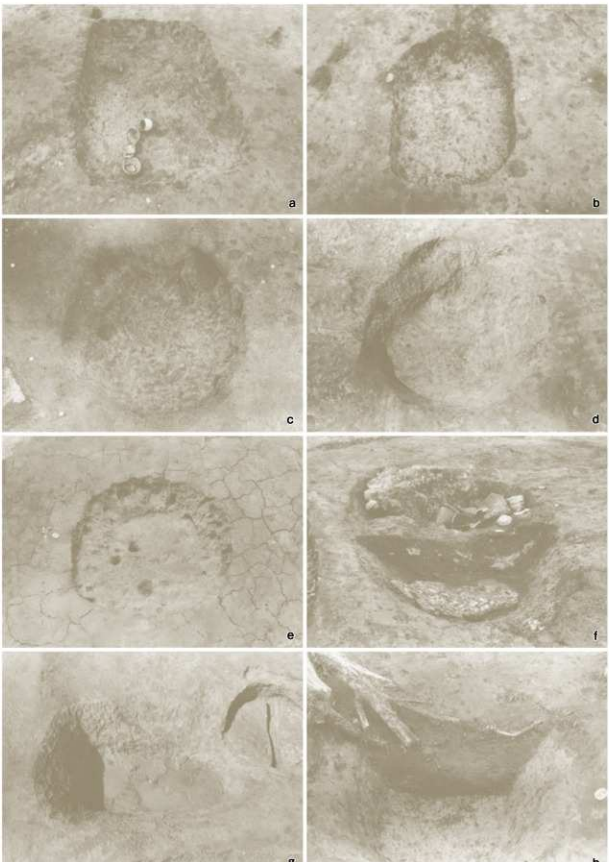
5　1号陶器窯跡

a　A面全景1（南西から）
b　A面全景2（北東から）
c　B面全景1（南から）
d　B面全景2（東から）
e　土層（東から）



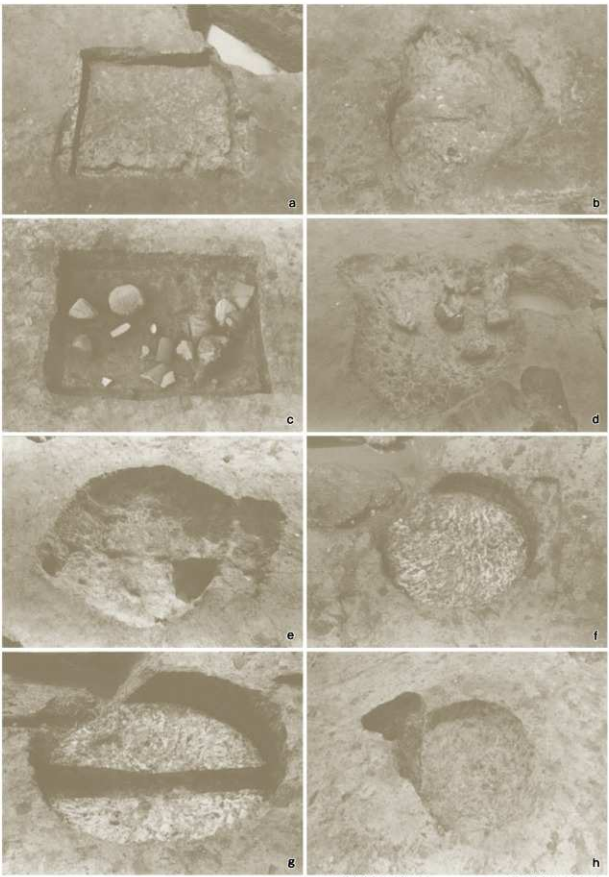
6　1～7号土坑

a　1号土坑全景（東から）　b　1号土坑断割（東から）
c　2号土坑全景（南から）　d　3号土坑全景（南から）
e　4号土坑全景（南から）　f　5号土坑全景（東から）
g　6号土坑全景（南から）　h　7号土坑遺物出土状況（南から）



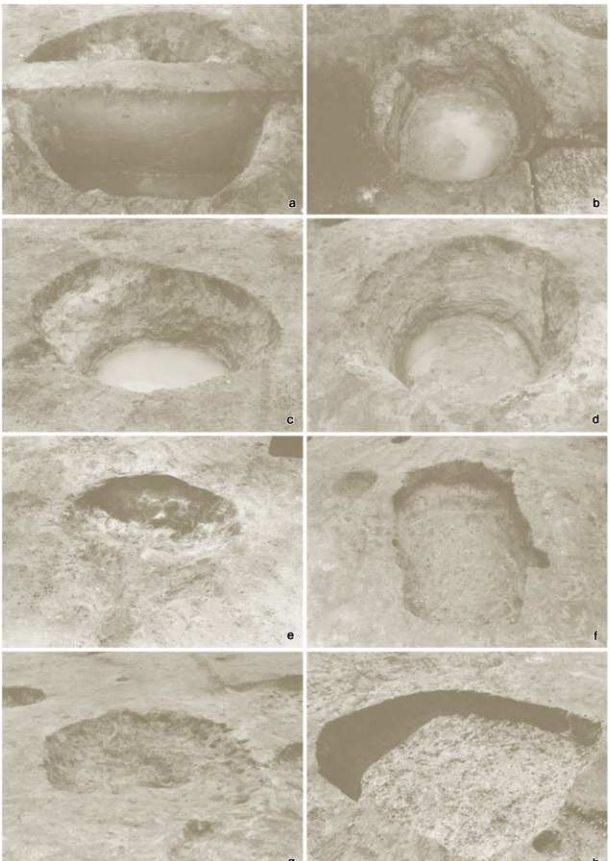
7　8～14号土坑

a　8号土坑全景（南から）
b　9号土坑全景（南から）
c　10号土坑全景（南西から）
d　11号土坑全景（南から）
e　12号土坑全景（東から）
f　13号土坑土層（東から）
g　13号土坑全景（南から）
h　14号土坑全景（南から）



8　15～21・23号土坑

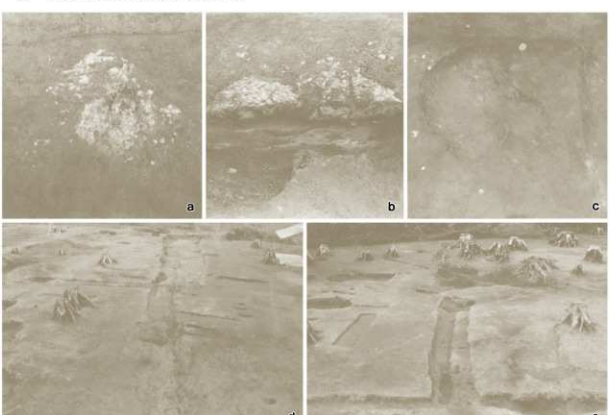
a　15号土坑全景（東から）
b　16号土坑全景（南から）
c　17号土坑遺物出土状況（南から）
d　18号土坑全景（南から）
e　19・20号土坑全景（東から）
f　21号土坑全景（東から）
g　21号土坑断割（東から）
h　23号土坑全景（東から）



9　22・24～29号土坑

a　22号土坑土層（東から）　b　22号土坑全景（南から）
c　24号土坑全景（南から）　d　25号土坑全景（北から）
e　26号土坑全景（東から）　f　27号土坑全景（東から）
g　28号土坑断割（東から）　h　29号土坑全景（南から）

10　1号掘立柱建物跡全景（北東から）



11　1号特殊遺構，1～4号溝跡

a　1号特殊遺構検出（南東から）　b　1号特殊遺構土層（北東から）
c　1号特殊遺構全景（南から）　d　1号溝跡全景（南から）
e　2～4号溝跡全景（東から）

10－12

10－18

28－26

28－31

28－9

39－5

39－4

11－4

22－3

12　1号陶器窯跡・土坑・遺構外出土遺物

29－8

20－14

20－16

23－5

31－3

23－1

31－6

21－3

13　土坑・遺構外出土遺物

30－19

32－2

32－4

32－3

33－1

33－3

33－4

40－7

14　遺構外出土遺物

33－8

34－4

33－9

21－7

30－6

30－10

30－11

30－8

40－3

15　土坑・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちょうさ54
書名	常磐自動車道遺跡調査報告54
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第453集
編著者名	山岸英夫・吉野滋夫・三浦武司・高林真人
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部遺跡調査グループ 〒960−8115　福島県福島市山下町１−25　TEL 024−534−2733
発行機関	福島県教育委員会 〒960−8688　福島県福島市杉妻町2−16　TEL 024−521−1111
発行年月日	2009年３月25日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	東経	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
後田A	福島県双葉郡浪江町大字田尻字後田	547	00131	140度56分58秒	37度29分19秒	2006年５月８日～2006年８月31日 2008年６月16日～2008年６月30日	2,300㎡	道路（常磐自動道）建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後田A	生産遺跡	近世 近代	陶器窯跡　１基 土坑　29基 溝跡　４条 掘立柱建物跡１棟 柱列　１列 特殊遺構　１基 小穴　29個	陶磁器片 縄文土器片 窯道具 石器 銅製品 銭貨	大堀相馬焼の窯跡で18世紀後半の操業。

要約	大堀相馬焼の窯跡とその関連施設を調査した。窯跡は造り替えがなされ，古い時期のものは18世紀後半，新しい時期のものは19世紀以降のものである。

福島県文化財調査報告書第453集

常磐自動車道遺跡調査報告54

後田A遺跡

平成21年３月25日発行

編集　財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査グループ

発行　福島県教育委員会　〒960−8688 福島市杉妻町２−16

財団法人福島県文化振興事業団　〒960−8116 福島市春日町５−54

東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所　〒970−0101 いわき市平下神谷字仲田100

印刷　石井電算印刷株式会社　〒963−0724 郡山市田村町上行合字南川田37−２